メロウ
―螺旋階段の君―

めけめけ

序章

　螺旋階段――立ち並ぶビルの、少し奥まったところ。或いは人が行き交うメインストリートにむき出しになっているそれは、人の気に止まることはなく……それでも僕の注意を引きつけて止まない。雨の日となればなおさらだ。空が流した涙は、まっすぐに地面に叩きつけられるのならば潔よいが、螺旋階段に引っかかった雨は、無意味な抵抗を繰り返し、それでもやはり地面に向かって螺旋を描き、落ちていかなければならない。まるであの日の僕のように。
　坂道を登り、ふと後ろを振り返れば、灰色に曇る空から降る雨は、街中を彩りを曇らせている。歩道橋の階段には色とりどりの傘が並んでいるが、僕は少しも楽しくなれないし、あなたのように雨の日に唄ったりはしない。

　「雨は、憂鬱にならない？」と僕は問いかける
　「憂鬱はきらい？」あなたは聞き返す
　そして僕は同意を求める「好きな人なんか、いないんじゃない？」
　「でも、好きになってもいいんじゃない？」　あなたは拒んだ
　「好きなの？」僕は答えを求めてみる
　「……きらいに決まってるわ」
　あなたは僕を、引き込んだ。少年が太陽の陽射しを受けて成長するように、青年が星の空にロマンを感じたように、月のようなあなたは、僕を魅了し続ける。あなたに会うことができる日は、いつも限られていた。時には場所が、時には時間が、そして時には人目が。
　いつか、あなたを自分だけのものにしたい。
　それを愛だとは知らずに、愛だとは言えずに、愛ともわからずに。
　あなたは何でも僕の望みをかなえてくれた。僕が望んだのは、あなたの細い指先、短い髪、白い肌、熱い息。でも、それ以上のものを望んだとき、不意に時間は止まってしまった。まるで鋭利なナイフで痛みを感じないほど鮮やかに切り刻んで……
　僕が痛みを覚えたとき、あなたの姿はどこにもなかった。
「あのね……もう、会えないかも……うん、会えない」
　たった一本の電話で、あなたは僕の世界の時計を止めてしまった。最初は雨で曇っていた外の景色も、それは雨だけのせいじゃないと気付いたのは、聞いた事もないような嗚咽が、僕の耳に聞こえてきたからだった。
　僕は、泣いた。
　螺旋階段――雨の日、二人はあの場所で愛し合った。場所も、時間も、人目も気にしながら、でも互いの求めに応じることをやめなかった。二人の思いが絡み合い、螺旋を上っていく感覚に溺れる。漏れる声も雨音がかき消してくれた。
　身体が燃え尽き、心が沈む前に、僕はその場所を後にする。螺旋階段を登り、部屋に戻るあなたを見送らず、気がつけば雨は止み、静寂が町を支配する。そのまま家に帰れずに、華やぐ町を彷徨ってみても、そこにあなたの姿はない。あなたは、もしかしたらどこにもいないのかもしれ

ない。
　ふと、細い路地の先に、小さな公園を見つける。運良く雨に濡れていないベンチをみつけ、そこに座って空を見上げると、そこにあなたはいた。キラキラと輝く夜空の星は、洗い流された澄んだ空気に、激しく瞬き、年甲斐もなく僕を激しい衝動に駆り立てる。
　いますぐ駆け戻って、あの螺旋階段を登り、あなたの部屋の前まで行って、行って……僕にはその先がわからなかった。答えがないと知りつつも、問題文を何度も読み返しては、解けない自分を責め立てる。生爪を剥ぐような痛みを伴うのなら、いっそ狂ってしまったほうがいいとさえ思えたのに……
　僕だけが積み重ねた時は、あなたの少ない言葉で断ち切られ、行くことも戻ることもできないままに、僕の心の中にいつまでも淀んでいる。あなたを追い詰め、悲しませたことも、仕組まれた偶然が、あなたの影を落としていくことも、僕にはすべて肯定できる。
　すべてが愛という言葉に集約できるような、そういうものではなかったことが、あなたと、そして僕の間にはあったのだし、今でもまだ、それが続いているような錯覚に陥る事がある。それでも僕はここまで歩いてきたし、これからも歩いていく。この坂道から見下ろす風景がもっと小さくなるように。
　僕は再び前を向き、終わる事のない坂道を登り続ける。あの螺旋階段を登りきったところから見える景色と、同じ景色が、見えるまで。
　あさぼやけ――あなたの部屋から出るとき、あなたは部屋の中からそっと外を覗いて、人気を気にする素振りを見せながら、僕にささやく。
「明け方の月はどこか儚げね。きらいよ、わたし」
　次にいつ会えるかと、聞こうとして、いつもはぐらかされる。でも、たしかにあなたの言うとおり、明るみだした空に溶けていく月を眺めていると、満月の狂おうしさのほうが、まだ、ましに見える。僕は惨めだ。でも、昇ったことのないこの階段をあがったところから見た景色は、すこし違ってるよな気がしていた。
　もしかしたら、あなたはその景色を見たのかもしれない。そして行ってしまったのかも知れない。
　もう、あなたは僕の耳元で囁くこともなければ、街角で後姿を追いかけたり、すれ違いざまに香るあなたの色香に心を鷲づかみにされることもないけど、雨の日、螺旋階段を見つけると、僕はあなたの姿を探してしまう。もう、どこにもいるはずものないのに
　もう、会えるはずもないのに……

１９８６年

　１９８６年、僕は悶々とした日々を送っていた。『こんなはずじゃなかった』という気持ちと『こんなもんだよ』という気持ちが、日夜繰り返され、何一つ手につかない。青春を謳歌する。そんな言葉は、恥ずかしくてかっこ悪いし、世間に喧嘩を仕掛けるほどの苛立ちや衝動はなかった。周りを見渡せば、そんなに悪い人生じゃない。いや、むしろ恵まれているといえるだろう。
　高校の成績は中学生の時のそれと対して変わらない。いや、むしろ下がったのかもしれない。いろいろあったけど中学生の頃は毎日が刺激的で充実感があった。素直に大人の真似事をどこかかっこいいと思えたし、見たくないものは大人や世論が僕らの視界の届きにくいところに隠してくれていた。何の不安も、何の疑問も、持とうと思わなければ持たずにすんだ。
　高校に入学すると、少しだけ伸びた身長は見えなかったものが見えるように、見たくないものも目に付くようになって、少しだけガッカリした。こんなものかと思うのか、そうでないのか、それはそれぞれの考えることで、僕が若者の代表というわけでも、異端児というわけでもない。ごく普通の高校生。たぶん、自分が望んでいなかった高校生。
　早く卒業したい。小学校、中学校のときはそんなふうには思わなかったけど、高校は早く卒業したくてたまらなかった。でも、だからといって卒業してなにをするかなんて、これっぽっちも考え付かなかった。一時は好きな音楽を目指そうと、そういう専門学校に通うことを考えはした。先生の反対と親の困惑した表情を押し切って、その道に進むほどの『進むべき理由』が自分の中にないことに気付き、『大学受験』という当面の目標に向かって作業を始めた。
　運が良かったのか、悪かったのか、受験した大学のうち、もっとも関心がなかった大学にだけ受かった。それはもう親は喜んだ。『浪人しなくてよかったね』と言われれば、『行きたい大学があるから』とはいえなかった。そう、僕には『進むべき理由』は、やはりなかったのだ。

　だから僕は――そう、自分が望まないことの延長としての時間をこうして悶々と過ごしている。大学は楽しい。自由だ。だが無駄に自由だ。『進むべき理由』のない自分にとってこんなに退屈なことはない。この時期、僕はタバコを覚えた。酒は中学の頃から親の目を盗んで飲んでいた。危なく急性アルコール中毒で救急車を呼ばなければならないほどのバカをやり、酒の飲み方は心得ていた。タバコ――あんなに嫌いだったタバコの煙が、あの時の僕にはどうしても必要だった。無駄だと思えるものに執着して、拘りを持つことで何か新しい価値観を生み出そうとしていた。自分を変えたい。だから髪を伸ばし、見た目だけでも音楽をやっているような格好をした。それがきっかけで、僕に声をかけてきたバンド仲間は、最初僕をすこし尖った女の子だと思っていたらしい事が、のちの飲み会でわかったときには、もう、笑うしかなかった。

　悶々としながらも、少しずつ自分を変える――いや、それは再生とか、新しいキャラクター作りとか、或いはもっとチープでマイナーな変化だったけど、それでも何もしないよりかははるかにましなように見えたし、実際にこのときの自分の変化は、今にして思えばひとつの方法論とし

ての『生き方』を見つけた貴重な体験だった。

　人は誰でも変わる事ができる。

　僕は横浜の端にある大学に通い、音楽サークルに入ったのが秋のこと。楽器ができない僕はそれでもメンバーの中ではそこそこ歌う事ができたので、故人では憧れていたドラムを練習しながらバンドではヴォーカルをやることになった。住んでいるところは東京の下町、横浜まで電車で通い、アルバイトは高校時代から続けていた地元のレコードショップ、いやレンタルレコードショップ――つまり貸しレコード屋である。

　その店に通い始めたのは中学の頃からだった。当時洋楽を聴き始めたばかりで、毎週３枚はレコードを借りて聴いていた。一度も延滞はしない。カセットテープに録音するとすぐに帰しに行った。中学生の小遣いでは、それでも大きな出費なのだ。無駄にはできない。高校の頃、そんな僕に店の人が声をかけてくれた。「バイトしてみない？時給は安いけど、音楽は聴き放題だよ」二つ返事でＯＫした。あとで聞いたのだが、僕をスカウトした理由は延滞がなく、レコードの扱いがきれいで、まじめそうだったからだそうだ。正直、うれしかった。『まじめそう』はともかくレコードの扱いには気を使っていた。自分の拘りが他人に認められるというのは、やはりうれしいものである。こうして僕は安い時給ながら、ほとんどを音楽に費やしていた出費をほかの事に使うことができたし、長髪でも問題のないアルバイト先を得たことは、結果として僕の人生において重要な意味を持つことになった。そう、あなたと出会うまでの道は、こうして開かれた……

「やっぱりさ、女より男のほうがあとを引きずるよね」
「そうかぁ？　俺なんか別れた後すぐに他の女捜すけどな」
「田端さんは、本当に女すきなんですね」
「だって、ほら、横浜なんてちょっと声かけたらすぐについてくるじゃん、田舎じゃまず、声をかけようにも１１時すぎたらみんな帰っちゃうからね」
「だれだよ、この人入学させたの。横浜の女の子はみんな田端さんに食べられちゃうよ」

　大学に行って一番面白いと思ったのは同じ学年に違う年齢の人間がいることだ。それはたった一年や二年のことだけど、やはり２歳年上の人には「さん」をつけて呼ぶ。もちろん「俺のことは絶対に呼びすてにしてくれ、浪人している事がばれる」と拒絶するものもいた。浪人するってどういうことなんだろう？そういうことを実際に聞いてみてもした。

「まさに青春の暗黒時代、二度とやりたくない」
「そーか、俺なんかやりまくりだったけどな」
「だから二浪もするんですよ、田端さん」
「うるせー、昼間はちゃんと予備校通ってたよ」
「ナンパしに？」
「そうそう、ってオイ」

　学生風情が横浜の関内のショットバーでこういう話をしながら盛り上がる。カウンターには友だちがアルバイトをしている。安く飲めるおしゃれな場所を確保することは、講義に出席しなくても単位が取れる授業と同じくらい大事だった。
「風間ちゃんはどうなの、女のほうは？」
「俺はぜんぜんですよ。昔のこと引きずってってダメですね」
　僕はみんなから「ちゃん」付けで呼ばれていた。小学生の頃はそうだったが、中、高は呼び捨てだっただけに、最初は少し抵抗があったが、その集団の中での力関係、役割、雰囲気など、人は実に絶妙なバランスで人の呼び方を決める。今は「ちゃん」で呼ばれることを悪いことだとは思わなくなった。

「へぇ、よっぽどいい女だったのかね」
「どんなタイプ？」
「あー、俺はその、どっちかっというとボーイッシュ系ですかね、好みは」
「あー、わかるわかる、俺もそう」
「っていうか、菊田、風間のこと最初ボーイッシュなかわいい子がいるとか、俺に行ってただろう」

「ぐわぁーーー、それをまだ言うか、やめてぇー」
「なにそれ、やばいじゃん」
「こえー、菊田ってそっちの気があるのか」
「だからちがうって、だって後ろから見たらそう思わない」
「まぁ、たしかに、この前終電で酔っ払いに絡まれたよ。よう、姉ちゃんって、俺は振り向きざまに低い声で、『何か御用ですか？』っていってやったら、えらいおどろいた顔してた」
「はっはっはっ、俺なんか絶対に間違えないけどなぁ」
「だって田端さんは臭いで女をかぎ分けるんでしょう？」
「田端さん、合コンやってくださいよ、いろいろツテがあるんでしょう？」
「いいよ、なんなら明日くるか？」
「うわ、行きたい行きたい」
「風間ちゃんはどうする？」
「あ、俺、明日はバイトなんでパスで」
「付き合いわるいじゃん、合コンのとき、いつもいないよね」
「いや、まぁ、そういうの苦手っていうのもあるんで」

　どんなにそれらしく振舞っても、やはり自分にはできないこともある。合コンというのは、どうにも性に合わなかった。あのバカ騒ぎもいやだが、互いの欲望を充たすために、あるいはもっと別の理由があるにせよ、僕にはそういう生き方はできない。しかし、事実、アルバイトの予定を簡単には変える気はなかった。そういうことは嫌いだった。だけどこのときばかりは、たまにはそういうこともいいかなと思うところもあった。人は変われる――だけど、どうしても譲れないところもある。しかしそれはもしかしたら、ただの言い逃れなのかもしれない。そんなことを悶々と考えながら、その日は朝まで飲み明かし、翌日は講義をサボって、昼過ぎにおきだし、学食で遅い昼食を食べてからバイトに向かった。

　バイトに向かう電車の中、僕は昔付き合っていた彼女のこと、彼女の親友のこと、その親友とのいろいろ、別れ、すれ違い、友情、いろんなことを思い浮かべた。それらのことに気持ちの整理がつき始めている。昔は思い出すことすら、心が傷つき叫びだしたくなる衝動を抑えるのに必死だった。そのことも含めて思い出に変わろうとしてる。思い出のほかに、何も残らないのか……急に人恋しくなる。今度、合コンに出てみようかな。そんな気持ちを引きずったまま、店に出たときに、あなたは現れた。それは１０月の終わりの少し肌寒い日のことだった。

　１０月になって、店長から話があると言われたとき、僕はうすうすと感じていた。この店は儲かっていない。日々売上を計算して集計を出していればすぐにわかる。これじゃ、アルバイトの給料を捻出するのがやっとじゃないか。今年一杯で店を閉める。レンタルレコード業界は、黎明期には次から次へと新店がオープンしていたが、レコードからＣＤ、著作権料の取り決めなど、様々な初回情勢の中で、衰退していった。自分自身、音楽に対する興味の対象がヒットチャートからは別の分野に移っていた。ここにいる意味があまりなくなってきていた。

　新規のお客さんには事情を説明して、それでも入会してレコードを借りたい人には案内をする。かつては一日５人は新規のお客さんが来ていたが、最近ではひとりも来ない日も珍しくない。気の知れた常連が、聞き逃したレコードを選んで借りていく。店の雰囲気も少し変わった。新譜は１０月の分までその後は入荷しない。僕も客のことよりも、店の中の音楽資産をなるべく録音しておこうと、そのことばかり気にしていた。そんなときに君は現れた。

　最初、君を見たとき、僕はドキッとした。理由は簡単だ。君はショートカットでボーイッシュ、まるで前に付き合っていた彼女のような雰囲気を持っていた。でも少しだけ大人で、たぶん学生じゃないことはなんとなくわかった。今日は土曜日。午後９時を回っていた。店は１１時まで営業だが、この時間、新規のお客さんが来ることは珍しい。この狭い空間に君と僕だけ、そのとき僕は店の音楽に山下達郎のアルバム『POCKET MUSIC』を流していた。君がその音楽に気持ちをあわせたのがわかった。君は少しだけハッピーに見えたし、僕も少しだけハッピーな気分になった。

　僕は君を目で追い、君はきっと僕の視線を感じていたに違いない。でも、まるで気付かないふりで、何かを探すのに懸命のようだった。思わず、「何か探してますか？」と尋ねようかと思ったが、そのとき、別の客がレコードの返却に現れた。「いらっしゃいませ」僕はどこか残念な気持ちで一杯になった。とたんに君との距離が離れてしまったような感覚に襲われた。こういうことは、この店でアルバイトを始めて初めてだった。

　店はビルの２階にあり、窓からは通りを一つ挟んで電車が平行して走っている。ともすれば電車の乗客と目が合うような位置関係にあるのだが、普段はブラインドを下げているので気にならない。「はい、検品終わりました」レコードのの返却の際、盤面に傷がないか、歌詞カードは紛失していないかをチェックする。手早く済ませると、その客はすぐに店から出ていった。再び君との距離が縮まる。何の気なしに、いや、どこか落ち着かない雰囲気になって、僕はブラインドの外を眺める。すろと後ろから君の視線が感じられた。君も僕を気にしているのか？いや、ここには二人しかいない。それは当然のことだろう。つまらない自問自答を繰り返しているうちに、君がカウンターにきた。

「あの、初めてなんですけど」君は門あさみの『BELLADONNA』を差し出しながら、僕を見つめた。正面からみた君に、僕はさらにドキッとした。それは未だに理由がわからないことだけど、もっとも考えられる理由は声だったのかもしれない、或いは瞳だったか……
「あ、始めてのか方ですね、実は当店は年内一杯で店を閉める事が決まってまして……」
「あ、はい、そこに案内がでてましたから、大丈夫です」
「そうですか、では、こちらが会員規約になりますので、えーっと簡単に言うと、レコードを大事に扱ってくださいって、そういうことと、レコードを傷つけたり、返却が遅れた場合の罰則、注意事項が書いてあります」
「あの、門あさみのレコードはここにあるだけですか？」
「はい、新しいものはもう、入荷しません」
「あ、新しいのじゃなくて古いのなんですけど」
「えっと、少々お待ちください」

　そういえば門あさみは女性ニューミュージックのカテゴリーじゃないところにあったような……「あ、すいません、門あさみのコーナーはこちらになりますね、確か過去の作品はすべてあったと思います」当時、ジャンルわけは店長の好み、独自の判断で一般的にニューミュージックと言われていたものでもアーチストによってはジャズフュージョン扱いにしていたりする。返却の際、時々そのことをわすれて違う場所に入れてしまう事がある。昼間のアルバイトは、その辺が少しルーズだったりする。
「わ、よかった、これ、聴きたかったんです」

　あなたの声、そして笑顔は僕の中の何かを大きく揺さぶった。事務的な手続き、会員証を作るのに多少の時間がかかる。それまでのわずかな時間、僕は探し続けた。あなたにかける言葉、あなたの関心を引くような行動、なんでもいい。何かしなきゃ、早くしなきゃ……「お待たせしました。篠田季久美さんですね。身分証明書をお返しします。はい、どうぞ」だめだ。思いつかない。ふと、一瞬僕は思いつきで自分の目線をあなたからはずして他の方をチラリと見た。するとあなたもその方向を振り返る。
「え？」と、あなたが口に出して言ったのか、言わなかったか、でも、明らかにそういう表情をしたように僕には見えた。
「あ、あの、他にもいろいろありますから、店を閉めるまでの短い間ですけど、宜しくお願いします」
　そんなことを他の客に言ったことなどなかった。どうということのない、業務的な言葉だったかもしれないけど、そのとき、それは僕の精一杯だった。精一杯の愛情表現だった。
「はい……ありがとう」
　無駄のない動きで、レコードを小脇に抱え、財布をカバンにしまいこむ。ガマグチの財布、なんでガマグチなんだろうーーと思っているうちに、あなたはドアを開けて出て行ってしまった。

　静寂の中で山下達郎のレコードがまるで何かのドラマの始まりかエンディングのように流れていた。また会いたい。返却の予定日は、僕の出勤日ではなかった。

　火曜・木曜・土曜の午後と日曜の午前、これが当時のアルバイトのシフトだった。返却予定日によって、レンタル料金もかわってくる。旧作はだいたい１週間のレンタルだ。日曜日、彼女に会える可能性はきわめて低い。夜ならまだしも、日曜日は朝１１時から夕方６時までの勤務。もし今日来店するとしても昨日と同じ時間だろうと思っていた。

「門あさ美……聴いたことはないんだよなぁ」
　門あさ美のコーナーを眺める。６枚のレコードがおいてある。もし、全部のレコードを借りるとして、それは一度に１枚とは限らず、場合によってはあと１～２回しか店に来ないかもしれない。そのタイミングで会える可能性はごくわずかのように思えた。諦めるつもりはなかったけが、それなりに妄想は膨らんだ。もしかしたら次に来たときには男を連れてくるかもしれない。あの時の洋服の感じだと、電車に乗って出かけた帰りというよりは近所の買い物の後みたいな少しラフな格好だった。あのときは、そういうことに頭が回らなかった。客の個人情報は見ようと思えば見れる。だけど、そういうことを今までしたこともないし、しようと思ったこともなかった。気にはなってどんな住所が書いてあったか思い出そうとしてみるものの、全く思い出せない。

「キクミって……珍しいといえば珍しいか」
　閉店が決まってから、週末の昼間は比較的常連のお客さんがまとめ借りをする事が多くなった。そういうことの妨げになら内容に、忙しい時間にはＦＭをかけっぱなしにしている。最近開局したＦＭ横浜は、日本のラジオ局とは思えないような軽快なテンポで英語のジングル、流暢な英語で曲紹介をするＤＪ、まさにおしゃれを売り物にしていた。時々流れる交通情報が浮いて感じられるほどだった。

　夕方４時、ちょっとしたエアポケットのような時間、客足が途切れる。がらんとした店内に軽快な音楽が流れる。門あさ美でも聴いてみようか。そう思ってレコードジャケットを眺める。タイトルを見てもパッと思い浮かぶようなものはなかった。とりあえず今ここにある中で一番新しいのは『麗　ｕｒａ ra』門あさ美はいつも返却されたレコードを棚に戻すときに戻すところを間違えそうになる。そのくらいの印象しかない。

　カランカラーン

　不意に店のドアが開く。ドアが開いた事がわかるようにベルが備え付けてある。
「いらっしゃいませー」
　反射的に声を上げる。カウンターに戻ろうとする動作の中でお客さんを確認しようとして思わず声を上げそうになる。あなたは昨日よりもさらにラフな格好でそこに立っていた。

「こんにちは」
「いらっしゃいませ、どうも」
　照れくさそうに挨拶をするあなたにもまして、きっと僕の表情は恥ずかしいくらいに笑顔が引きつっていたに違いない。怒ったり、泣いたりする感情を抑えることは簡単だけど、うれしいと行く気持ちを隠すのは、そもそも経験があまりないのだ。

「なんか要領がわからないうちにいっぱい借りるのヤダなって思って、昨日は１枚しか借りなかったんだけど、すぐに録音終わっちゃって……テープいっぱい買っちゃった」
　彼女の手には、僕が決して買いに行かない店のレジ袋に３本パックのカセットテープが入っていた。定価に近い、割高な買い物だが、この店で買うよりは少しだけ安い。

「あ、サクラ堂で買ったんですね。この辺ならキムラヤって店が一番安いですよ」
「えー、そーなの」
「あ、このことは内緒でお願いします。うちでもテープ扱ってますんで」
　なんて可愛らしい笑顔なんだろう。いや、そうじゃない。彼女の顔そのものは、もしかしたら僕の好みじゃない。だけど、なんだろう、この不思議な感じ……

　たったこれだけの会話のやり取りで、僕はすっかりあなたの虜になってしまった。もちろんその時は気がつかなかった。まさか、自分かこういう形で誰かを好きになるなんて、まるで思っていなかった。

「門あさ美、お好きなんですね」
「うん、好きよ」
　そんな言葉でドキドキしている自分が信じられなかった。
「すいません、僕不勉強で、門あさ美はまだ聴いたことないんです」
「そう、そうね、私もあんまり聴いたことないわ」
「え？」
「だから聴くの」
「このレコードはどうでした？」
「よかったわよ。でも、違うの。この曲じゃないの」
「あ、何か曲を探してるんですか？」
「そうなんだけど、はっきり覚えてないのよ、だから探してるの」

　それはまるで僕には歯が立たないような、まるっきり異質の存在だった。あなたの言葉は、その一つ一つがまだ見たことのないような宝石のような輝きを持っていた。もっともっと話をしたい。こんなふうに他人に興味を抱いたのは生まれて初めての経験だった。今までの恋とはまったく違うもので、僕はそのときそれを恋だとは気付かなかったくらいだ。

「バンドとか、やってるんですか？」
「あ、はい、でも、まだ、始めたばかりで」
「すごーい、バンドやってる人とか周りにいないから、興味あるわ、で、なにをするの？
ギター？」
「いえ、僕はまだ、楽器は、ドラムを練習してるんですけど、今のバンドではボーカルを」
「えー、かっこいい、で、で、どんな曲やるんですか」
「Ｔレックスとかわかりますか？」
「ごめんなさい、ちょっとわかんないかも、洋楽だったらスティービー・ワンダーとか好きだわ
」
「スティービー・ワンダー良いですよね。僕も好きです」
「ね、いいよね、じゃあ、こんどゆっくりお話しましょう」
「はい、是非」
「バイトはいつ出てるんですか？」
「えーと火曜、木曜、土曜の６時過ぎとあとは日曜日の朝から６時までです」
「そうね、じゃ、火曜か木曜日かな。じゃあね」
「ありがとうございました」

　話をしている間、僕はずっとあなたの瞳を見つめていた。こんなに誰かの瞳をじっと見つめたのは初めてだったかもしれない。それをつぶらというのだろうか？彼女の瞳は白い部分がほとんどわからないくらい、小さくて、でも、涙がこぼれるんじゃないかと思うくらいに潤んでいる。あなたが出て行った後、僕は一人見せの中で小さな、小さなガッツポーズをとり、心の中で大きな声で叫んでいた。こんな自分の一面があるとは、いままで全く気付かなかった。それとも、僕が変わったのだろうか。そして次にあなたに会うまでの長い夜を過ごすことになる。それは予想をはるかに超える長く、長く、そして苦しい時間だった。

　すべては思い通りに事が運ぶと思っていた。そんな淡い期待は、ひどく簡単に裏切られる。火曜日も木曜日も、彼女は現れなかった。最近では夜９時をすぎると２～３人しか客が来なかった。窓の外を歩く人波を、ブラインドの隙間から覗いている。彼女が通ったらわかるかどうか、正直自信がない。勤め先は錦糸町であることは、身分証明書を照会する時にチラリと見えた定期の行き先でなんとなくわかった。ＯＬであれば、これまであったときのようなラフな格好とは違って、それなりに身なりを整えているだろうし、大人の女性と付き合った事がない僕にはまるで自信がなかった。自信がなかったけど、それでも僕は窓の外を歩くあなたの姿を想像しながら、髪の短い女性を目にすると、あなたではないと確信できるまで、その姿を追い続けた。

　むなしく流れる音楽は、それがどんなに楽しげな曲であっても、僕をあざ笑うか、からかうようにしか聞こえない。どんなに一生懸命に思い出そうとしても、あなたの顔の細かい特徴や服装を思い出すことはできない。なぜなら僕はあなたの瞳に目を奪われて、ほかの事にはなに一つ注意が行かなかった。あなたの瞳と声だけが、僕を狂わせている。

　店を占める時間になっても、僕の妄想は止まらない。あなたが閉店間際に飛び込んでくるんじゃないかと、そんな淡い期待を持って、いつもよりもゆっくり帰り支度をした。ちょっとした空気の流れで扉が揺れてドアの開閉を知らせるベルが小さく鳴る。一瞬のときめきと落胆は、諦めることをしない僕の心を揺さぶる。戸締りを確認して電気を消し、ビルの階段を下りる。外は思いのほか寒い。もう、冬はすぐそこまで来ている。道路のちょうど迎え側に屋台が出ている。美味しいと評判のたこ焼きは、そういえば、去年の今頃はよく食べていたなと思い出してはみたものの、あなたと屋台のたこ焼きを食べる事ができたら、どんなに楽しいだろうという救いのない妄想にまでたどり着いたときには、僕は、不機嫌になるしかなかった。

　胸のポケットからＫＯＯＬを取り出す。当時ＢＯＸのタイプも発売されていたが、僕にはどうして違う味に思えて、紙のケースのものを愛煙していた。ミリタリーショップで買ったＺＩＰＰＯライターのオイルの香りが好きだった。ＺＩＰＰＯはベルトに専用のホルダーをつけて持ち歩いていた。タバコに火をつけ、首を縮ませながら下を向きながら歩く。時々タバコの煙が目に入る。ひどく顔をしかめながら、両手をジャンバーのポケットに突っ込みながら家路を急ぐ。

　ふとあなたが借りたレコードのアーチスト、門あさ美のことを思い浮かべる。この二日間、彼女のアルバムを聴いてみたけど、何一つ自分の心に残るものはなかった。好きでもなければ嫌いでもなく、あなたと共有すべきものを何一つ見出す事ができなかった。だからなのだろうか？

　だから、あなたは、現れなかったのだろうか？

週末になればあえるかもしれない。もし、今日か、その前の日にあなたがきたのなら、土曜日の夜にあなたとどこかに食事に行きたいと誘うつもりだった。そういう事が僕にできるかどうかわからなかったけど、あなたにだけなら、そういうことができるような気がしていたのに。

根本近くまで吸ったタバコを排水路に投げ込む。空を見上げると、うっすらと雲のかかった月が、頼りなさ気に浮いている。明るさもだが、三日月のようなシャープさもなければ満月のような狂おしさもない、半分になりかけの月だった。街の明かりが騒がしくて、星もどこか遠慮がちだ。都会の夜空には恋人と語り合うようなロマンスはなにもない。あなたはどんな夜の顔をしているんだろうか？無意味な信号を無視して、僕は歩く。なるべく街燈のすくない道を選んであるく。夜に忍び込み、自分がどれだけロマンティックになれるかを試すつもりで、星の見える人気のない街路地に身を隠す。そんなことであなたを感じることなどできないけど、それでも僕にはそうするしかなかった。あなたに会えなかったというその痛みだけでも、僕の心の中に刻み込みたかった。

親兄弟のいる暖かい部屋に戻ったとき、僕は、きっとあなたの面影を忘れてしまうに違いない。忘れることが嫌なんじゃない。そこに戻らなければならない自分を見つける事がどうしようもなく嫌だった。そう、僕には帰る場所がある。でも、僕のこの気持ちを共有できるはずもなく、だからこそ、帰りたくないと思うこともあるのだと、そういうことに気付いたのは、このときが初めてだったかもしれない。あなたと出会って、何もかもが変わり始めていた。

眠れない夜

　お付き合いのあったご近所が引越しす際に譲り受けた家具調のステレオ。マンションの４畳半のボクの部屋は小学校に入学したときから使っている勉強机とステレオそれと母の嫁入り道具だったタンス――子供の頃に張った特撮ヒーローや何かのおまけでついてきたシールがベタベタ張ってある―寝る時はそこに布団を敷く。それで部屋は足の踏み場もなくなる有様だった。バイトから帰ると、マンションの廊下側の窓を開け、冷たい空気で部屋を充たす。ステレオのスイッチを入れるとボッっと言う音と主に、真空管が温まってくる。部屋の明かりは消して、家具調のステレオの青白い光に買ったばかりのカセットデッキのデジタルピークメーターが、まるで生き物のように闇の中を這う。

　あなたが、どんな女（ひと）で、今、どこで、何をしているのか

　そんなことに思いをふけているうちに、あなたの存在が少しずつ、無視できないものになってくる。それまでわだかまっていた心の中のモヤモヤが、まるで嘘のように晴れ渡り、あなたの後姿が見えてくる。タバコに火をつけ、メンソールを含んだ煙が、体のかなに忍び込み、逃げるように吐き出されていく。シンとした部屋の中に、７０年代後半のクロスオーバーがステレオから流れてくる。不意に誰かと話がしたくなる。こんな時間にそんな事ができるはずもなく、ラジオのチューナーを回してみるが、僕のチャンネルにあう番組には行き当たらなかった。布団に寝転がり、天井を見つめる。

　年上、だよな。社会人か……

　学生であることは、ある一定の自由――管理された範囲での制約された、それでも余りある無為な時間を持てあまし、何かに依存して生きている。学生と社会人とでは、生きるというこ事態が、能動的か受動的かということだけでもちがう。でも恋愛においてはどうなのか？妹のようなタイプの彼女や少し大人びた雰囲気を持った同級生と付き合った事はあるけど、共有している部分は大きい。学校が一緒なら親といる時間よりも長いということになるし、親と電話で話すことは１分も必要ないが、彼女との電話は１時間や２時間じゃ足りなかった。きっとそういうことは、ないのだろう。

　わからない、わからないから気になるし、気になるから忘れられない、忘れならないということと、好きになるということは、似ているけど違う。好きという言葉では、どこか幼稚な気がしてならない。ただ……そう、ただ、会いたい。会って話をしてみたい。そうすれば、何かわかるかもしれない。でも、どうやって？次に会えたとして、

　僕は何をすればいいのだろう……いや、なにが、できるのだろうか？

　そんな自問自答を繰り返すうちに、布団にもぐりこまなければならないほどの寒さを感じ、窓を閉める。いつもよりも少しだけステレオの音量を大きめにする。明日は朝からはずせない講義がある。それには出席しないと……でも、まぁ、そういうこともある。あの無味無臭な大学の講義は、想像していたよりもはるかに退屈で、何のために大学にいったのか、希望を打ち砕くのに余りある退屈。そう、僕の今の生活には緊張感がない。大学に進んだこと、周りはみんな喜んでくれたし、羨ましいとも言ってくれた。新しい出会い、新しい刺激、そんなものがあるという錯覚は、３ヶ月もすればすっかり色あせてしまい、ほとんどの学生はただただ受身に回るしかなくなる。だから僕は……

　だから、僕はバンドを始めた。授業をサボって、そういうことに時間を費やすことで、何かに閉じ込められるような強迫観念から逃げ出そうとした。そして、そんなときに、あなたは現れたのだ。そこに何らかの意味を求めることに、なんのためらいが必要なのか？

　僕は布団を頭から被り、意味の無い言葉を呟いた。眠れないと思っているうちに、いつの間にか外が青白いでいる。ぼんやりとした空間は、夜と昼とが交差する異次元のような不思議な感じがする。１日ごとに外の空気はひんやりとして、秋の終わり、冬の到来を予感させる。ぼんやりとした意識の中で、窓を開け、外の空気を吸い込む。冬は、もう、すぐそこまで来ている。そしてまた、想う。

　あなたに、会いたいと……

　あなたは、何の前触れもなく――それはまるで、僕があなたに会いたいと思う、息が詰まるような苦しみに耐えるために費やした時間を一挙に飛び越えてしまうほどの唐突さで現れた。

「いらっしゃいませ」
　思わず声が上ずりそうになるのを堪えて、あなたを店に迎え入れた。
「こんにちは」
　なんということのない、ただの挨拶――だけど、僕には特別なことだった。考えてみれば、そんなふうに挨拶を返してくれるような人間関係を、お店の客と持ったことはこれまでなかったのだ。それは、偶然、土曜日の夕方、いつもは１８時から店に入る。だがこの日、昼出の人に頼まれて、早めに勤務交代したのである。

　それを運がいいというのか、或いは自分が避けられていると気落ちするのか……そんな二元論では言い表せないような感情が内側からこみ上げてくる。これは偶然じゃない、なにかの必然。なにか特別な意味があるに違いない。

「こんにちは」
　他に何も思い浮かばず、戸惑うより先に、そう口走っていた自分に驚く。あなたはどこか意外そうな――そうじゃない、不思議そうなというのが適切なのか――ともかく僕がたじろぐような、しなやかな身のこなしでカウンターに近づいてきた。一瞬僕は、期待をしてしまう。
「ごめんなさい。忙しくて来れなかったの」という言葉が、次に用意されているものだとばかり思った。でもあなたは、まるでそんなことを覚えていないかのようにただ僕の返却の手続きをぼんやりと眺めているだけだった。

　耐え切れなくて、僕は思わず口にした。
「待ってたんですよ。美味しいたこ焼きを食べてもらおうと思って」僕は嘘をついた。勝手にあなたに期待をして、勝手に裏切られて、それで嘘をついて困らせよと思った。

「え？なんで……でも、そう、そうだったの」僕には何の考えもなかった。ただ、あなたを困らせようと思っただけで、次にどうするべきか、なにをするべきか、まったく思いつかないまま、あなたが借りたレコードの盤面をチェックしながら、どうにもあなたと視線を合わす事ができなかった。

「じゃあ、今度、埋め合わせしないとね」

　一瞬、僕にはあなたが何を言っているのか理解できなかった。僕の中で時が止まる。僕の引き

出しは空っぽで、どこを探しても、何もできやしない。言葉に詰まる僕をあなたは恐ろしく優しい笑顔で見つめている。僕の意地悪な挑戦をまるで気にしてはいないという態度であしらう。僕はあなたに負けてしまった。

「ねぇ、明日はバイト、何時までだっけ？」
「１８時……夕方６時です」
「予定は？」
「え、ええ、どんなに遅くても６時半までは店を出るのにかかりません」
「じゃあ、６時半に……そうね、駅前でいいかな、それとも他にいい待ち合わせ場所ある？」
「あ、それなら、ファミレスとかなら、この店の前の道を、下っていったところにあるの、ご存知ですか？」
　店の前の通りは緩やかな坂道になっていて、そこを下りきったところのそばに、高校生の頃からよくお茶をしていたファミレスがあった。それはまったくの行き当たりばったりなアイデアで、むしろ断られて別の提案が出てくるくらいの気軽なものだった。

「あ、あそこね。うちのすぐそばよ。あそこのチーズケーキ、そこそこ美味しいのよね。コーヒーはいまいちだけど。いいわ、じゃあ、店の前に６時半でいいかな」

　今から思うと、二人の出会いや、いろんなことは、驚くべき偶然と奇遇――なるべくしてなったとしか思えないようなことが続くことになる。これはその最初の出来事だったのかもしれない。もしも、このとき、この場所でなかったら……僕の運命と、あなたの運命が交差したこの場所は、あと二月もすればなくなっていたのだし、僕とあなたが出会って、もし、すぐにあなたがこの店に現れたら、僕は運命など、信じなかったかもしれないし、それに抗うことをしたかもしれない。

　動き出した歯車は、砕けて壊れてしまうまでまわり続ける。まるで運命の車輪のように。

どうして、あなたは

　あなたと出会えたこと。それは僕の人生にとってどんな意味があるのだろうか。きっとあなたならこう言うだろう。

「意味なんてないわ。男と女、ただそれだけよ」

　今の僕には、それがわかる。でも、あの頃の僕には、あなたの言葉一つ一つが、まるでパンドラの箱のように思えたし、それをあなたに見透かされたくなくて、僕はいつも強がって見せてた。少なくともあなたの前では……

「お疲れ様」
「待ちました？」
「ううん。今来たところよ」
「じゃあ、入りましょうか？」

　外の薄暗さに比べて、店内は無駄に明るい。バイト先から店までの緩やかな坂道を、それでも少しだけ駆け足で、曲がり角まで――覗き込むようにファミレスの灯りに照らされたところにあなたの姿を探す。あなたの姿は見えない。まだ、来ていないのかと、半分安心して、半分不安になり、ゆっくりと周りを見渡しながら――あなたの姿を探しながら店の前まで来ると、あなたは不意に階段の上から声をかけてきた。ファミレスは１階が駐車場になっていて、店内には階段で２階部分まであがるつくりになっている。あなたはその階段の真ん中あたりにすこし屈みながら僕に声をかけた。それはどことなく、僕の心の裏側をくすぐるような、妙に照れくさい感覚だった。

　どうして、あなたは――どうして、あなたは階段の上にいたのだろう。まるでかくれんぼでもするかのように、『みつかっちゃった』というよな表情をする。まるで人目をはばかる様な……

「２名様、お待たせしました。おタバコは、お吸いになりますか？」
「はい、あ、僕吸うけど、いいですか？」
「大丈夫よ。私も吸うから」
「ご案内いたします」

　席に案内され、まずは二人ともタバコに火をつける。
「あ、メンソール、同じだね。でもＫＯＯＬ吸っている人って珍しいよね」
　あなたはカバンも持たずに、ジーンズにスニーカー、赤いチェック柄のシャツの上に白いセーター。化粧は控えめなのか、それとも全くしていないのか、あの時の僕にはわからなかった。

そして多分、していなかったのだろう。

「お腹すいている？何か食べる？」
「あ、まだそんなに好いてないかな」
「じゃ、コーヒーとケーキのセットにしよっか？今回はほら、私がたこ焼きの埋め合わせってことで、ご馳走するわ」
「あ、いいんですか。じゃあ、お言葉に甘えて……あ、あのぉ、あそこのたこ焼き、本当に美味しいんで、その、今度一緒に食べましょう」
「うん、楽しみにしてるわ。じゃあ、どれにする？えーっと、あれ？名前、聞いてなかったっけ？」
「あ、あの、風間です。風間晃司」
「風間君、ね、風間君はどれにする？」
「じゃぁ、チョコレートケーキで」
「私はチーズにしようかな……あ、でもこのチョコレートケーキもおいしそうだね。ね、一口、味見させてくれる？」
「い、いいですよ、一口といわず、二口でも、三口でも」
「あら、三口も食べたらなくなっちゃうわよ」
「へぇ、そんなに大きな口には見えませんけどね」
「女はね、デザートは別ばら、お腹も口も一つじゃないのよ」

　それはとても不思議な距離感。あなたは、僕が今まで知り合った、どんな女性よりも遠い存在なのに、まるで初めて会った気も、初めてこうしてお茶をする感覚でもない。思えばそう、僕はずっとあなたのことを考えていた。僕の身勝手な妄想は、ことごとく裏切られていく。でも、そのたびに僕はどきどきしている。どうしようもなく、あなたの事が気になって仕方がない。なんでもいい、あなたのことをもっと知りたい。そしてもっと、僕のことを知って欲しい。僕は、僕は……

　そして気付くむなしさ。そう、僕には何もない。あなたに話すようなことは、何もない。僕がどこで生まれ、どこで育ち、どんな子供だったか、どんな女の子と付き合ってきたか、どんな音楽に夢中なのか。そんなこと、話しても、ものの１０分で話は終わってしまう。知ってもらいたいのに、わかってもらいたいのに、なんてちっぽけで、薄っぺらい人生なんだ。

　注文をしてから、さして時間がかからずにケーキが出てきたとき、正直僕は安堵した。あなたは、どうだったのだろう。お互いのケーキを一口ずつ分け合って食べた。ケーキを褒める言葉なんて、美味しいとか、甘いとか、そんな言葉しか知らない僕を、まるであなたは気にしない素振りで「コーヒーは３杯はおかわりしないとね」とおどけて見せながら、簡単なお互いの身の上話、学校がどうだとか仕事がどうだとか、どこに通っているのだとか、今のアルバイトはどう

だとか、そんな話をした。そして３杯目のコーヒーを注文したとき、あなたは思いもよらないことを口にした。

「あのね、ケーキのすごく美味しい店があるの、銀座のソニービルのところ、一緒に食べに行かない？」
「あ、いいですね。銀座だったら、僕、いろいろと行きたいところもあるし、あ、ちょうど見たい映画もあるんですけど、映画、一緒にみませんか？」
「どんな映画？」
「ちょっと怖い系なんですけど、ＳＦホラーって感じです」
「へぇ、私、怖い映画好きよ」
「本当ですか！　えっと『ザ・フライ』って映画なんですけど、ご存知ですか？」
「へぇ、どんな話？」
「フライってなんだかわかります」
「フライって空を飛ぶとか？」
「蝿です。ハエ、ほら、ボクシングの階級とかフライ級とかいうでしょう？　あれってハエみたいに素早いっていう意味なんです」
「へぇ、すごい、そうなんだ。風間君って結構物知りなのね」
「い、いや、これは、友人にボクシングをやってる奴がいて、たまたま聞いた事があるんです」
「バンドやったり、ボクシングやっている友達がいたりするなんて凄いわよ」
「そ、そうですか？」
「私なんか、本当に暗い学生時代だったんだから……まぁ、いいわ、その話は」
「へぇ、でも聞いてみたいです。その話」
「そう、じゃあ、それはそうね、今度たこ焼きをおごってくれたら時にね」
「えー、映画を見たときじゃないんですかぁ？」
「それはそれ、これはこれよ」
「じゃあ、いつにします？あ、でも、ちょっと待ってください。確か、日本での公開はまだ、これからなんだよな……」
「じゃあ、『ぴあ』とかで調べておいてくれる？」
「あ、わかりました。えっと……調べて、どうしましょうか」
「連絡方法ね、お店でって、いうわけにはいかないわよね。そういうの」
「そうですね。もし良かったら、電話を……」
「電話かぁ、じゃ、電話番号教えてくれる？来週、私から電話するわ。いつならいい？」
「明日、朝バイトをして、まっすぐ帰れば、遅くとも８時過ぎには、家にいます」

　４杯目のコーヒーのおかわりをするかわりに、僕は店員からボールペンを借り、ペーパーナプキンに電話番号を書いてあなたに渡した。コーヒーとタバコの匂いとともに、あなたは去っていった。

　当時、映画の情報やデートスポットを調べるツールは雑誌だった。映画や劇場、コンサートの情報はぴあという雑誌を読めば、２ヶ月先ぐらいの予定まで大体調べることができた。音楽もＦＭ雑誌や楽器関連の雑誌を読めば、誰がいつどんな新譜を出すのか、世の中の評価はどうなのかが、載っていたし、そういうものを酒の肴に明け方まで語り合うこともしばしばあった。そういうことを男同士では共有できても、女性と話をしたことはなかった。大体が、意見が合わないのである。ルックス重視、タレント重視の彼女たちの会話は、まるで別の世界のことのように思えたし、そこでいまロスやニューヨークではこんな音楽が流行っているとか、最近のハリウッドの特撮技術はすごいとか、そんな話をしたところで、それは、どちらかといえば格好の悪いことだった。

　あなたは、僕を受け入れてくれた。僕はそう思った。そう、大事なことはあなたがどうかではなく、僕がどう思うかだった。あなたにだけは、僕の誰にも見せたことのない部分を見せてもいいような気がした。なにかに絡みとられて、思うように動く事ができなかった僕の手足は、まるで何かの力を得たように自由に動かせる気がした。心の迷いが薄れて行く。それまで怖いと思っていた事が、まるで嘘のようだった。僕は、何かの、力を得た。

　そんな僕をぴあはガッカリさせた。『ザ・フライ』の公開日は１月になっていたし、今、あなたと一緒に見たいと思うような映画は見つからなかった。がっかりはしたけど、なぜか不安はなかった。次の日、あなたからの電話を直接僕が取れずに、母が電話に出たことに比べれば、たいした問題ではなかった。

「あ、もしもし、あ、実は調べてみたんだけどーー」
　僕は正確に、そして、正直に情報を伝えた。映画の公開が１月だということ、今見たい映画がないこと、そして、そのことについて、ぴあを見ながら、別のプランを一緒に考えよう。できれば、早いうちに会いたいと。

「いいわよ。それじゃあ、土曜日はバイト何時から何時までだっけ？」
　彼女は週休二日で土日が休み。僕は土曜の午前は絶対に出席しなければならない講義があったし、午後は６時から１１時までバイト、日曜は朝１１時から夕方６時、二人が週末に会える時間は限られる。

「土曜日の夜中か、日曜日の６時過ぎね……」
「たこ焼きの屋台が出るのはちょうどそのくらいの時間なんですよ、たこ焼き一緒に食べます？」
「あー、たこ焼き食べたいね。でも、どうする？たこ焼き買って、どこで食べる？」

「あ、そうですよね。土曜のバイト終わりの時間なら、店占めてから、たこ焼き食べることはできるけど」
「うーん、でも、それだとあまり落ち着いて話とかできないでしょう？」
「じゃ、この前のファミレスに、たこ焼き持ち込んでこっそり食べちゃいましょうか？」
「えー、それはまずいでしょう、それにうす～いコーヒーでお腹がたぷたぷになっちゃうわ。私の部屋ならもう少し美味しいコーヒー出せるわよ」
「あ、おいしいコーヒー、飲みたいですね」
「来る？」
「行きたいです」
「そのかわり、たこ焼きご馳走してね。私、６個は食べたいわ」
「えっと、じゃあ、バイト終わって、たこ焼き買っていきます。たぶんこの前と同じくらいの時間になると思います」
「じゃあ、６時半に、同じ場所で」
「わかりました。で、一応なんですけど、もし、何かでいけなくなったりしたら……」
「大丈夫よ、１０分待ってこなかったら、諦めるわ」
「あ……わかりました。じゃあ、６時半で」

　電話を切った後、どうにも家族の顔が見れなくて、すぐに部屋に閉じこもる。小さな声で「よっしゃ！」とガッツポーズを決めるも、電話番号を聞けなかったことを少し残念に思った。それでも、あなたの部屋に招かれたことだし、あなたにもいろいろと事情があるのだろうから……僕とちがって、彼女は大人だ。

「大人って、大人の女のひとって、なんなんだ……」
　大人になること、大人になりたくないこと、こんな大人でありたいこと、そいうことは良く考えた。恋愛の対象としての大人は、僕にはまるで見当がつかない。年下にはあまり興味がなかったし、強いて言えば、憧れの先輩というのは確かにいた。でも、それは勝手に憧れる存在であって、決して手の届くものでも、手を出していいものでもなかった。僕にとって歳が上だというだけで、女性はなんとも神秘的なものだったのかもしれない。神秘的か、あるいは懐疑的か……つまりアンタッチャブルな存在だった。

　一人暮らしの女性の部屋に入るのは初めてじゃない。大学の同級生の部屋には何度か言った事がある。でもそれは、友だちであり、彼氏彼女の関係になりえない、残念な関係だ。そういうこととは、まるで違う意味を持っている。うきうきした気分と同時に、ちゃんとしないといけないという、かしこまった感情がわいてくるのは、なんとも滑稽だった。彼女に呆れられないように、しないといけない。

「だって、あの人は、大人なんだから……」

　とはいえ、それはやはり、期待する気持ちが半分、或いはそれ以上だったにちがいない。理性ではなく本能がそれを懸命に下隠しに隠そうとしていたに違いない。

「期待して、裏切られるのは、いやだ」

　子供っぽい、僕のそれは、きっとあなたに隠そうとしても隠し切れないような、見え透いたものだったに違いない。だけど、あの時の僕は、誰にも悟られることなく、誰にも知られることなく、僕する気付くことなく自分自身の邪な感情を抑え切れたと思い込んでいた。

「時間通りね」
　彼女はやはり、身を隠すように、ファミレスの階段の踊り場で僕を待っていた——待っていてくれた。もしもあの時、あなたが別の場所で——そう、意地悪にも、身を隠して、僕の慌てふためく様子を伺おうと思っていたのなら、僕は恥ずかしさのあまりに叫びたくなるような衝動を、日に何度も覚えるようなトラウマを背負ったに違いないのだから。

「たこ焼き、冷めないうちに食べないと」
　僕はまるでなんでもなかったような素振りで、右手に大事にぶら下げたレジ袋——決して中身がどちらかに偏らないように、慎重に運んできたたこ焼きの入った袋を両手に持ち替え、中身を覗き込むようなしぐさをした。彼女は、やはり、この前あったときと、それほど変わらない格好をしていたが、ただ一つ違っていたのは、スニーカーではなくサンダルだったことだ。彼女の住んでいるところはこの近所だと言っていたのは、本当のようだった。

　あなたは階段を軽やかなステップで駆け下り、まっすぐ僕のほうに向かってくる——いや、飛び込んでくるような勢い———瞬僕が怯みそうになる手前で、まるで重力や慣性の法則に逆らうような不自然な動きで、急に立ち止まり、僕が両手で持つレジ袋の中を覗きこんだ。
「うわー、おいしそう、アツアツのうちに食べないとね！　行こう！」

　レジ袋から立ち込めるほのかな熱気とソースの少し焦げたような、甘く食欲をそそるような香りに混じって、あなたの香り——たぶんんそれは、シャンプーかコンディショナーの香りで初めて嗅ぐ香りではないが、僕をどきっとさせた。僕はどうやら、思った以上に匂いに敏感なようだ。

「こっちよ」
　唖然とする僕を——たぶんそんな様子だったにちがいない——あなたは、またしても僕にはマネのできない身のこなしで、すっと、僕の横をすり抜け——そのとき、一番強くあなたの香りを

感じた――気付いたときには、僕の背中が見える位置にあなたはいた。その行動はまさに僕の予測を裏切る行動だった。なぜなら、僕の背中の方向には、道はない。ファミレスの前を通る道を僕が来た方向に戻るのか、その先に行くのか。当然に僕はその先に向かうものだと思っていた。彼女の家はそんなに近いのか……

「この建物の３階なの」
「えー、本当に近いんだね。目の前だ」
「しーっ、ほら、他に住んでいる人の目とかもあるでしょう？」
「あ、そういうことね。了解、了解」

　囁くような小さな声で、僕は答えた。でも、それよりもあなたの少しかすれた、小さく、押し殺した声は、どこか妖艶で罪深い気がした。僕の体の芯の近いところで、何かがゾワゾワとする感覚――それは今までに経験をしたことのないような、隠微で理性とは遠い存在のものだった。僕はそう、あなたの後姿を見ながら欲情をしていたに違いない。あの時、僕にはそれがどういうものなのか、皆目見当がつかなかった。他の誰かに対して、こんな気持ちになったのは初めてだったし、もしかしたら、最後だったのかもしれない。

　階段を上るあなたの後姿を、僕は一生忘れることはないだろう。あの時覚えた、この感覚は消える事のない傷跡のように、僕の中に深く刻まれている。あなたの部屋は３階の角部屋、４階建てのアパートの、正面玄関からは一番遠く、そこから上がるよりも、駐輪場を横切り、非常階段から上ったほうが近かった。それに、そのほうが人目につかない。その階段は、微妙に周りからは死角になっている。灯りもやや薄暗い。二人の静かな足音が暗くなったばかりの闇夜に滑り込む。あなたの部屋の前に来たとき、ようやくに僕は心の中のざわめきを抑えることに成功した。

　あのとき、螺旋階段を時計回りにまわりながら上って行くあなたは、一体何を考えていたのだろう？もしかしたら、あなたの中に、まだ、僕はいなかったのかもしれない。今の僕には、そう思えてならない。あなたと僕は、同じ階段を、同じように上りながら、実はぜんぜん違う空間を歩いていたのかもしれない。螺旋の中でたまたまめぐり合った二人の時間と空間。それは僕には突然すぎ、あなたにとって、どうだったのか？

　今となっては知ることもできない。知りたいと、思わない。

　あなたは僕の目の前から消えることはない。

　だけど、二度と交わることのない時間軸の中で、永遠に螺旋をまわり続けるのだろう。

運命の歯車が音を立てて回り始める。想像もできないようなスピードで……でも、僕は、そんなことにも気付いていなかった。そう、僕は、まだ、なにもわかっていなかったのだ。あなたのことも、僕自身のことも……

あなたの部屋

　それを殺風景といえば、そうなのかもしれない。シンプルな生活感。ドアを開けると、部屋の奥まで通して見えてしまう。ダイニングキッチンと言うには少し狭く、ひとり暮らしのキッチンには広すぎる空間。思ったよりも少しひんやりしている。角部屋だからなのか？

　玄関にはおよそ必要最低限のものしかない。彼女は、ヒールやブーツと言ったものはあまり履かないようだ。
「どうぞ」
「おじゃまします」

　玄関のすぐそばに電気のスイッチがあり、ダイニングキッチンの明かりは、十分すぎるくらい明るい。天上が少し低いのか。およそすぐに使うのだろう、或いは使っだばかりの食器が数点、目に入った。僕は何をしている。この部屋に他に誰かが出入りしてるのではないかという、そんな目で見ている自分が忌々しかった。でも、それをやめることはできない。奥の部屋は６畳、セミダブルのベッドにはベージュ色のベッドカバー、少し地味な感じがした。この部屋には、およそ女の子らしいものがない。目にするものは、少しばかり大人びた感じのするものばかりだった。タンスも木目調のかなり落ち着いたもので、女性の一人暮らしは、案外とこういうものなのかと、不思議な感じがした。生活感がないと言うよりは、あまりにも飾り気がない、どこか無防備で、素朴な感じ。

　意識するなといわれても、やはりベッドがすぐそこにあるというのは、どうしようもない。ベッドとダイニングキッチンの間、つまり奥の部屋に入ってすぐのところに小さなコタツがある。ベッドとコタツの間には、人一人がやっと通れるほどの隙間しかない。そこを案内されるままに通り、僕は部屋の置くに腰掛けた。白いクッションはそれほど使用感がない。まだ新しいのか、全く使っていないのか。

　あなたは僕を座らせると、台所でやかんに水を入れ、火にかける。僕はたこ焼きをレジ袋から出しながら、ひとり部屋の中を観察する。ちょうど目の前にラックがあり、そこにミニコンポやちょっとした小物が収納されている。ラックの一番上に、この部屋で一番似つかわしくないものを目にした。小さい子供の人形――それは目のパッチリ開けた可愛らしさと裏腹に、どことなく不気味さにもにた、違和感を感じる。何よりもおよそ全く同じに見えるその人形がまるで双子のように２体、並べて置いてあるのである。唯一、女性らしい飾り？いや、それにしては、どこか腑に落ちない違和感がある。

「お砂糖とかミルクはいる？」
　あなたの声は、どこまでも落ち着いていて、よどみがない。

「あ、ブラックで」
「あら、大人ね」
「友だちの影響です」
「そうなの」
「えぇ、まぁ、そうなんですけど」
「そう……」

　そう、僕は会話のきっかけを掴もうとして、部屋の中をいろいろ観察してたんだ。でも、何一つ思い当たらない。かわいいとか素敵とか、きれいとか、そういう何気ない御世辞をこういう場合は、言うものなのだろけど、何一つ見当たらない。妙に静かで、正直居心地がよくない。気になるのは人形の事ばかりだった。

「今、お湯を沸かしてるから、もう少し待ってね。どう、殺風景な部屋でしょう？」
「え、そうですね。ちょっとビックリしたというか、あー、テレビ、ないんですね？
「そうなの、テレビはね、一人暮らしするときに、いらないって……でも、パパがね、あ、パパってお父さんね。パパがテレビくらいって、無理に買おうとして、喧嘩になりそうになったのよ」
「へぇ、テレビ、ないと不便じゃないですか？」
「ないと、静かでいいわよ」
「まぁ、確かにそうですけど」
「バラエティ番組とか、ワイドショーとか好きじゃないのよ」
「でも、ほら、最近は音楽番組とかもいろいろあるし、僕はやっぱりＭＴＶとか見たいから」
「あ、音楽は良いわよね。でもラジオがあるから」

　そうじゃないのだろうと思った。どうしてそう思ったのかは、わからないけど、なぜか、そうじゃないと思った。でも、疑う根拠は何もないし、何より僕には経験がなかった。そう、なにもわかってないし、なにも知らないのだ。ただ、感じることだけは、できた。あなたと出会って、僕は、恐ろしいほどに感覚が研ぎ澄まされて行くのを感じていた。この静かな空間の中で、あなたの体温を感じるかのような、あなたの匂いを嗅ぎ分けるかのように、あなたの言葉の震えを感じるかのように。

「あの、人形……」
「え？あ、あれ、あの人形ね。もらい物なの。かわいいでしょう？」
「あ、もらい物なんだ……なんだろう、なんだか気になっちゃって」
「人形の目とか、怖がる人？」
「あ、それあります。ウルトラマンとか怪獣なら平気なんですけどね。リカちゃん人形とか、ちょっと苦手かもしれないです」

「わたしも、あんまりリカちゃんは好きじゃなかったかなぁ……どっちかっていうとバービーだったかなぁ」

　ピィーーーー

　台所でやかんが二人の会話をさえぎる。いや、むしろ、それで都合が良かったのかもしれない。これ以上、この話はしたくないのかも、とそのとき僕は感じていた。あなたが席を離れた後、僕はもう一度、人形を眺める。その表情は、どこか僕を歓迎していないような感じがしていた。だけど僕には、それを無視するしかなかった。目の前のたこ焼きは、冷めてしまい、少しくたびれてきていた。それでもここのたこ焼きはおいしい。僕はあなたが戻ったとき、何か別の話題がないかと、もう一度部屋の中を見回した。部屋の空気に慣れてきたのか、僕は少しだけ、眠たくなってきていた。

コタツを囲って

　暖房器具は、コタツだけなのか。この部屋は妙にしんとしている。その分コタツはとても暖かく感じる。

「はい、コーヒーどうぞ。お口にあうか、わからないけど。どう？寒くない？大丈夫？」
「あ、コタツであったまっちゃって、なんか眠くなっちゃいました」
「一応ストーブもあるんだけど、電気ストーブ。でも、あんまり使わないんだ」
「コタツだと、寝ちゃわない？」
「うん、寝ちゃう。ベッドに入る前にそのまま寝ちゃう」
「風邪引くでしょう？」
「うん、風邪引いちゃうね」

　僕が何を言おうとも、あなたはある一定の距離から動こうとしない。でも、時々、僕が全く予想していないことに反応する。僕はそのたびに、あなたに惹かれてしまう。あなたと同じ形のマグカップ。可愛らしいというよりは、機能的。どこかのお土産か何かだろうか？何か書いてあるけど少し薄くなっていて読みづらい。

「食器、あんまり持ってないのよ。家にあるものを適当に詰め込んできたんだけど、今度買い換えないとね」
「一人暮らしをして、そんなに日がたってないんですか？」
「そうね、まだ、３ヶ月くらいかな。良く覚えていないわ」
「そうなんだ」
「さ、食べましょう」
「食べよう。もう、さめちゃったけど、ここのたこ焼きはそれでも美味しいんですよ」

　そういうものか、と思うしかなかった。あなたはまるで、僕とは違うところ、違う世界の人のようで、でも、もしかしたら、僕がおかしいのか。ともすれば笑ってしまうような会話のやり取りは、おかしな緊張感と妙な居心地のよさを感じる。おいしいといいながら、あなたがたこ焼きを食べ、僕は、一生懸命にこのたこ焼きの美味しさについて、ほかのどんな店の、どんなたこ焼きと食べ比べて美味しいとか、何度か買おうと思っていったら売れ切れ直前だったとか、そんな話をした。最後の１個を、僕が食べ、あなたはティッシュで口の周りを吹き、僕にも一枚渡してくれた。

「で、あの銀座に映画を見に行くって話なんですけど、調べてみたら、まだ公開が先でーー」
「えーっと、お正月映画だったんだっけ、その映画」
「そうそう、年が開けて最初の土曜日からなんだ」

「まだ、先ね」
「うん、だから、他の映画にしようかなって思ったんだけど」
「いいわ、待つわ。私、その映画見てみたいし……なんか面白そうなんだもの」
「うん、面白いのは間違いないよ」
「すごい自信ね」
「昔から映画は好きでさ、新聞に映画の広告とか出てるのを切り抜いたり、映画のチラシを集めたりしてたんだ」
「へぇ、そうなんだ。ねぇ、一番好きな映画は何？」
「そうだな……」

　そのとき、なんと答えたのか、全く覚えていない。『スターウォーズ』と答えたかもしれないし、『２００１年宇宙の旅』と答えたかもしれない。或いは、『大脱走』や『タワーリング・インフェルノ』。いずれにしても、僕は正直には答えなかったのだと思う。少しだけ、大人びた作品の名前を挙げようとして、失敗したのだと思う。

「私は、『哀愁』が好きなの。何度見ても素敵よ。あの映画」
「けっこう古い映画だよね『哀愁』って、確かハリウッドを代表する恋愛映画の一つだっけ」
「そう、さすが詳しいのね」
「多分、映画は見たことないけど、映画音楽を集めたレコードの中にあったような……」
「そうね。音楽も素敵よ。でもストーリーがとても素敵なの」

　僕は、次にあなたが『哀愁』がどんな映画で、どういうところが好きかという話を始めるかと思って、一瞬身構えた。でも、あなたはあっさりと話を変えてしまう。
「じゃあ、映画はお正月の楽しみね。そのときにおいしいケーキをご馳走するわ」

　話が終わってしまう。いや、次なんて、ないかもしれない。正月まではまだまだ時間がある。ありすぎる。テレビがないことを疎ましく思った。こういうときテレビがあれば、テレビをつけながらだらだらと時間を潰しながら、条件反射的な話題で間をつなぐことができるだろうに。
「普段は、食事とかどういてるの？料理とかするの？」
「するわよ。なに？疑ってるの？」
「そういうわけじゃないけど、なんとなくどうなのかなぁと思って」
「作るわよ。私だって」
「本当ですか？」
「えー、信じてくれない？」
「食べてみるまでは……」
「いいわよ、今度作ってあげる。何が食べたい？」
「そうですね……魚料理とかどうです？僕、魚大好きなんです」

「えー、魚なの？」
「もしかして、魚、触れないとか」
「そんなことないわよ。ただちょっと、レパートリーが少ないだけよ。普通、こういうとき、男の子はカレーとか肉じゃがとか、言うんじゃないの？」
「すいません。変わり者なもので」
「違うでしょ。意地が悪いんでしょう」
「そう、意地悪。男の子は好きな女の子に意地悪するっていう、アレです」

　自分で言って、少し驚いた。あの時、どんな顔をしていったのかは、想像するだけで叫びたくなる。でも、あなたはそんなことは気付いていないか、気にしていないのか、すぐに手帳をカバンから出してスケジュールを確認した。
「いいわよ。来週でいい？」
「多分、大丈夫です」
「じゃ、もし、都合が悪かったら前の日にでも電話してね。番号教えるわ。それから……」
「え？」
「あ、いいわ。ちょっとうちの留守電変わっているから」
「変わっているって？」
「聞けばすぐにわかるわ」

　そういってあなたは後ろを振り返った。ベッドの横のラックにおいてある電話機を操作しだした。それは、今でも忘れることのできないあなたの声。留守番電話に録音された、あなたの肉声。

「Please , tell me your name?」

「詳しいことは、また今度ね」
　あなたは、まるで僕をじらすかのように――例えあなたにそんなつもりはないのだとしても――しなやかに僕の問いかけをかわした。平日は電話に出れないことが多いとあなたは言う。そして、この留守電にも意味があるという。

「外国の人とお付き合いがあるとか？」
「そんなんじゃないんだけどね。それに英語圏の人ばかりじゃないし……」
　今でこそ、それはそんなに珍しいことではないのかもしれないが、当時は日本人以外の知り合いがいるというだけでも、どこか人間としてのステイタスが違う次元の人に思えた。少なくとも、あの頃の僕にとっては。

「Please , tell me your name?」
　それは薄いピンク色をした少し小さめの留守番電話機。そこに吹き込まれた声をあなたは少し照れくさそうに――でも２回、僕に聞かせてくれた。ゆっくりと、丁寧な発音で、でも所詮留守番電話の音質である。そういう意味では聞きづらいかもしれない。でも、僕はどうしようもなく心を奪われてしまう。あなたのその囁くような声は、僕の脊髄の芯に集まる神経をまるで弦楽器のようにかき鳴らした。

「なんていっているか、わかる？」
「そりゃ、わかりますよ。あなたのお名前をお聞かせください、ってことでしょう」
「よかったぁ、ぜんぜんわからないって言われたら、どうしようかと思っちゃった」
「えー、それはどっちの意味で？僕は確かに英語は苦手だけど、このくらいの英文ならさすがにわかるよ」
「ちがうわよー。わたしの発音。今ね、そういう勉強してるの」
「勉強？英語の？」
「うーん、英語って、そう、語学って言うことじゃなくて、コミュニケーション？」
「コミュニケーション？誰と？」
「いろんな人と」
「いろんな人って……どんな？」
「どんなって？そんなんじゃないわよ」

　僕はこの話のおとしどころがわからずに、ただ流れに任せるしかなかった。
「いっぺんになんでもじゃ、つまらないでしょう？続きはまた今度ね？」
　それこそ、僕には意味がわからなかった。あなたはどうして、僕を拒むの？

　そして僕を誘うの？

「今度って、じゃあ、季久美さんの手料理を食べながらってこと？」
「あー、そう、そうね、そうだわ、季久美さんっていうのは、なんかへんね」
「へんって？」
「へんよ、そんなふうに呼ばれることないもん」
「じゃぁ、キクちゃんとか？」
「キクちゃん？キクちゃんねぇえ……」
「いや？」
「そう呼びたいなら、いいわよ」
「いやなの？」
「名前はあんまり好きじゃないの」
「好きじゃないって……そうかなぁ、結構いい響きの名前だと思うけど」
「季久美ってちょと、きつすぎない？」
「そうかな？久美とか多い名前だけど季久美は珍しいし、いいと思うけどなぁ」
「どうして、季久美だと思う？」
「菊…九月生まれとか」
「凄い！よく知ってるね」
「花札で……」
「そうなのよ。９月に生まれたからキクミだなんて、恥ずかしくていえないわ」
「もしかして３日が誕生日とか」
「でしょう？　ほらぁ、わかっちゃうでしょう」
「まぁ、でも理由はそれだけじゃないんでしょう？語呂合わせ見たいなのは、あるとしても、親御さんの思いが何かしら込められているわけでしょう？」

　言って僕は、少しうかつなことをしゃべってしまったかと後悔した。案の定、彼女の表情は少しだけ曇ったようにみえた。でも、すぐに僕を見つめながら、こういった。
「ありがとう、やさしいのね」

　その日のことは、あとは良く覚えていない。多分僕は腕時計をみて、そして、もうそろそろ帰らないと、そんなことを言ってコタツからたちあがり、玄関まで行ったところで週末に電話をすると、そう約束したのだと思う。そしてあなたが僕が帰ろうとするのを引き止めてくれることを期待したのだと思う。だけどあなたはそんな僕の気持ちに気付かないふりで、そっけなく僕を見送るだけだった。まるでもう、心はここにないといった感じで……。あなたは別にそんなことはなかったのかもしれないが、僕にはそんなふうに思えて、少しだけ悔しい気がして、そしてそれ以上に寂しい気がしてならなかったのだと思う。

　そしてまた、あなたと会うまでのいくつもの長い夜を越えていかなければならない憂鬱が、僕の心をかきむしったにちがいない。あなたのくれた電話番号が書いたメモを何度も、何度も眺めながら、僕はすぐにでもその番号に電話をしたくなる衝動を抑え、次の週末が来るのを待ち続けたのだった。

　悲しいこと、辛いことに耐える時間は、とても長く感じるのだろうとは、想像していたがあなたとあうことを待つ時間は、僕の想像をはるかに超える苦痛に長時間耐えなければならなかった。あなたとのことを思い出せば、あなたと過ごした時間よりも、同じ時間軸にいながらもあなたと会えない時間の苦しさのほうが、はるかに鮮明に覚えている。その反動は当時の僕の行動に少なからず現れていたようだ。

「どうしたのよ、最近、なんか良いことでもあった？」
「え、何でですか」
「いや、ほら、最近テンション高くない？風間」
「そうですか？」
「本人が気付いていないというのが、一番の証拠だよ」
「そういうものですか？」
「そうさ、俺にも幸せ分けてくれよ」
「そんなんじゃないですよ」
「じゃあ、どんなんだよ。ズバリ女でもできたか？」
「だから、すぐそうやって……」
「すぐ顔や態度に出るタイプだな、風間」
「あ、もう、本当に鋭いというか、大迫さんにはかなわないですね」
「伊達に歳くってないからなぁ。若造」

　大迫さんは、２浪でこの大学に入った。いわゆる「さん」ナンバーの一人だ。僕は大体がこの「さん」ナンバーの人たちと相性がいい。風間家の長男の父のもとに生まれた長男である僕は、物心ついたある時期から異常に兄や姉を欲しがったという。生まれてまもないころ、父方の兄弟の長女、父からみるとすぐ下の妹ということになるのだが、晩婚だった父よりも早く嫁ぎ、僕が生まれた頃には二人の子供がいた。年上の男女の従兄弟。それはまるで本当の兄と姉のように慕っていたし、面倒を見てくれていたようだ。

　僕が４歳のころ、父が田舎から東京に出たとき、従兄弟と離れるのがいやで、僕はとても寂しがり、そして泣き出したそうだ。東京で弟が生まれ、僕は弟の面倒を良く見たそうだ。でも時々、母に向かって「御兄ちゃんかおねえちゃんが欲しい」とねだり、母を困らせたそうだ。中学の頃にはもう、そんなことはすっかり忘れていたが、僕が音楽にのめりこんだきっかけは、当時一番良く遊んでいた友人の兄の影響だ。僕はそこでクイーンやキッスとであった。高校では放送部に入り、お昼にはＤＪまがいのことをして、洋楽をかけまくった。その放送部の部長は、ギターをやっていた。こうして僕は先輩に憧れ、バンドをやりたいと思うようになった。僕の人生は、少し年上の兄貴分に影響され続けている。それは今でも変わらないのだと思う。

「はいはい、観念しますよ。でも、ここだけの話ってことでお願いしますよ」
「やっかむやつ、多いからな」
「そうでしょう？それにまだ、『できたって』わけじゃないんで」
「セックスがか？」
「ちょ、ちょっと、なんですかそれ！」
「顔が赤いぞ、かわいいな、お前」
「大迫さん、からかわないでくださいよ。僕はツッコミは得意ですけど、突っ込まれるのはどうも苦手で」
「そうだろう？おれは気付いていたぜ」
「これだからＡＢ型の人は嫌なんですよ」
「なんで？ＡＢ型で何が悪い」
「天敵なんです」
「天敵？ＡＢ型が？」
「そうですよ。僕の２０年弱の人生を振り返れば、Ｂ型の人間にとって最大の敵はＡＢ型です。年上ともなればなおさらです。増して女なら、逃げるしかない」
「なんだよそれ」

　大迫さんは、うっかりすると『先輩』と呼んでしまいそうなほどに、或いは『兄貴』と呼んでしまいそうなくらいに、僕の中では絶対的な存在だった。他人から見れば、何が凄いということはないのかもしれないが、僕にとってプライベートのことで相談をできそうな人は、当時、この人くらいしかいなかった。

「俺の２０年強の人生経験から言わせてもらえばだ、女はやるまでわからんぞ」
「そういうものですか？」
「そういうものだ……年上ならなおさらだ」
「え？」
「年上だろ、その女」
「何でわかるんですか？言いましたっけ、僕？」
「顔に書いてあるよ」
「なんて？」
「お姉さまって」
「ぼ、僕はシスコンじゃあ、ありませんからね。もちろんロリコンでもないですけど」
「で？脈はあるのか？」
「部屋までは、入れてもらいました」
「おー、やるじゃんか！どんな手を使ったんだよ、おい、俺にも教えろこの野郎！」
「そんなんじゃないですって、僕は何も……ただ……」

「ただ、なんだよ、やっぱ、なんかあるんじゃんか？雑誌の特集でも読んだのか？『Ｈｏｗ　Ｔｏ年上の女の落とし方』とか」
「ちがいますって、僕はあの手の雑誌は読みませんよ。ただ、ちょっとした心理学というか、そういうのを利用して、その人が僕に関心があるのかなぁって、試してみただけです」
「なんだっけ、『悪魔の心理学』ってやつか？」
「本を読んだことはないんですけどね。そんなことが好きな……前に話しませんでしたっけ？中学時代からの腐れ縁の悪友が、そんなこと話していたなぁって、ただそれだけです」
「で、その悪魔みたいなテクニックを使って、女の部屋までは侵入できたわけか？やるな風間」
「人のことを空き巣か強盗みたいに言わないでください大迫さん」

　この人と、彼女のことを早いうちに共有できたことは、僕にとって救いだったのかもしれない。彼自身、二浪をしてまで六大学以上のランクを目指していたにもかかわらず、まったくの滑り止めだったこの大学にしか合格しなかったことは、彼のプライドをズタズタにしたようだ。最初彼は、一定以上の距離を他の学生ととっていたが、ある飲み会をきっかけに、僕等二人は意気投合し、兄のように慕うようになった。彼は言う。

「挫折した奴は強いって言うけど、あれは嘘だよ。挫折なんか経験しないで、どこまでも行く奴はどこまでも行くし、どこまでも強い。挫折なんて経験しないほうがいいに決まっている」
「そういうもんですかね。でも、大迫さんは、やっぱ強い人だと思いますけど」
「強いんじゃないよ。挫折を経験するとな、強がるのがうまくなるんだよ」
「強がるのが……うまくなる？」
「そう、だから挫折を経験した人間は強いように見えるってだけさ。でもそれが武器になるとわかったときに、何かが変わるのさ」
「何かって、何がです？」
「それは教えられないな。別料金だ」
「えー、お金取るんですか！」
「人生の先輩のありがたい言葉を、ただで聞けると思っているほうがあつかましいんだよ」
「あつかましさこそが、若さの武器です」
「やるなぁ風間。もう一杯飲むか？」
「飲みましょう」

　僕が大迫さんに不義理をしてしまうまでの間――そう、特にあなたと別れてからは、いつも一緒に居たような気がする。あなたと別れ、そして大迫さんと疎遠になるまでが、僕の人生の一つの区切りだったのかもしれない。

酒とタバコと女と男

　ビールはあまり好きじゃなかった。当時は酎ハイが流行っていたが、僕はウイスキーに拘っていた。マイルドセブンは吸わなかった。吸うなら洋モク。軽いタバコが流行っていたけど、僕はＫＯＯＬだった。コーヒーならブラック。音楽ならヒットチャートは追いかけない。僕は世の中の流行ごとに少しだけ抗うことで、自分の個性、自分らしさを保とうとしていた。ときにその価値観を誰かと共有したくて、バカをやった。無茶をした。でも、振り切ることはできないし、駆け抜けることもできない。それを中途半端だと認めたくなくて、あがいていた。

　女の子のこととなれば、やはり強がるしかなかった。女の子の趣味趣向に自分が合わせるなんてとんでもないことだと思っていた。あなたはそんな僕の気負いをまるで気付かないようで、気にしない素振りで振舞う。そして僕は素直になれる。少しばかりの背伸びをしながら、それでもあなたに甘えることを僕に許せるゆとりを与えてくれた。僕が少しだけ無理をして高いウイスキーを買って行けば「美味しいね。でも、あなたがいつも飲んでいるお酒でいいのよ。私なんか２杯も飲めば、お酒の味なんかわからなくなっちゃうんだから」といって、僕をほっとさせてくれた。彼女が吸っていたタバコは同じメンソールだけど少し軽かった。およそ女性をターゲットにしているだろうその銘柄も、二人が同じタバコを吸ったほうが、なにかと楽だった。僕はあっさり『ＫＯＯＬしか吸わない』という自分のこだわりを捨ててしまった。

　僕は、一人で夜を過ごすとき、あなたを抱くことばかり考えていた。でも、あなたを前にすると、あなたを抱きたいという衝動よりもあなたをもっと知りたいという好奇心がそれを邪魔した。僕はあなたを見つめる事が好きだった。僕の言葉に、あなたがどんな表情をするのか。あなたを困らせるにはどうすれば良いのか。あなたと少し困った表情は、その場の時間を止めてしまうかのような空気の硬直と、止まってしまった時間が慌てて流れ出すような揺らぎの中で、部屋に飾った絵のように僕を虜にした。

　でも、僕には全てを受け入れきれずにいた。あなたが少しずつ語り始めたあなた自身の過去のこと、そして現在進行形で起きていることは、１９歳の僕には手に余るものだった。それでもなお、僕があなたの相談役として、いや、そこまで行かなくても話し相手として、必要としてくれるのなら、僕はそれでいいとさえ思っていた。そう、そう思えていたうちは、僕の心は穏やかだったのかもしれない。

「私ね、会社の上司と不倫してるの」
　あなたは、僕が凍り付いてしまうようなことを平気で言う。
「なぜかな？風間君には何でも話せちゃう感じ。不思議ね」
　僕は覚悟をする暇もなく、慌てることも許されず、ただうなずくだけにもいかず。
「どうしてかな？　不思議な感じだね」と、そのままの言葉を返すしかなかった。

　最初にその話を聞いたのは、高いウイスキーをお土産に、あなたの手料理をご馳走になりにいった夜のことだった。魚料理をリクエストしたことで、あなたは少し困りながら、それでもそつのない手際でタラの塩焼きとオニオンスライス、それと枝豆をお酒のつまみに出してくれた。
「美味しい。うん、いい塩加減だね」というと、「あら、褒めるところを見つけるのが上手ね」とあなたは少し照れくさそうに言った。ウイスキーを飲むと、顔を手で仰いで「美味しいけど、結構強いねこれ、顔がほてってきちゃった」と思わず生唾を飲み込んでしまうような艶やかな表情で僕を困らせた。

　これが、女の人なんだ――直感的な理解と論理的な納得。そう、あなたは僕が始めてであった女なのだ。あなたはまるで僕があなたを女だと理解したことを確認したタイミングを見計らっていたかのように、唐突に話を切り出した。

「実はね。私、風間君に言わないといけない事があるんだ。別に隠してたわけじゃないんだけど、聞いてくれる？」
「えっ？何、改まって」
「付き合っている人がいるっていったら、怒る？」
「いや、それは、驚くことはあっても、怒るのはちがうでしょう」
「驚いた？」
「うん、少し、でも、まぁ、電話のこととか、いろいろ聞いていたから、そうじゃないかなぁとは思ってた」
　それは本当のことであり、また、嘘でもあった。僕はその可能性を真っ先に否定していたし、大体が考える事が嫌だった。避けていたのだ。

「でね、それだけじゃないの」
「それだけじゃない？」
「うん、その付き合っている人って言うのはね。奥さんもお子さんもいるの」
「えっ！それってつまり……」
「そう、不倫よ。何度か別れはしたんだけどね。すぐ寄り戻しちゃって……」
　僕は、一生懸命に言葉を捜した。しかし、見つかるはずはなかった。何を探せばいいのかがわからないのである。たとえ答えがあったとしても見つかるはずもないし、何を探せばいいのかがわかっていたとしても、その答えがあるはずもなかった。あなたは僕のいる世界よりも、ずっと、ずっと遠い異世界に住んでいるのだと、改めて思い知らされた。それでもなお、僕は諦めきれずに、何か手がかりになるようなものを探して、言葉を投げてみる。

「それで、キクちゃんとしては、今はどうなの、その人とは、付き合っていたいの？　それとも別れたいの？」

　とにもかくにも僕は自分で何かを語ることなんかできなかった。だから僕は、答えを求めてあなたの心の中の戸棚やタンスの引き出しを開けてみるしかなかった。その日から僕とあなたの奇妙で、滑稽で、儚げで、危うい関係が始まった。

　理解できるということと、わかるということは違うし、まして感じるとなれば、すべてがひとつの答えで一致するようなことはない。まだ２０歳にもなっていない若造ならば、なおさらだ。それでもそのことに抗い、反発できるようであれば、相手や自分を傷つけてしまうことで、激しい苦痛と共に何かを飲み込んでいくことはできるかもしれない。が、僕にはそれが出来なかった。

　あなたという存在そのものが僕にとって理解の範疇をはるかに超える存在であったにもかかわらず、あなたが僕に語ってくれた、あなたの身の上に起きたこと、そして、いま起きていることについて、その場で感情の伴うリアクションをすることですら困難であったのに。あなたはまるで僕の困惑を愉しむように……いや、あなたはそんなつもりなどこれっぽっちもなかったに違いない。ただ、あったのは、僕に対するまるで無防備な信頼？それとも……

「今勤めている会社に入社したのは高校卒業……高校っていっても定時制ね。わたし一年浪人してるから」
「えっ、そうなの？」
「中学の頃にね、いろいろと馬鹿やってね。結構遊んでたのよ。わたし」
「そんなふうにはみえないけど」
「そう？ありがとう。でもね、まぁ、なんとか高校を卒業できたことは本当によかったわ。いい仲間にもめぐり合えたし……その頃の話は、またあとでね。それで、１９歳のときに今の会社の入社して、次の年の社員旅行でね。いまの彼とできちゃたの」

　なんとなく状況を把握しながらも、どこか現実感がなかったこの話が、突然リアルに感じられるようになったのは、あなたが口にしたなんということもない、ありふれた代名詞――『彼』という言葉に、僕は頭のてっぺんからつま先まで電気が走るような感覚に襲われた。『彼』とあなたは言ったのだ。僕の目の前で。僕は自分の顔色が変わっていやしないかと、内心ビクビクしていた。多分、こんな経験は、初めてだろう。驚き、慌てふためき、隠し、恥じ、そして僕は嫉妬した。あなたに『彼』と呼ばれた男に――まだ、顔も見たこともない、そして見ることもないだろうその男に僕は嫉妬したのである。
「大丈夫？」
「えっ、あっ、ちょっと動揺したって言うか……ごめん」
「なんで謝るの？」
「うん、そう。そうだね。僕も、よくわかんない」
「そう？」
「つづけて……あ、その人は、そのときすでに結婚してたんでしょう？」
「そうよ。お子さんもいたわよ」

「そう、よくわかんないな。そういうの」
「そういうのって？」

　後悔した。この話を掘り下げたところで仕方がないということはわかっていたつもりなのに、僕の口から出た言葉はあまりにも素朴で純真すぎた。
「よくないことだと思う？」
「少なくとも、いいこととは思わない。別に今すぐ止めなきゃいけないことだとは思わないけど、だからといってずっと続けるとかは、どうかなぁ……」
「そうね。確かにそうだわね。でもね。二人でこんなこと話してるの。二人が年を取っておじいちゃん、おばあちゃんになっても会って話が出来たらいいねって」
「そういうものかな」
「どうかな？わたしにもわからないの」

　耐え切れない間の後、あなたはタバコに火をつけ、僕はシャツの胸のポケットからタバコを取り出し、火をつけずにまわしたり、テーブルの上でトントンとタバコの葉を詰めるように、吸い口を下にして小気味よく打ち付ける。

「でもね」
　彼女が切り出す以外に、この静寂を破る手立てはなかったのかもしれない。
「今は、このままでいいと思っているの」
「そうだね。そうなのかもしれない」
　そうでないのかもしれない――そう思っていてもなお、そうは言えず、他に考えも浮かばない。
「毎週木曜日だけなの。木曜の夜はここに来るのよ」
　聞きたいとは思わなかったけど、どのみち聞かずにはいられない。あなたはいつも僕の心の準備が整う前にことをすませてしまう。僕はまるでオウム返しのように、ただ返事を合わせるしかなかった。それでも僕には、あなががこうして僕と週末で過ごし、そして、普通は話さないであろう自分の身の上を話してくれたことに純粋にうれしいと思う気持ちがあった。それをピュアというのか愚直というのか、初心だというのか、或いはそのいずれでもないのかもしれない。僕は自分自身を偽っていただけなのかもしれない。

　結局のところ、あなたは僕の心を支配することに成功した。その後、あなたからどんなに驚くような話を聞かされても、どんなに苦しくなるような話を聞かされても、あなたと一緒にいる間は、僕は苦しまずにすんだのだから。でもそれは、のちに強烈なしっぺ返しとして僕を苦しめ、僕を狂わせることになる。

「お子さん可愛いのよ。写真でしか見たことがないけど……」

僕にはあなたがまるで下手な芝居をしているようにしか見えなかった。あなたも深く、悲しみの中で、懸命に明るく振舞っているのか？でもあなたのそれは、僕のそれとはまるで違う。あなたは自ら進んで落ちていこうとしているようにしか見えない。どこから、どこへ落ちていくのか、それは僕にもよくわからない。螺旋階段を上りながら、ふとあなたが僕の目の前を通り過ぎていくような感覚――それはまるで重力とは無関係に自らの意思で落ちていくような……嗚呼、人の心とはそういうものなのかもしれない。僕は階段を上ることしか考えていなかったし、踊り場にたむろをすることは許されても、決して引き返すことは許されなかった。許されないと思っていた。

僕は落ちていくあなたに手を差し伸べて、あなたを引き上げたいという衝動に駆られた。それは無謀とも思えたけど、僕にはそれができると……今は無理でも、もう少し、もう少し僕が大人になれば出来ると思った。いや、そう思わなければ、あなたとは一緒にいられなくなると、そう、僕の中の何かが訴えかけてきた。その何かが壊れてしまうまで……僕はあなたを愛していたのだと思う。

こうして僕は木曜日が嫌いになった。

やさしさ

　やさしいこと。それは物心付いた頃から一つのキーワードになっていた。小学生の頃、母親が不意に妙なことを聞いてきた。
「ねぇ、お兄ちゃんの長所ってなんて書けばいい？」
　思いのほか答えに窮した。
「やさしいって書いておいて」
「えっ？やさしいでいいの？」
「いいよ」
「やさしいね」

　別に母親は、僕のことを優しくないと思っているわけではない。長所かどうかで考えれば、確かに他に適当な長所と呼べる特徴があったのだろう。果たして親が僕のことをどう見ていたのかは、わからない。でも、僕はこの『やさしい』こと、『やさしさ』に対して、妙な意識を持っていた。

　みんながやさしくなれれば、誰も傷つかない。

　僕は人と人が争う様を見るのが嫌いだった。それぞれ言い分や主張はあるのだろうと思う。でも、お互いを許すこと。やさしさをもって接することに努めれば、もっと平和的に物事を解決できるだろうと考えていたし、当時３面記事を賑わす事件のほとんどは、心の狭さや相手に対する思いやりのなさ、やさしさが足りない為に起きているように思えた。

　だから僕は、常にやさしくあろうと心がけていた。僕は、僕の思うやさしさを、人知れず心がけていたのである。もちろんそのころの僕には『本当のやさしさ』と言われるようなものがあることも知らなかったし、ときにやさしさが人を傷つけることがあるとも知らなかった。そう、中途半端なやさしさ、表面だけのやさしさ、画一的なやさしさは、大事な人を傷つけ、悲しませることがあるのだ。

「やさしいってことは、別に美徳でも何でもないんだぜ。場合によっては無責任ってことになる」
「えっ？それってどういうことですか？」
「若いな風間。やさしさが男の武器だと思っていたら、いつまでたっても女はできないぞ」
「そんなもんですか？」
「そうさ。『あなたって、とてもいい人ね』って言うのは、男としては魅力がないって、ふられてるってことだよ」
「あー、なんか、それはわかる気がしますけど、女の子はだいたい『やさしい人がタイプ』とか

言うじゃないですか？」
「あのなぁ、風間。『私の弱点はここです』って、自分から言う女がいると思うか？」
「あー、まぁ、確かにそれはないかもしれないですけど……」
「だろう？」
「あっ、それってもしかして大迫さん、言われたことあるんじゃないですか？女の人に」
　大迫さんも、僕と同じで突っ込むのは得意だが、突っ込まれるのは苦手な人だった。
「うるせぇよ。なんで俺の話になってるんだよ」

　大迫さんはひどく照れながら、それでも一瞬遠い昔を思い出すような顔をした。僕はそれ以上突っ込まなかった。大迫さんの言っていることはわかる。僕も高校時代に『やさしさ』で痛い目にあってきた。でも、僕はそのことを認めたくなくて、まだ、もがいていた。うまく行かないこともある。でも、自分は『やさしさ』を大事にしたいと思っていたし、それ以上の価値を他の何かに見出すことはできないでいた。

「やさしいのね」
「そう？」
「そうよ。やさしいわ」
「あんまり、褒められたような気がしないな」
「あら、そう？」
　僕はあなたに『やさしいだけの人』と言われたくなくて、少しすねたのかもしれない。或いはうれしくて、それを悟られまいと虚勢を張ったのか……
「やさしいって、どういうことかな？」
「素敵なことよ」
「素敵なこと？」
「そう、素敵なこと」
　その言葉には何の偽りも、飾りもなかった。その言葉が素晴らしいのではない。素敵なことを素敵だと無邪気にいえるあなたが、僕にはたまらなく愛しく思えた。
「わたしは、ちっともやさしくないから」
「えっ？やさしくないってなんで？」
「嫌な子なの」

　僕はあなたの表情のなかに何かを見たような気がした。それはさみしさとも悲しさとも、後悔とも嫌悪ともちがう――いや、もしかしたらそういったものをすべて混ぜ合わせたような、僕の知らない感情、心の揺らぎ、透明感のある表情。僕はあなたから目が離せなくなる。

「うん？」
　僕があまりにもあなたを見つめるものだから、あなたは少し照れくさそうにおどけて見せる。

「素敵だね」
「えっ？何が？」
「キクちゃんが」
「そんなことないわよ。私なんか、全然ダメよ」
　コタツから足を出し、膝を抱えて顔をうずめ、あなたは少し顔を赤らめ――でも、それを気付かれまいと、膝を立てて、顔を隠す。
「変なこと言うから、暑くなっちゃったわ」

　僕は、どうしていいのかわからず、結局あなたのまねをした。僕も頬が火照るのを感じていた。

　なんか照れくさいね――僕が言う

　そうだね――あなたが言う

　電気消そうか――あなたが言う

　そっちに……行ってもいいかな――僕が言う

　うん……あなたが答える

　眠くなっちゃった……あなたは再びコタツに足を入れその場で横になる

　電気消すね……僕はそういいながら、あなたの横に横たわる

　暗闇、静寂、あなたの匂い、肩と肩が触れ合う。腕に腕を重ねる。指と指が絡み合う。

　僕は驚くほどの安らぎに包まれていた。

　あなたはどうだったのだろう？

　二人は静かに待った。二人の時が重なり合うのを。それは螺旋。あなたの中の、僕の中の別々に流れる時間の交わる瞬間。それはすぐ手の届くところまで近づきながら、また離れていくことを繰り返し、繰り返し、繰り返すごとに、どんどん、どんどん、ミリ単位で近づいているようだった。二人は、螺旋に身を任せるしかなかったのかもしれない。

初めての夜

　女の人の体に触れるのは、あなたが初めてではなかった。あなた以外の誰かと、こんなふうに重なり合うようにベッドに横たえることもあったし、唇と唇を合わせたこともある。いたずらに下着の中に手を忍ばせたことも……それは青年期の若い男女が普通に持つ性への関心。それでも相手を気遣う思いから、最後の一線は、なかなか超えられなかった。いや、もしかしたら、ほんの少しの勇気と責任感が欠如していただけなのかもしれない。たぶんそれは、やさしさと言えるものでは、なかったのだと思う。

「寒いね。でも、こうしているとあったかい」
「そうだね。だけど不思議だね」
「何が？」
「いや、男と女ってさ、なんていうか、次にすることは決まっているじゃない。キスして、裸になって、抱き合って」
「そうね」
「でも、こうして落ち着いて話が出来るのがさ、自分でも不思議というか……」
「わたし、魅力ない？」
「そんなことないよ。だってほら、僕はもう……」

　あなたの声は、僕の心に安らぎを与えながら、そのくせ僕の耳を刺激し、体の中の欲望をつかさどる部分をピンポイントで攻めてくる。あなたをやさしく抱きしめたいと思う気持ちとむしゃぶりつきたいという欲求が螺旋のように絡み合う。

「そうよ。男と女は体だけじゃないのよ。もちろんセックスなしでもいられないけど」
「そういうものなのかな」
「そうね。私にも実のところはわからないわ」
「したくなることある？」
「女だってあるわよ。むしろ女の子のほうがそういう気持ち、強いかもしれないわよ」
「そうなの？」
「少なくとも私はそうよ」
「じゃあ、今はどう？」
「どうかな……確かめてみる？」

　一瞬僕は動揺した。彼女の瞳はまるで夜の湖畔に映る月のように潤んでいた。女性のそういう表情を見るのはこれが最初で最後だった。僕の中の螺旋は一気に加速し、時空を飛び越えるために作られた装置のように激しく回りだした。シーンとした暗闇の中で、唇と唇を重ね、互いを求め合う二人の激しい息遣いが聞こえる。あなたの短い髪の毛に指を忍ばせ、激しく引き寄せる。

首筋から耳にかけて、唇をあてがうとあなたは嗚咽を漏らし、僕は身を震わせた。体のどの部分も休むことなく互いを求め合う瞬間は、二人が出会ってからこれまでがまるで長い長い前戯であったかのように精神と肉体の高揚のピークを迎えていた。そう僕は精神的にこの時点で果てていたのかもしれない。

　シャツとカーデガンを重ね着し、ジーンズを履いたあなたを脱がすのに、僕は当たり前のように苦戦をした。もしかしたらその時点であなたは気づいていたのかもしれない。僕は不器用な人間ではない。単に服を脱がすことに慣れていないのだ。先ほどまでの高揚感はすっかりと薄れ、戸惑いと探究心と気恥ずかしさが、僕の視点を俯瞰の位置まで引き上げた。あなたのからだの一部始終を僕は好奇心と始めてであることを悟られまいという恐れを隠すために攻め続けた。あなたは僕に身を任せ、僕はそれに答えようと必死になっている。そんな姿を冷静に見つめていたのは、僕だけではなかったのかもしれない。

　いよいよというところで、避妊具を着けずにすることの罪悪感――いや、むしろそれを許してしまうようなあなたの反応に慌ててしまった。自分のベルトをはずすことが出来ずに、ジーンズを履いたままあなたの暑く湿った部分に自分自身を挿入したのである。その意外な行動に一瞬あなたは戸惑った様子を見せたが、そのまま僕を受け入れてくれた。

　ひどく不恰好なことになってしまった。そういう思いが、さらに僕を冷静にさせた。誰かに助けをもとめたいという気持ちにさいなまれ始めたそのとき、あなたは不意に僕に言葉をかけてくれた。
「ねぇ、このあと、どうするの？」
「あ、あの、ごめん、わかんないんだ」
「いいのよ。無理しなくて。大丈夫だから」
　あなたは裸の上にシャツを羽織り、立ち上がってタンスの引き出しを開け、なにかを探し始めた。

「これ、つけ方わかる？」
「あぁ……実は使ったことないんだ」
「気にしないで、教えてあげるから」
　僕は自分が始めてであることを気にしていたのも確かにそうなのだが、この避妊具をあなたが他の誰かとつかっていることにどこか釈然としないものを感じた。自分で用意していれば、こんな思いはしないですんだのだという自分向きの責める気持ちと、それだけではない何かが僕の中でぐるぐると回っていた。頭でわかっていてもどうすることもできないようなままならない感情。何もかもが初めての経験で、僕はすっかり萎縮してしまった。

「じゃあ、わたしがつけてあげるから、ここに座って」

　あなたは僕をベッドに誘い僕はなす術ものなくそれに応じた。自分から何かしようにも、僕には成すべき事もしてはならないこともわからなかった。
「今度から自分で持ってきてね」
　気持ちの整理は全くつかず、あなたを抱きたいという衝動がすっかり落ち着いてしまっているのに、僕の身体は気持ちについてくることはなかった。その夜僕はあなたに甘えることを初めて覚えた。僕はあなたを抱くことに集中しようと懸命になった。けど、どういうわけか、心と体がバラバラになってしまって思うようにいかない。結局その夜僕は、果てることができなかった。今まで味わった事のないもやもやとした苛立ちを心に秘めながら、あなたの寝顔をしばらく眺めていた。そのことに気付いたのか、あなたが寝返りを打ち、僕に背中を向けると、僕はあなたを背中越しに抱きしめて、そしてようやく眠ることができたのだった。

次の日の朝

　眠りから覚めて、目の前にあなたがいた。昨日の夜のことを考える。自分が果てなかったことよりも、それによってあなたが傷ついたりしやしないかと不安になり、もう一度あなたを強く抱きしめた。あなたは僕を受け入れ、僕等はもう一度愛し合った。

「ごめん。どうしてだめなんだろう。こんなこと初めてだ」
「早くいく人もいるけど、なかなかいけない人もいるのよ。気にしないで」
「そういうものなのかな」
「そうよ。セックスなんてスポーツみたいなものなんだから、愉しまなきゃ。そんなに思いつめたりしなくて良いのよ」
「スポーツ……か」
「そう、だからうまく行くときもあれば、行かないときもある。二人が同時に気持ちよくなれることだって、そんなにないのよ」
「つまり、一緒にイクとかいうやつ？」
「そう、わたしだって、そんなに毎回いってるわけじゃないわ」
「いくって、どんな感じなの？」
「うーん、口ではうまく説明できないわ。でも、いければいいかって、そういうものでもないのよ。大丈夫、時間はたっぷりあるわ。まだ若いんだし」
「若いって、そんなに変わらないよ」
「若いわよ。わたしなんかもう、オバサンなんだから」
「そんなことないよ。キクちゃんは……その、すごくセクシーだし、大人だし」
「あら、うれしいこと言ってくれるのね」
「そんなつもりは……本当に、そう思うんだ」
「そう、ありがとう」

　あなたは僕の額にキスをすると、ベッドから抜け出し、洗面所に向かった。僕はあなたの後姿を眺めながら、初めて実感した。女の人と寝たということを。

「コーヒー入れるわね」
「うん」
　台所から声がする。やかんに水を入れコンロのカチカチという音が聞こえる。朝だ。
「何時からバイトだっけ？」
「１１時に店を開けないといけないから１０時半にここを出れば十分に間に合うけど」
「一度、家に戻って着替えたほうがいいわよ」
「そうだね。そうする。コーヒー飲んだら、いくよ」
「そうね。でも、ゆっくりして行ってね」

「うん。わかった」

　時計は８時前。家の人はそろそろ起き出す時間だ。家に帰らずに遊びまわることなどしょっちゅうだから、別にどこに行っていたとか、そういうことはとがめられないだろう。だけど、なんとなく親の顔を見れないような気恥ずかしさがある。特に母親には会いたくなかった。

「中学生の頃、付き合っていた彼女がいたんだけど、彼女の部屋で抱き合っているところを向こうの親御さんに見られちゃってさ」
「あら、大変だったでしょう？」
「まぁ、当然その後、母親に電話されて、家族会議。しばらくは二人で会っちゃいけないとか、そういう話になってね」
「で、どうしたの？」
「別れた」
「そう？」
「もちろん。それが全てじゃないんだ。他にもいろいろと。たとえば、家庭環境の違いとか、宗教観の違いとかあってさ」
「そうね。そういうの中学生じゃ、どうしようもないものね」
「なんか、へんな話しちゃったね」
「ううん。いいのよ。わたしは平気よ。それよりもその彼女からはなんて呼ばれていたの？」
「えっ、そっ、それ言わないとダメ？」
「そんなに恥ずかしいの？」
「いや、別にそういうわけじゃないけど……ふー君って……」
「風間の風でふー君？」
「うん、彼女のことぷーさんって呼んでたんだ。怒ると口を膨らませて、こんなふうに」
「それで、ぷーさんとふー君ね。ねぇ、わたしもふー君って呼んでいい？」
「あっ、ああ、まぁ、なんか調子狂うな」
「そう？嫌い？この呼び方」
「嫌いっていうよりも、照れくさいというか」
「照れるの？」
「照れるさ、だって、バンドを一緒にやっている連中が聞いたら、きっと笑われるよ」
「そうね。でも、案外とそうでもないかもよ」
「そうかな？」
「そうよ。ね、ふー君」

　僕はどこか納得がいっていなかった。別れた彼女と同じ呼ばれ方をすることに妙な抵抗感があった。なんでかはわからない。もしかしたら、別れた彼女のことを大事に思う気持ち。或いはあなたが僕を、あなたの色に染めようとしていることに抵抗感を感じたのかもしれない。だけど、

玄関を出るときに別れのキスをするときには、もう、すっかりそう呼ばれることに慣れてしまっている自分がいた。僕は、冬の空を見上げながら、昨日の夜のことを思い浮かべては、大きな声で叫びたくなるような衝動を抑えた。螺旋階段を警戒に飛び降り、僕はひんやりした気持ちのいい朝を独り占めしたくて、思わず走り出していた。

「もっとうかれたり、もっとすごいものかと思った」
「でも、やっぱり、そんなものなのかもしれない」

　自問自答をしたところで、最初から答えなど見つかるはずもない。そもそも答えを必要としていない問いに正解などあるはずかない。女を抱いた。ただ、それだけのことだ。初めての相手が経験者であったこと――それもある一定以上の経験者であったことは、きっと僕にとって幸運なことだったのだと思う。そうでなければ、僕は相手を傷つけてしまったかもしれない。わからない。そうはならなかったかもしれないが、ともかくあれでよかったのだと自分を納得させる。納得できたとしてもどこか満たされない気持ちでいる。

「あれは、愛のあるセックスだったのだろうか？」

　そうでないものに対して否定的な自分が好きだった。恋愛の延長に体を求め合う行為があり、その先に子孫を残したいという本能と理性の調和こそが人のあるべき姿だと思っていた。自分は遊びで彼女を抱いたのではない。

「他に男がいる、それも不倫している女を抱いておいて、どこに愛があるというのか？」

　いまはそうでなかったとしても、結果的にそうなればいい

「そうなれば？いったい何がどうなれば、このことは愛に昇華するというんだい？」

　昇華するとか、汚れているとか、そういうことじゃない。僕は彼女を……

「抱きたくなったから抱いた。だって好みのタイプじゃないし、彼女だってお前のことを好きだとか、愛しているとかいったことがないじゃないか」

　言葉に出していったことがすべてじゃない。今というときがすべてでもない。過去から今、そしてその先に続く道に可能性がある限りは、何も否定できない。

「なにも肯定できない」
　そうとも。それが罪深いことだというのなら、愛とは時にそういうものなのかもしれない。僕は……愛を知らない。

「知らないから求める。お前の求めているのは彼女じゃない。男と女とは何か。愛とは何かとい

うことで、彼女自身じゃない。それでも求めるのか？彼女を。彼女の体を。彼女の心を。彼女の愛を」

　僕の胸の中のざわめきは、あなたを抱いたときから始まった。あのときあなたを抱かなかったら、僕はこんなに苦しい思いをしないですんだのかもしれない。でもそれは無理だったろうと僕は思う。僕があなたにかなうわけがなかった。あなたに抗うすべを持ってはいなかったし、あなたに安らぎを与えることも、まして導くことなど出来やしなかった。あなたがどこかはかなげでいるのが怖くて、僕はあなたを抱くことでしかあなたの存在を僕の前につなぎとめておくことができなかった。

「そう、お前が抱いていたのは彼女自身じゃない。彼女のすべてじゃない。」

　僕は、あなたの何を抱いていたのだろう？

　あなたは僕に何を許したのだろう？

　でも、あのときの僕には、何もかもが、ただの胸のざわめきでしかなかった。何ひとつ感じられず、何ひとつ考えられず、なにひとつ思い至らなかった。傷つけあうなら互いに痛みを感じられる。でもあなたは傷つけあうことを許さなかった。それはあなたの覚悟にも似た――それを生き方というほかに僕には言葉が見つからない。ただ、愛ではなく、やさしさでもなく、真実ですらもなかったのだと思う。

　二度とあなたに触れることの出来ない今だからこそ、わかることがあるのかもしれない。でも、それですら僕を納得させるのに十分なほど、あなたを理解できたとは思えないでいる。

　僕がこの歌を歌うたびに、あなたは表情を変えてしまう。月日を重ねれば重ねるほどに、まるであなたも同じだけの齢を重ねたかのように。追いつくことのない螺旋の先にいるあなたは、いつまでも僕をせつない思いにさせる。常しえに続く刹那ほど、僕を苦しめるものは、他にないというのに。

第２章　おわり

「大人はそうやって正論や理屈ばかり言って、だから世の中、こんなに閉塞感があるんじゃないですか？」
「若造、正論をひっくり返すくらいの気概のないヤツに文句を言われる筋合いはねーよ」
「だから、すぐ、そうやって頭ごなしに」
「そう、頭からねじ伏せる。それが大人のやり方だ。文句があるなら身体を張ってみろ」
「そりゃ、理屈はそうかもしれませんけど……」
「お前が『理屈』とかいうなっつうの！　自分の都合で子供と大人を使い分けているうちは、何もわからんさ」
「そんなつもりは……」
「そうか、じゃあ、飲め」

　２０１１年の夏、じりじりと照りつける太陽は、全てを焼き払うが如く容赦のない猛威を振るっていた。僕はネットを通じて知り合った若者を目の前に、人知れず時空を彷徨っていた。

　時空を彷徨う。

　いま、目の前で恋愛に苦しんでいる若者は２０年前の自分となんら変わらない。あの苦しみの耐え抜いたからこそ、彼に向かって『若造』と呼べる自分がいるのだとしたら、それは人の営みというものが、連なった鎖、或いは螺旋のようなものだと、僕を妙に納得させた。そして、若者を目の前にしながら、僕はあの頃のことを思い出す。

「すてぃーぶんさんは、今の奥さんとどういうふうに知り合われたんですか？」
「社内恋愛。それも社員とアルバイトという禁じ手みたいなものさ」
「それって、最初から結婚を前提にしてたとか？」
「そうともいえるし、そうともいえない。質問が悪い。そもそも結婚って言うのは形式的なことで、二人が一緒になるってこととは必ずしもイコールじゃない」
「それこそ理屈じゃないですか」
「そうだ、だが立派な屁理屈だ。いいか。若造。所詮、男と女なんてものは寝てみなきゃわからん。結婚を一々前提にしていたら、世の中にラブソングも生まれなければ、恋愛小説も読まれないさ」
「なんかすごく説得力のある嘘をつかれているような気がするんですけど」
「だから、それを屁理屈っていうのさ。恋愛に理屈を持ち込むってことは、色恋沙汰に方程式があるってことだろう？　そんなものあると思うか？」

　僕が若造と呼んでいる青年は、あの日あの時、暗く沈んだ思いに沈んでいた自分と重なり、僕

をいらだたせた。僕は４４歳になり、人並みに家庭を持ち、幸福な毎日を送っている。ある程度子供の手が掛からなくなった頃、僕の周りである環境の変化があった。そのことをきっかけに、僕はネットを通じていろんな人と出会う機会を得た。『すてぃーぶん』というのはいわゆるＨＮ（ハンドルネーム）で、みんなは僕をそう呼び、本名を明かす、明かさないに限らず、たいていは、みんなＨＮで呼び合う。若造は知り合った仲間内ではかなり若い。歳は２０以上離れている。２１か２２か。

「すてぃーぶんさんみたいに僕も誰かと結婚とかできると思えないんです。僕は人を好きになることはできても、それをどうしていいかわからない」
「答えを急ぎすぎだぞ、若造。お前ぐらいの年齢だったら、遊んでいて当然の年齢だ。遊びまくれとは言わないが、なにも悪いことをしていない奴に、いい女は口説けないぞ。モテもしない」
「そういうものですか？」
「ああ。実際にモテなかった俺が言うんだから間違いない」
「たいした自身ですね。って言うか、全然根拠になってないじゃないですか」
「しかし、結果は出している。結果を出してないお前に言われる筋合いはない」

　学生時代。大迫さんに言われたようなことを自分は今、言っている。この若造と話していると、すっかり忘れていた過去を、あれこれと思い出す。

　すっかり忘れていた？

　ちがう。俺は……僕は、少しも忘れてなんかしない。彼女のことを。あなたのことを忘れたことなど、ありはしない。あなたは２０年の月日が経った今でも、僕の中で生き続けている。そして決して交わることのない螺旋の中で、ぐるぐると回り続けている。あなたに繋がるもの全てを消し去ろうとしても。あなたを失った悲しみを埋め尽くしたとしても、あなたは決して僕の中で消えることがない。

「すてぃーぶんさんはあとを引くほうですか？その、別れたり、フラれてたりとかした昔の彼女のこととか」
「男は女々しい生き物だ。それは数多あるラブソングや恋愛小説が物語っている人類の歴史が始まって以来の敗戦の歴史さ」
「やぱりそういうものなんですか？それは今でも……結婚されたあとでも引きずってたりとかします？」
「なんだ、やけに踏み込んでくるな。よっぽどの覚悟がないと、この話にはついていけないぞ。聞いたあと公開するなよ。女が怖くなっても知らんぞ」
「な、なんですか、その凄みのある顔は」
「いいだろう。今度みんなで浜名湖でバーベキューをやるイベントがあるだろう？お前行く

のか？」
「あぁ、確か１０月でしたっけ。今回は行きますよ。７月の時は仕事でいけませんでしたから、今回は是非」
「そのとき、浜名湖を眺めながらなら話してやる」
「そ、そんなに凄い話なんですか？」
「つまらない話だから、雰囲気だけでも出さないと面白くないのさ」

　浜名湖――静岡県の浜松市と湖西市にまたがる海水と淡水が入り交じっている汽水湖としては日本一長い湖。

　その地が僕にとって意味のある場所であることをすっかり忘れていた。あなたを失った冬の日。僕は大迫さんに頼んでドライブに連れて行ってもらった。そして行き着いたのがこの場所だった。あなたのことは忘れなくても、あなたに繋がる一つ一つを僕は記憶の中から消し去っていった。その一つが浜名湖であることを７月にネットで知り合った仲間と浜名湖でバーベキューをやったときに思い出した。一度開錠された記憶の扉からは、無防備な僕の心を責め立てる。

　また、僕の中で、僕の周りで、あなたに繋がる螺旋がぐるぐると回りだす。都会のビルの螺旋階段にあなたの姿を見てしまう。

「うわぁ、雨ですね。コンビニ探してビニール傘でも買いましょうか？」
　新宿の居酒屋を出ると外は小雨が降っていた。
「傘は好きじゃない。俺はこのままでいい」
　雨が降る。すべてはあなたへと繋がっている。

　螺旋階段の君へと……

あなたの面影

　あなたと別れてから、僕はずっとあなたの影を追いかけていた。いや、追いかけられていたのか。あなたを忘れることはできなかったし、あなたは僕にあなたのことを忘れさせようとはしなかった。あなたはいつも僕のそばにいた。街の雑踏の中、あなたに似た女性の後姿に、思わず声をかけそうになる。駅のホーム、テレビで流れるニュースの映像、グラビアの中にまで、あなたは毎日のように僕の目の前に現れては通り過ぎてゆく。

　恋を歌うバラードを聴けばせつなくなり、せつなさを歌うポップスを聴けば恋しくなる。あなたの思い出に直接繋がるようなものを、僕は何一つ持っていないというのに。たったの写真一枚も持っていないのに。

　胸が痛む。

　簡単に言ってしまえば、そういうことなのだが、それはまるであなたがそばにいるような予感めいたもの、或いはあなたの思い出に繋がるような物や出来事がすぐそばにあるかのような心のざわめき。病といったほうがわかりやすく、僕はすっかりボロボロだった。

　あなたを忘れるきっかけになるかと、友人たちと馬鹿騒ぎをしたこともある。でも、そんな中でもあなたは僕の前に現れ、僕をせつなくする。たとえ、代わりの誰かを探しても、その中にあなたの匂いを探してしまう。他の誰かを抱いているときでも、あなたのことを思い浮かべてしまう。

　こんなにも好きだったのか。

　あなたを失って気付いた感情。これほどまでに、誰かを好きになったことはない。もう、好きにはなれない。

　こんなにも恋焦がれていたのか。

　あなたがいなくなってぽっかり空いた穴。胸に開いた穴は、僕の心臓を抉り出し、昼となく、夜となく僕を苦しめる。

　こんなにも愛していたのか。

　それを愛といえるのか、僕には自身がない。それを愛と呼ぶにはあまりにも狂おうしくて、せつなくて、儚げだ。僕はあなたを愛してなんかはいなかった。少なくともあなたと一緒に居る

時間、あなたを愛してはいなかった。僕はあなたの心を抱いていない。僕はあなたの愛を知らない。僕はあなたに何も与えられない。あなたを奪うことしかできない。あなたのほんのひと時の時間を奪い、むさぼり、汚しただけだ。愛という名の欲望だけが、僕を突き動かした。あなたもそれを望んでいたのだろうか。あなたは僕を許したのだろうか。

　今でも僕にはわからない。

　あなたは　僕を　愛して　いたのだろうか？

　その答えを見つけることはできない。その答えにたどり着くことはできない。その答えに、僕が応えることができないのだから。

　僕は自分の存在の曖昧さに腹を立ててはいたけど、あなたの存在の儚さを認めていた。

　僕は自分の心の弱さに嘆いていたけど、あなたの心ほど強くなりたいとは思わなかった。

　僕は自分の未熟さを悔いてはいたけど、あなたの先にはいけないのがわかっていた。

　そう、僕には何一つないのだ。最初からないのだ。あなたを愛する資格も、権利も……そして理由すら。

　僕があなたを愛しているといえるのは、あなたを失ったことのこの苦しみがあるから。苦しみこそが僕にとって、あなたへの愛の証なのだから。

　だから、僕は――

「すてぃーぶんさん、今日はありがとうございました」
「えっ、あっ、あー。まぁ、恋愛に完全勝利なんてないのさ。潔い負け方を覚える事が肝要だ。スキーだって最小は正しい転び方を習うだろ？あれと同じさ」
「でも、世の中には初めてでも、失敗しないで最後まで滑りきっちゃう人だっているんじゃないですか？」
「それは、失敗した事がないヤツが言うセリフで、そいつにはそれを言う権利がある。若造？すでに何回もコケているだろう？　オ・レ・た・ち・は！」
「すてぃーぶんさんも、恋愛では負け組みなんですか？」
「世の中には小心者の敗北者を救う便利な言葉があることを知らないのか？」
「なんですか？それ」
「負・け・る・が・勝ち」

若造とＪＲの改札で別れる。俺は――僕は、地下鉄の改札へ向かって階段を下りる。すれ違う人並みにあなたの姿を探したりはしない。駅のホームの反対側にあなたの面影を見つけたりしない。地下鉄の乗降口ですれちがう女の人の香水の香りであなたを思い出したりはしない。

だから、僕は、あなたを忘れようとした。でも、それは無駄なことだと思い知らされた。そしてそれこそが許されない罪だとわかったとき、僕はあなたとともに生きることを決めた。

あなたは僕の中で生きている。

あの日の姿のまま。

そう、あの日――１９８６年が過ぎ行き、新しい年をあなたの部屋で過ごしたとき、僕はこんな時間が永遠に続くものだと信じていた。でもそれは、あまりに儚い夢――幻――幻想。

地下鉄の窓に映る僕の姿は、いつの間にか１９８７年の――あなたを愛することを知らず、あなたへの愛を知らず、あなたを抱いていた自分の姿に変わっていた。

あなたを知るということ

　僕はあなたに身をゆだねが、心をゆだねたことはなかったのかもしれない。あなたはどうだったのだろう。僕と穴との間には、生めることのできない距離が最初からあった。最初から気づいていたし、でも最後までどうすることもできなかった。あなたのそばにいるとき、僕はどこか遠慮がちで、あなたとの距離を測れずにいた。あなたはどうだったのだろう。あなたからすれば、やはり僕はどこか違うものを見ているように見えたのだろうか。

　僕とあなたは同じものを見ているときでも、違うことを感じていたのかもしれない。ときどき僕はあなたに驚き、あなたは僕に微笑みかけてくれた。微笑みのわけもわからず、僕はそんなあなたの笑顔を見るのが好きだった。あなたは不意に僕を凍らせるような言葉で、僕を困らせる。そんなとき僕は、どうすることもできず、ただ、あなたに助けを求めるしかなかった。

「はじめてここに来たときだったかな。あの人形のこと気になるって……」
「あー、覚えてるよ。そう、僕は人形とか女の人のポスターとかあんまり好きじゃないんだ。夜中に見ると怖かったりするし……」
「私、すごく驚いたのよ。すごい勘がいいというか……そういう力を持っているひとなのかなって」
「そういう力？　えっ、なんのこと」
　あなたの部屋でお酒を飲みながらくつろいでいるとき、急にあなたはあの人形のことを話し始めた。僕が始めてこの部屋に来たとき、どうしようもなく違和感を感じたその人形は、若い女性が持っているにはどことなく不自然な存在に感じた。双子のように同じ子供の人形が２体並んでいる。男女の区別は僕にはわからなかった。

「あの子達、実は私の子供、生まれて来なかった赤ちゃんの代わりなの」
「子供？生まれて来なかったって、それは……」
「昔付き合っていた人との間にできちゃった子供なんだけど、２回ともおろしたのよ。正直最初、本当におどろいたのよ。あの人形のことを聴かれた時は……」
　僕には何も言葉は見つからなかった。ただ、驚いて見せる以外に何ができるというのだろうか。慰める言葉をかけようにも何も見つからない。慰めの言葉が必要なのかわからない。言葉を使う以外に、あなたに何かを伝える事ができるかさえわからない。あなたを抱きしめることも、触れることも、そばに寄ることも僕にはできない。わからなかった。でも、あなたはそんなことは全てわかっているという顔で、僕に微笑みかける。
「だからビックリしちゃった。うん、だから、そう、もう赤ちゃんを下ろすのは嫌だから、ちゃんとゴムしてね」
「う、うん。わかった」

　それから僕は、あなたの昔話を聞かされた。話の半分は覚えていない。あなたが以前どれだけ羽目をはずしていたのかという話。彼氏が不良だったと言う話。でも、それはそれで楽しかったという話。夜間の高校をどうにか卒業して、少しずつ人生が前向きに変わったという話。当事の写真を何枚か見せられた。家族の写真も。あなたはお父さんを自慢していた。そして母親は嫌いだといった。なぜ嫌いかという話も聞かせてくれた。それは彼女が悪い方向へ行くきっかけになったことだと教えてくれた。僕は少しずつ、あなたという人を理解し始めた。

「母はね。お父さんに隠れて不倫してたの。中学の頃に家に早く帰ったら、母と私の良く知る人がね。一緒にお風呂に入っていたのよ。私、それ以来、母を軽蔑したわ。母の言うことは何一つ聞いてやるものかと思って、気がついたら夜の街を徘徊するようになってたわ」

　そして、その頃から彼女の周りによからぬ噂――あの子は遊んでいて処女じゃないという話がクラスの中で広がり始めた。
「だからわたし、捨てたのよ。ナンパされてホテルに行って……終わった後に実は初めてだったって言ったら、信じてもらえなくて。ショックだったわ」
　僕は、ただ、彼女の話を一方的に聞いているだけ、うなずくだけしかできなかった。初めての相手がどんな男手、当事どれくらい遊んでいたかという話は、ぜんぜん耳に入ってこなかった。正直、聞きたくなかった。あなたの昔の写真も、僕にはまるで別人のように見えた。でも……

「そうか。だとしたら、うん。僕はわかった気がするよ」
「え？何が？」
「それは、今はいえないけど、きっとキクちゃんが自分で気づかなきゃいけないことなんだと思う」
「えー、それって何かな？今は教えてくれないの」
「僕も確信をもてたわけじゃないから、少しずつキクちゃんのことをしれば、そのうち僕から話すこともあるかもしれないけど、今はもっと、キクちゃんのことが知りたいから……」
「そう。じゃあ、愉しみね。ふー君はすごいのね。勘がいいというか頭がいいというか、わたしなんか頭悪いから大学なんかいけないし」
「そ、それは関係ないよ。大学にいったからって、頭がいいとか、そういうことはないよ。たしかに多少は観察したりする能力はあるのかもしれないけど」
「そう、それ！どうしてわかったの？あの人形のこと」
「うーん。難しいなぁ。だって、そういうのは理屈じゃないというか、いや、ある程度の理屈はあるんだけど、やっぱり一人暮らしの女の子の部屋あったら、なんていうか、もっと可愛らしい……たとえばディズニーだったり、キティだったり、そういうイメージかな」
「なるほどね。確かに私はあまりそういうの好きじゃないって言うか、そんなのばっかりなときもあったけど、もう私なんかオバサンだから……」
「オバサンって、そんなことないよ。キクちゃんは十分に……」

「え？十分に……何？」
「それは、大きな声じゃいえないよ」
「じゃあ、小さな声でなら、囁いてくれるの？そばにいっていい？」
「うん」
「あぁ、耳……耳はダメ。もう……」

　その日の夜、二人は激しく求め合い、激しく与え合った。あなたは僕の背中に傷ができるほど爪を立て、あなたの首筋に後ができるほど、僕はあなたを強く愛した。お互いの汗のにおいが、さらに二人を昂揚させた。それは明け方まで続き、二人は昼になるまでベッドをでることができなかった。

女友達

　もとも身近な人間の裏切り――あなたにとって母親とは、ある日を境に忌むべき存在へと変わってしまったのだろう。それはわかる。何よりもあなたは父親を尊敬し、敬愛していた。そんな父親を裏切った母親を許せないあはたは、母親としての女の部分、そして自分の中の女の部分を憎んだに違いない。あなたが母親を意識すればするほど、母親の女の部分を軽蔑すればするほど、あなたは自分の中の女の部分を自覚し、嫌悪し、そして堕ちていったのではないだろうか。

　その考えは今でも変わらない。僕はその言葉を、とうとうあなたに伝えることが出来なかった。でも、あなたがそれを知らないはずがなかった。気づかないはずがなかった。見えないはずがなかった。わからないはずがなかった。

　でも、あなたは、僕の前では、知らず、気づかず、見えず、わからずを決め込んでいた。それを演技といえばそうなのかもしれない。でも、僕には確信がもてないでいる。あなたは、誰のために、何を演じていたのか。僕は観客であり、共演者であり、脚本家であり、演出家であったのかもしれない。懐かしい映画のフィルムを見るような気分で、あなたを思い出すことはない。あなたを思い出すとき、それは記憶とは違った、もっと生々しいものとして、再生される。再現される。再演される。あなたは僕の記憶の中で、永遠に終わらないドラマを演じている。

「そうなんだ。風間も大人になったのね」
「まぁ、そういうことになるんだけど、相手がね……」
「いいじゃない。年上の人が、最初なんて素敵だと思うわよ」
「そういうものかな」
「で、どうなのその人とは？」
「どうもこうも、前も話したとおり、いろいろと難しい人だから……」
「遊ばれている――と思う？」
「う～ん。それがわかれば、ある意味こっちも楽なんだけど」
「そうなんだ」
「えっ？何が」
「うん？別に」
「なんか含みのある嫌な言い方だな」
「それがわかるなら、大丈夫じゃない？」
「まぁ、長い付き合いだから千紗のことはわかるけどね」

　中村千紗は、中学の頃からの友人――女友達だ。
「でも、よかったじゃない。彼女が出来て。心配してたんだよ」
「心配？　そう？　そんなに心配かけていた？」

「由紀と分かれてからずっと引きずってたじゃない」
「あぁ、まぁね。男は、ほら。女と違って引きずるからさ」
「そうなの？　そうじゃない人のほうが多いと思うけど」
「分かれたら次の人なんて、そんなお気軽な恋愛は俺にはできないよ」
「お気軽ねぇ。考えすぎなんじゃない」
「そんなことないさ。千紗だって、今の彼氏とはーー」
「私は私よ。風間はこだわりすぎよ」

　由紀というのは、中学生のときに始めて付き合った彼女である。千紗はその親友。三人はどこに行くのも一緒だった。三人はいつでも電話で連絡を取り合い、お互いの悩みを話した。中学生の悩みなど、取るに足らないことである。今となってはどんな話をしたのか、まったく覚えていない。千紗は、僕と由紀を本当に気にかけてくれた。もしかしたら電話で話した時間なら、彼女の倍くらいあったかもしれない。中学を卒業し、別々の学校にいくと、僕と彼女の間は急激に冷めて言った。共学の僕と女子高の彼女。僕のよくない噂は、程なく彼女の耳に届くことになる。

　心当たりはある。それは弁明できることではない。それでもなお、僕は彼女とのことを大事に思っていた。彼女が落ち着くまで、しばらく距離を置こうということになった。しかし、それっきり、彼女との連絡は途絶えてしまった。悪い判断だった。それを悔いた。僕は彼女の影を背負ってしまった。

「あのときはしかたがなかったよ」
「そう……そうなんだけどさ。頭じゃ理解してるつもりなんだけどね」
「感情がついてこない？」
「そうだね。だって、今でも、正直忘れることは出来ない」
「本当に好きだったんだね。由紀のこと」
「それは自慢できる。だけど、壊しちゃったのは俺だし」
「それよ。そんなこといつまでもくよくよしてたって仕方ないじゃない」
「あぁあ。また怒られちゃった」
「あ、ごめん。ついね……うまくいけばいいね。その年上の人と」

　電話口で千紗がどんな顔をしているのか、僕には手に取るようにわかっていた。

『異性の友達関係は成立するか？』

　僕の答えはＮＯだ。高校のとき、僕は千紗に告白をしたことがある。彼女はそれを受け入れてくれたが、結局、僕は由紀のことが忘れられずに、数ヶ月で二人の付き合いはもとの友達関係に戻った。それからまもなくして、千紗には彼氏が出来た。なんどか３人で会ったことがある。

そのときにわかった。幸せな二人を目の前にして、抱く、一人身の自分の気持ち。彼女は――千紗はこんな気持ちで僕と由紀のことを見ていたのか。それは思いのほかせつないものだった。

『異性間の友情はお互いを異性として意識するタイミングがずれ続けている関係であって、つねにどちらかがやせ我慢をしている』
　僕と千紗は、そういう関係である。

『俺って、本当に、何もわかってないや。最低だな』
　千紗が、僕のことを心配していたというのは、その時期のことだ。だれのせいでもない。自分の矮小さ、愚かさにほとほと嫌気がさしていた。僕はこの時期、何人かの女性に行為を抱かれ、それをとても迷惑に思い、冷たくあしらい、或いは思わせぶりな態度をとりながら、最後には『本当に好きな人は別にいるから』と、断っていた。僕は僕自身を軽蔑し、嫌悪していた。

「いろいろあるけど、彼女のこと、よくわかるんだ。だから、なんとかいい方向にもていけたらいいなと、思って入るんだけど」
「そんなこと考えてたら失敗するわよ。恋愛はもっとシンプルなんだから」
「そうだね。千紗の言うとおりだ。じゃあ、そろそろ遅いから電話切るよ」
「まぁ、がんばりなさいって。風間はそれで結構、いい男なんだから」
「そうかなぁ」
「そうよ。もっと自信を持ちなさいな」
「ありがとう。話せてよかった」
「うん。わたしも。いつでも電話してきていいからね。気にしないでいいんだから」
「そうは行かないだろう。彼氏だっているんだから」
「そうね。あの人、結構嫉妬深いから……でも、風間君はいい人だって、言ってたわよ」
「いい人ね。まぁ、男から言われるのなら、まだいいか」
「そうよ。だから、その彼女に『いい人だった』なんて、言われないようにしなさいよ」
「あーい」
「じゃあね」
「うん。じゃあ」

　明日はキクちゃんと映画を見る約束をしている。その後もし、話が出来るのなら。少ししてみようか。

1987年

　１９８７年――１０代最後の年。５月のゴールデンウイークをすぎれば、僕は二十歳になる。その前に男になれたことは、どこか僕に余裕を与えてくれていた。そんなことはたいしたことではない。そう思えるのは、そうなったからであって、もしも女性を知らずに二十歳を迎える事が確定しそうであれば、なにか違うことをしていたかもしれない。金で女を買うという発想は、当事の僕の中にはなかった。

　彼女とデートで映画を見に行く。そういうことは、ごく当たり前のデートコースだったと思う。有楽町や渋谷に出て、映画を見るのだとすれば、男友達となら渋谷。女の子となら有楽町。僕らは勝手にそう、決め付けていた。渋谷の街は、ごちゃごちゃとして、同年代の若者で溢れていた。それは今も当事も変わらないのだろう。食事は気楽なファーストフード、映画を見終わったらタワーレーコードやディスクユニオン、シスコといったレコード店をはしごし、楽器店を見て回った。東急ハンズでものめずらしいものを眺めるだけでも時間が潰せた。

　有楽町は、場所によっては雑多で、どこかサラリーマンの郷愁が漂う場所もあるが、メインストリートは道路が広く、建物も整然としていた。何よりもそこを行き交う人は、渋谷に比べれば圧倒的に大人であり、生活観のかけた不思議な街に見えた。同じ楽器店でも渋谷のそれとは全く違う、クラッシクのにおいがした。世はバブルの絶頂期に入り、ブランド物の服に身を包んだ若者が、街の中を席巻していた。僕のように髪の長く、ジーンズに穴が開いているような格好をしている人間は、渋谷ほどにはすれ違わなかった。

　あなたはといえば、まるでそんなことは気にはしないといった感じで、僕に寄り添って歩いてくれる。寄り添うというよりは、腕を組むでもなく、手をつなぐでもなく、それでいて他人行儀じゃない距離。あなたの息遣いや鼓動、シャンプーや石鹸の香り、冬の冷たい空気にさらされた冷たくなった肌の温度が感じられるような間合いを出たり入ったりしていた。冬のピント張り詰めた空気は、僕のあらゆる感覚を鋭敏にし、あなたの暖かな部屋にいるときよりも、あなたの存在を意識させる。

「楽しみー」
「そうだね。前から観たいと思っていたから……」
「うん。そうね。怖い映画観るの久しぶり」
「そんなに、怖くはないかもよ」
「でも、楽しみ」

　あなたは有楽町に向かう電車の中で、まるで少女のようにはしゃいでいる。僕はといえば、そんなあなたに困惑しながらも、確実にあなたに魅惑されていた。あなたは飾らず、気負わず、ど

こまでも自然体で、それはまるでずっと昔から僕が慣れ親しんできた風景のように僕の目の前にいた。細身のジーンズにローファーの革靴は、活動的で短い髪に似合っていた。チェックのシャツの上に羽織ったカウチン風のセーターは、少し少女っぽいデザインのように見えるが、それがかえってあなたの色香を際立たせているように僕には思えた。

「冬の空って、きもちいいよね。こう、空の上まで突き抜けていく感じが」
「私も冬の空は好きよ。夏は苦手。ギラギラしていて」
　電車から降り、正月気分の抜けきらない街の空を見上げる。いつもよりも空気が澄んで見えた。冬の暖かな日差しの中で、あなたは他の誰よりも美しく輝いて見てた。そういうふうに、見える事があるのだと、僕は初めて知った。

「有楽町に降りるの久しぶり。ふー君は良く来るの？」
「中学生のころは良く来てたよ。電車賃けちって自転車でさ」
「へぇ、銀座に自転車って、なんかすごいわね」
「子供だったから、そういう事が平気でできたんだよ」
「デートで映画観たことある？」
「ない」
「そうなんだ」
「女の子と映画を観たことはあるけど、デイトじゃなかった」
「女友達とか？」
「うーん。なんというか、友だちだけじゃないけど……」
「いろいろとあったんだ」
「そりゃあ、それなりにあったよ。でも、なんでかな。映画って難しいよね」
「難しい？」
「ほら、観たい映画ってさ。必ずしも二人が本当に観たい映画があるとは限らないじゃない？」
「そんなものかなぁ？」
「だって、アイドルが出ている映画を一緒に見に行こうって言われても、どういう反応していいのかーー」
「そういうのダメなんだ？」
「ダメっていうか……苦手？」

　取り留めのない話の中でも、僕はあなたが時折見せる表情に何度もときめかされていた。僕は一人で舞い上がりそうになるのを必死でこらえていた。僕はあなたに見蕩れ、焦がれ、溺れていた。

「大丈夫そうだね。そんなに混んでない。いい席で見れそうだよ」
　映画館の前に着いたのは午前の部が終わる３０分前だった。前から約束していたＳＦホラー映

画「ザ・フライ」は、古い映画のリメイクであり、簡単に言えばハエ人間になってしまった科学者の悲劇を描いた映画だ。子供の頃からＳＦ映画が好きだった僕は、どうしてもこの映画が見たかった。あなたに見せたい映画というわけでも、一緒に観たい映画というわけでもない。僕は観たいといい、あなたは一緒に行きたいといった。でも、それが、とてもとても、うれしかったのだ。

「結構グロテスクなシーンはあると思うよ。まぁ、ホラー映画じゃないから、そんなシーンばかりじゃないと思うけど」
「怖くなったらしがみついてもいい？」
「どうかな、それで僕が大声出しても、逃げ出さないでね」
「ふー君も怖いの苦手なの？」
「得意じゃないよ。ただ、この映画だけは、前から気になってたから……」
「なんだっけ？古い映画のリメイクなんだっけ？」
「そう。子供の頃、ＳＦ映画が好きでさ。ＳＦ映画を紹介する本とか買って読んでたんだ。その中にあった作品がリメイクされるってすごくない？」
「男の子はそういうの好きよね」

　あなたは時々、僕を子ども扱いする。最初、僕はそれに戸惑ったけれど、あなたは今の僕とではなく、少年の頃のボクと話すような――まるで時空を越えて過去のボクに話しかけるような話方をした。なぜだかわからないけど、僕にはそれが、とてもうれしかった。

　まったく違う生活をしている二人に、共通の話題などそれほど見つからない。映画が始まるまでの間、二人の会話が途切れなかったのは、今にして思えば不思議な気がする。僕はあなたに僕自身のことを知ってほしくて、まるで子供が母親に外で遊んできたことを報告するかのように、いろんな話をした。始めてみた映画のこと、一番怖いと思った映画、好きな役者。好きな監督。思わず涙してしまったシーン……

　やがて、午前の部の上映が終わり、映画を観終わった客といい席を取ろうとする客で一気に慌しくなる。僕らは素早く席を決め、まるで指定席に座るかのようにすんなりと思った場所に席を取ることができた。あなたは荷物を置いてすぐに売店に行き、飲み物とパンフレットを買ってきてくれた。僕は素直にあなたの行為に甘え、パンフレットをめくりながら、役者について、監督について話をしながら映画が始まるのを待った。やがて照明がおち、映画が始まる。僕はあなたの手を握ることも忘れて、映画に没頭した。

　映画を観終わった後、僕はとても興奮していた。『ザ・フライ』は魅力的な映画だったし、観客の反応も、あなたの反応もとてもよかった。それは今までに味わったことのない感覚だった。自分の好きな映画を好きな人と観て、そして「面白かった」「あそこが良かった」「あのシーンは怖かった」と語り合える喜び。理解しあい、共感しあうことはなんて素敵なことだろうと本気で思った。

「ケーキのすごくおいしい店があるの。そこにいこうか」
　僕には、映画を観た後のプランニングは何もなかった。はずかしいかな、銀座で女性と一緒に入るような店を僕は知らなかった。これが横浜や渋谷であれば、なんとかなったが、僕はすっかり背伸びをして、しかもあなたに甘えてしまっていた。「ここよ」とあなたが指差した場所は、僕が良く知る場所だった。

「へぇ、ここは地下に中古レコード店があって、良く来てたけど、ケーキが美味しい店があるなんて、知らなかった」
「あっ、そうなの。私は逆に、その店には、入ったことないのよ。じゃあ、あとでレコード見に行こうか」

　あなたが案内してくれた店は、とても僕のような髪を背中まで伸ばした小僧が来る様な雰囲気ではなかった。僕はすっかり萎縮してしまった。まだ、昼間だというのに照明は暗く、落ち着いていて、重厚な椅子とテーブル、壁に飾っている絵画、照明、全てが僕を歓迎していないようだった。

「場違いな感じがする」
「平気よ。そんなこと気にしないの」
　あなたはそんな僕を面白がっているのか、妙に楽しげだった。
「私は決まってるんだ。ふー君はどうする？えっとね、お薦めはーー」
　まるで全部お見通しといった感じで、あなたは僕をリードしてくれた。僕はそれがどこか悔しくて、少しばかり意地悪な気持ちになった。どれほど自分の舌にあうものかと、辛口の評論家にでもなったかのように、店の中の様子を伺ったが、そんな試みはものの数分で無駄だと思い知らされた。

「あっ、これ、本当に美味しい」
「でしょう？ね？こっちのケーキも美味しいのよ。ほらぁ」
　あなたはフォークでミルフィーユを上手に切り分け、僕に差し出した。
「あーん」

「えっ、えっ？」
「ほら、ケーキ落としちゃうから早く」
「あっ、あい……」
　おそらく僕の目は泳ぎ、一瞬周りの視線を近視ながら、頬を赤らめ、思い切り二やつくのをこらえながら、大きな口をあけていたに違いない。僕の右の奥歯の虫歯が見えたかもしれない。

「どう？美味しいでしょう」
「うん。おいしい」
　それは、嘘だった。僕いは程よい甘さのクリームも、ミルフィーユのふんわりした感触もわからないほど、その状況に困惑していた。
「かわいいのね。こういうの、全然普通のことなんだよ」
「そっ、そうなのかな。僕には全然違う世界のことに思えて……」
「照れくさい？」
「正直、かなり……」
「そう……」

　僕は、すっかりあなたのペースになっていることにも多少の引け目を感じていた。その事が直接の理由ではないにしても、たぶん、動機はそういう仕様もないことだった。僕は映画の批評を始めた。

「ーーでも、主人公とヒロインが、急にあれだけ親密な関係になるっていうのが、今ひとつ納得行かないというか、アメリカ映画だなぁって思った」
　僕は、映画のほとんどを肯定しながら、脚本の中で一番重要な「起」の部分にけちをつけた。主人公の科学者は、偉大な発明をする。しかし、若いとはいえ、奇人である。その主人公を取材に来た科学雑誌の女性記者。二人が男女の仲になるまでの過程が、僕には乱暴に思えたのだった。
「そうかな。私はそんなことないと思うなぁ。ほら、最初に出会ったときに、何か実験の素材をって……えーっと転送装置だっけ？　そのときに彼女自分のはいていたストッキングを脱いで渡したでしょう。あの時点で、相手の男性にアピールしてると思うのよね。私はあなたに男として関心がありますって」

　僕は、たじろいだ。筋も理屈も通ったあなたの主張そのものにではない。それを聞いてもなお、自分はそうではないと思う気持ちがあり、しかもそれを反論する言葉を見出せないでいる。論破されているにも関わらず、何か抵抗をしなければ、自分の存在する価値なんかないのではないかという、今まで感じたことのない自分に対する違和感に、自分の中の芯とも言える部分がぐらついたのである。

「そうかなぁ、そういうものなのかなぁ」
「そうよ。男と女は、一瞬の交わりがあれば、それで惹かれあったりする事があるのよ」
　今にして思えば、それは真理であり、僕とあなたの関係は、まさにあの映画のように、一瞬の交わりにどちらかが、アクションを起こし、一方がそれに応え、そして男女の関係になった。でも、あのときの僕にはそれがわからなかった。なんとも残酷だ。

「そうね。でも、そのシーンよりも私、分娩台のシーンがちょっとショックだったなぁ。女性にとってはあれ、ものすごく嫌なシーンよ。生まれてくる赤ちゃんが、人間以外だなんて、本当にぞっとするわ」

　もしも、あなたの部屋の人形の話を聞いていなければ、僕は何か返す言葉があったのかもしれない。でも、あなたがあのシーンをどんな思い出見たのかを、少しでも想像できる今では、うなずくことすら、軽挙な気がして、僕には話題を変えるくらいしか思いつかなかった。
「すごく、グロテスクなシーンが多かったけど、怖がらせるだけじゃなくって、ちゃんとシーンごとの必然性があったよね。動物実験失敗して、モンスターにしちゃったことも、ちゃんと最後まで脚本に生かされていたし、あれだけグロテスクなモンスターが『自分を殺せ』って、銃身を自分の頭に向けるシーンも感動した」

「そうね。凄くいい映画だったわ。また、観にいこう。ふー君と映画観るの楽しい」
　でも、僕には、なぜか、次はないような気がした。

　今のままでは僕は未熟すぎる。

　僕の心は、ざわついていた。あなたを知れば知るほど、あなたとの距離を感じる。あなたは深く、広く、遠く、高く、そしてシルクの手触りのように滑らかでつかみ所がない。それを不安に思えば思うほど、僕はあなたに甘えるほかになかった。その甘えはいつか、何かを壊してしまうかもしれないというのに――

　あの頃の僕は未熟すぎた。

「じゃぁ、レコード見にいこうか」
　僕は、そこで１枚のレコードを買った。そのレコードに針を落とすたびに、僕は未熟だったあの頃の自分を思い出す。音楽は残酷だ。

　自分が未熟な人間であると、謙虚に受け止めることは出来ても、素直に受け入れることもしなければ、それを悔いることもなかった。僕は自分のことを未熟だとは思っていなかった。同世代、同年齢の友人知人と比べて、未熟さを卑下しなければならないほど幼稚でも稚拙でもないと思っていた。高校を卒業して、大学に進学したのは男子では自分を含めてクラスで３人しかいなかった。あとは浪人か専門学校か。卒業してそれぞれがそれぞれの道を歩む中、久しぶりに会おうということになったのは１月の終わりだった。少し遅めの新年会。

　卒業してから１年もたっていないが、それでもその間にどれだけの濃い時間を過ごしてきたのか、人目で違いがわかる。

　大学を目指し、浪人しているメンバーは、あの頃と何一つ代わっていないという雰囲気だ。大学に進学したほかの二人は、少し垢抜けたようにも見える。何より浪人している連中に比べ、話す話題の幅に差がある。どんな遊びをし、どんな女と付き合い、どんな車に乗り、どんなバカをやってきたのか。専門学校に進んだ連中は、退屈さにへきへきし、中には中退を考えているやつもいた。

「風間はどうなの？」
「バンド始めたよ。まだ、ライブはやってないけど、４月に横浜のライブハウスでやるのが決まってるんだ」
「ついに夢がかなったって感じ？」
「うーん。どうだろう。夢というか、ほら、俺はぜんぜん楽器できないじゃん。ドラムを少しやったけど、今回の編成では俺、ヴォーカルだから」
「へぇ、そうなんだ。いいなぁ。なんか充実してて。俺なんか高校の延長っていうか、本当につまらないんだ。授業」
　藤田の実家は大工で、本人的には、大工を継ぐつもりはあるらしい。しかし、高校卒業してすぐ就職というのも、何か違うような気がして、大学は受験せずに、ビジネス系の専門学校への進学を早くから決めていた。大学受験を進める担任の教師に、行く気もない大学を受験するだけ金の無駄だと言い切った。僕は藤田がそこまではっきりとものを言える人間だとは思っていなかったから、そのときはとても意外に思った。藤田の身長は１７０センチない僕の身長よりも低かったから、どことなく子供っぽく思っていたのだが、案外とこういうやつのほうが、考えに芯があり、行動がシンプルで頼もしいということを僕は知った。

「で、どんな曲をやるの？」
「それがさ。まだ、決まってないんだよ。リードギターはヘビメタでザクザク刻むし、サイドギターはフォーク崩れでシャカシャカ弾くし、ベースはフュージョンでチョッパーバリバリ。み

んな趣味がバラバラだから、おとしどころがなくてさ」
「風間は昔から何でも聞くからね。たしかインストもヘビメタも聴くよね」
「いっそ、ビートルズとかやったらどうかなって、提案したんだけど……」
「ビートルズだったら、いろんな曲があるよね」
「そう、で、それはいいアイデアだって、ビートルズの中から曲を選ぼうとしたら、こんどはその中で意見が合わなくて」
「そりゃ大変だ」

「風間はすっかりバンドマンだね」
「そんなんじゃないよ」
　中田が会話に割り込んできた。中田はクラッシクギターのクラブに所属し、演劇や映画に造詣が深かった。大学受験に失敗し、現在浪人中だ。受験ときは、かなり自信があり、対策は完璧だと豪語していたが、人生ままならないものである。まったく受かる自信がない自分がマークシートの恩恵を受けて合格し、誰もが受かるだろうと思ったやつが今は浪人生活である。

「やっぱりさぁ、滑り止めで引っかかったところに行けばよかったんじゃない？」
「やだよ。そんなところに行くくらいなら、死んだほうがましだよ」
　人それぞれ守るべきプライドがある。一見なよなよした優男に見える中田も、絶対に譲れないものがあるようだ。

「お前よく来たよな。こんな時期に」
「息抜きも大事だから。それにほら。もうここまでくれば、やることはやったわけだし、あとは体調管理だけだよ」
「そっか。で、今度はどのあたりを狙ってるのさ？」
「おしえない」
「なんだよ。それ」
「前回はそれが失敗だったんだよ。みんなに志望校を言いふらしたのが敗因」
「え？」
「俺はプレッシャーに弱い」
「は……はい？」
「だから、みんなに注目されるとダメなの」
「そ、そういう問題なのか」
　藤田が突っ込む。

「中田は風間がしれっと合格しちゃったのをみて、すごく頭にきてたみたいよ」
　松山がちゃちゃを入れる。松山は現役で合格した一人で、中田とはライバルだった。互いに認め合い、相手の成功を祝福し、失敗を慰めた。戦友のような関係といってもいい。しかし、僕は

それほど熱心に受験勉強をしている様子もなく、どこの大学を受験するのかほとんど口にしていなかった。それは中田にとって、だまし討ちのようなものだったようだ。僕にはそういう感覚がまったくわからなかった。

「受験の日、俺の運気は最高潮だったのさ。前の週にマージャンでバカ勝ちしそうな勢いだったのを、わざと抑えてツキをとっておいたのが勝因だね。だって他の大学の試験はぜんぜんダメだったけど、受かった大学の試験は苦手だった英語にヤマを張っていた内容がばっちりでたからね。で、今回の傾向と対策はばっちりなのか？」
「そりゃあ、もう、ばっちりさ！」
　中田はいつもの調子でおどけてみせた。が、少しばかり無理をしているような感じもした。飲めないやつじゃないが、今日はまだ、アルコールを一滴も口にしていない。受験前なのだから当然は当然なのかもしれないが、ほかの浪人組みはすっかりほろ酔い気分になっていた。

「ふん、未熟者め。こんなところでアルコールなんか飲んだら、脳細胞が死滅してせっかく覚えた単語を忘れちゃうだろう」
「そんなの関係ねぇよ」
「お前こそビビってんじゃねーよ」

　楽しい酒の席、仲間がいて、馬鹿をやって……
　でも、僕は……僕はどこか乗り切れないでいた。

　僕らはこんなにも未熟だ。それはそれでいい。そういうことを楽しむ時間はあっていいはずだ。だけど、僕が抱えている問題はそれとは違う。

　それとは違う未熟さなんだ。

「じゃあ、これで帰るね」
「えっ？もう帰るのかよ」
「帰って勉強しないと」
「今日ぐらいいじゃんかよ」
「そうだよ。俺たちもまだいるんだし」
　中田はまるで話を聴いていないかのように身支度をし、財布からお金を取り出して僕に渡した。
「そっか。がんばれよ」
「もーう、プレッシャーかけないでくれる？」
　そういいながら中田は僕にＶサインを出した。
「バンドがんばりなよ」

「あぁ。じゃあ、また」

　中田は今日までの間、それなりに濃い時間をすごしてきたのだろう。受験に失敗したというひとつの挫折が、中田をひとまわり大人にしたように僕には思えた。それはここにいるほかの連中にはない――もしかしたら、僕がほしいと思っている人間としての成長を、中田の中に垣間見たのかもしれない。

「大丈夫かな。あいつ。そうとう苦しんでいたみたいだけど……」
　面と向かっては、必ず憎まれ口をたたく松山は心配そうに中田のことを語った。
「何回か電話で話したけど、そうとう自分を追い込んでたみたいで」
「そうなんだ」

『挫折を経験したほうがいいとか言うけど、あれはうそだな』
　ふと、大学で同級の大迫さん――彼は２年浪人している――の言葉を思い出した。

　挫折をしたほうがいいなんて、都合のいい言い訳さ。だって一度も挫折なんかしなくたって、楽しくやっているやつは山ほどいるんだ。挫折した後、人は強くなるっていうけど、それも人によってだからな。結局のところ、うまくやれるやつは最初から最後までうまくやるし、挫折して這い上がるやつは、そもそも挫折しなくてもうまくやれるやつなんだよ。

　そんなことを考えているうちに、僕はどうしてもあなたに会いたくなってしまった。なぜなら僕は――

　僕は未熟者だから

愛という名の欲望

「ごめん。今日はこれで帰るわ」
「なんだよ。付き合い悪いじゃん」
「いや、ほら、ちょっと野暮用があって」
「なんだよ。女かよ」
「まぁ、そんなところ」
「いいなぁ。充実したキャンパスライフだねー」
「そんなんじゃねーよ」
「やっぱ大学生はちがうねー」
「だから、そんなんじゃないんだってば」

　高校の同級生と別れ、僕は公衆電話を探しながらあなたの部屋へと向かった。しかし、行くところ行くところ、公衆電話は使用中で、ようやく見つけた電話ボックスは、あなたの部屋から５分もかからない場所だった。電話をしようと財布からテレフォンカードを取り出そうとしたとき、ふとあるものが目に入った。
「これって、あの映画の……」
　テレフォンカード式の電話ボックスの中にはテレフォンカードの自動販売機が設置してあったりする。恋人たちは、数分ごと、長距離なら数秒ごとに減っていくデジタルの数字を眺めながら愛を確かめ合うのだ。カードを使い切ってしまうと電話は切れてしまう。未練でテレフォンカードを買い足す。金で時間を買うような罪深さはないが、会えない辛さは深まるばかりだというのに……
　テレフォンカードの自販機の中に見覚えのある絵柄があった。それはあなたが好きだと言っていた映画『哀愁』のテレフォンカード――僕は無性にうれしくなり、舞い上がった。

　きっとあなたは喜んでくれる。

　あなたを驚かせようと、テレフォンカードを買うと電話をしないであなたの部屋へと急いだ。階段を上り、あなたの部屋のドアの前に立ったところで急にある考えが、僕の足を止めた。

　もしかしたら、他に誰かがいるかもしれない。

　迂遠なことだ。他の誰かとは、結局のところ特定の誰かのことを示している――顔も名前も知らない男。僕は自分のうかつさに腹を立て、その場を立ち去った。道路からあなたの部屋を見上げる。暑いカーテンの向こうにうっすらと光が漏れている。あなたは部屋にいる。でも、あなただけとは限らない。そういうことだって、ありえるというのに……あたりを見回し、公衆電話を見つける。

「Plese tell me your name」
　あなたの声は、いつもと変わらない。僕は静かに名乗る。
「風間と申しますが、篠田季久美さまのお電話でよろしかったですか？」
　少しの間の後、あなたが電話口にでる。
「ふー君、どうしたの？こんな時間に」
「あ、よかった。もしかしたら、いないかと思った」
「……嘘でしょう？」
「えっ？なんで」
「うーん。なんとなく。近くまで来てるのかなぁって」
「すごいね。実はそうなんだけど、ちょっと今から会えないかな？」
「うーん。どうしようかなぁ……」

　あなたの声のトーンはどこかいつもと違って聞こえた。他に誰かがいるなら、たぶん電話にでないか、出てもよそよそしくしただろう。でも、そうではない。そうではないけど、いつもとは違っているような気がして鳴らなかった。
「ダメって言ったら、どうする？」
　……思わず、言葉に詰まった。
「嘘よ。いいわよ。でも、もう遅いからあまり遅くまではダメよ」
「う、うん。わかった。すぐ行く」

　さっきまでの浮ついた気分はすっかり萎えてしまっていた。どんな顔をして会えばいいのかすら、僕にはわからなかった。どうにも、調子が悪い。玄関の一呼吸間を置いて、インターフォーンを押す。程なく扉から灯りがもれて、そこにあなたは立っていた。

「どうぞ、入って」
「うん。ゴメン、急にきちゃって」
　謝るくらいなら、来なければいいと、そんなふうに思われたのではないのか。自分で言っておいて、なんとも小心な！

　部屋の中は暖かく、それでいて何もかもが冷たく感じるような……そう、誰にも歓迎されていないような疎外感を感じた。そんなことはないと、あなたは優しく微笑みかける。
「どうしたの？　こんな時間に」
「あぁ、実は高校の時の同級生と近くで飲んでたんだけど、これを――」
　僕の中で予定していた言葉をまるで知っていたかのように引き出すあなたに僕は戸惑いを覚えた。なにもかも見透かされているような惨めな気持ちになった。

　ほら。これ、すごいでしょう？　ボクが見つけたんだよ。ねぇ、ボクのこと褒めてくれる？

「すごーい。こんなのあるんだぁ。よく見つけたわねぇ」
「なんかこれを見つけたら、すぐに見せたくなっちゃって」
「ありがとう。でも、良かったの？高校の同級生と久しぶりに会ったんでしょう？」
「ほら、浪人生もいるからさ。今日はそんなに遅くまで飲む予定じゃなかったから」
「そうなんだ。お酒は切らしてるのよ。どうする？　コーヒーでいい？」
「うん。コーヒー飲んだら帰るね」
「そんなに慌てて帰らなくてもいいわよ。もう少しゆっくりしていけば？」
「うん。じゃあ、お言葉に甘えて」
「お湯沸かしてくるわね」

　あなたは『哀愁』のテレフォンカードを大事そうにタンスの引き出しにしまい、台所へ向かった。僕は暖かな部屋に一人取り残され、そしてあの人形たちの視線にさらされながら、意味の無い自問自答を繰り返していた。

　何をしにきた。僕は一体、ここに　何をしに来たんだ。あなたに会うため？　あなたを抱くため？　あなたに甘えるため？　あなたを自分だけのものにするため？

　あなたに会うことができれば、それでいいと思っていた。でもそれは大きな間違いだった。僕の心の中におよそ理性の部分では制御できないような揺らぎが、言い知れぬ不安、底知れぬ渇望、ままならぬ思い――今まで経験したことのない感情が渦巻き、ほとばしり、あふれ出ようとしていた。

　苦しい。こんなにも苦しいものなのか？　誰かを好きになるということは　こんなにも苦しいことなのか？

　僕はそのとき、その感情が何であるかを知らなかった。何であるかがわからなかった。知らなければ抑えることもできず、わからなければ開放することもできない。ただ、ただ、持て余すだけだった。

　とてもこのままじゃ帰れない。そんな漠然とした、散文的な、直感的なことでしか捉えようがない自分が嫌で嫌で仕方がなかった。

　でも、仕方がなかった。

　僕はあなたを求めた。それはごく当たり前の行為のようでもあり、滑稽でもあった。僕はあなたを求めている。あなたはそれを受け入れてくれている。しかし、それは決して符合することのない心のずれを確認する行為だったのだと、今はそんなふうに思えてならない。

　求めえられた『何か』求められ与えた『何か』

　あなたはとっくに気づいていたのか、それともあのときのあなたは僕と同じように求められることに従順だったのか……それでもきっと、僕よりはわかっていたはずだ。あなたはきっと、『それ』を知っていて、知りながら、わからないフリを決め込んでいたに違いない。なぜならあなたは、年上の女（ひと）だから。

　慣れるということはなかった。あなたはいつも新鮮で底の知れない深みと、理解を超えた謎を秘めていた。それが意図的であれ、無意識であれ、僕はあなたの魅力に吸い込まれ、迷い込み、そして堕ちて行った。考えまいとすればするほど、あなたの明日を、僕がいないときのあなたを想像してしまう。あなたを僕だけのものにしたいという欲求は至極当たり前のようでいて、それは僕にとっての恐怖以外の何者でもなかった。あなたを得ること――それは同時にあなたを失うことへの恐怖でもある。あなたが僕のものでないのと同時に、誰かのものでもないということは、皮肉にも今、この状況が証明をしている。そしてそれは、無責任さを是とすることと、責任を負えない力のなさを嘆くことの両立を成立させ、僕に未来を与えてくれる。

　いつか、あなたを自分のものにしたい――だが、いまはまだ、僕にはその力がないのだから

　あなたは僕の激しさを『若さ』だと言い、僕はそれを『未熟さ』と理解した。あなたは僕のロジカルな言動を『賢い』と言い、僕はそれを『小賢しい』と卑下した。あなたは僕の気遣いを『優しい』と言い、僕はそれを『軟弱』と感じていた。

　『同じ時』に居るのに、『同じ場所』にいないような、或いは『同じ場所』に居るのに、『同じ時』に居ないようなもどかしさが、あなたの声をかすれさせ、僕の心をすり減らせた。あなたの言葉の一つ一つは、僕の心の中を駆け巡り、まるで血管の中に細い針が流れているような痛みに耐えることを強いていた。

「いや……やめて……いや……」

　激しく求めれば、あなたはそれを拒む。拒んでいるあなたは、僕を異常なまでに興奮させる。まるで獣のようにあなたを求め、果てることを知らない。解き放たれた欲望は、がんじがらめに

縛り付けられた心の葛藤――求めても得られない、拒まれているわけでもないのに、手が届かないもどかしさを噛み千切るような凶暴さに支配されていた。そして少なくともその瞬間だけは、あなたを自分のものにできたような錯覚に陥ることができた。

　何もかもが真っ白になったような感覚。そしてその後に押し寄せてくるのは、どうしようもない不安だった。どうにかして、あと１時間、あと３０分でも長くあなたのそばにいたいという欲求と、それによってもたらされる不幸な結末は、僕に選択の余地を与えない。僕にとって一番怖いのはあなたを失うこと――でも

　決して僕は　あなたを得ていたわけではない。

　あなたはベッドの中で下着とパジャマを身につける。
「まずいな」
　ボソッとそんなことを言った。言ったように聞こえて、それでもそれを聞きなおす勇気は僕にはなかった。
「ねぇ、今度からちゃんと、ゴムつけてね」
「うん、なんだか興奮しちゃって……」
「何かあったの？」
「いや、別に……ただ、会いたいと思ったから」
「そう。そうね。でも、ちょっと会える日が減るかも」
「え？」
「わたしね。バイトしようと思って」
「バイトって……なんの？」
「昼間は仕事してるし、休みの日は減らしたくないわ。だから夜にね。ホステスのバイトしようかと思って」
「あ、ああ、でも、どうして」
「高卒の給料だと、なかなかきびしいのよ。このアパートの家賃もそこそこ高いし」
「そうなんだ」
「だから、ちゃんと大学は卒業しなきゃダメよ」
「そ、それは、そんなことは大丈夫だよ」
「そう。ならいいんだけど」

　なにがどうというわけではない。ただただ、僕はそれが嫌だった。あなたが他の男とお酒を飲む姿を想像するのは、どす黒く、陰鬱で、荒唐無稽な感情が僕の中ではっきりとした形となって表れた。それは今まで気づかなかった……いや、気づいてはいたけれど、無視することに成功していた感情――嫉妬であることをはっきりと認識せざるを得なかった。僕はそれを認めたくなくて、嘯（うそぶ）くしかなかった。

「そうなんだ。もうお店は決まっているの？」
「まだよ。今チラシとか、いろいろ見てるんだけど、会社の人に知られるのも困るし、どこにしようかなぁって、そんなところ」
「そうなんだ」

　なぜ、とめない？　なぜ、嫌だといわない。

　いえるはずがない。とめられるはずがない。

　なぜなら僕には、その資格も、権利も、力もない。

　嗚呼、そうなんだ。

　僕は　いったい　あなたにとって　どんな存在なんだ。

　いや、その前に　もっと　大事なこと

　僕は　あなたを……あなたを　どう　思えば　いのだろう

　体が笑っている。まるで全身に力が入らない。どこか宙に浮いたような感覚のまま、僕はあなたの部屋を後にした。冬の空――星は見事に整然とそこにある。月を捜すがどこにも見えない。残念なような、ほっとしたような妙な気分にさらされる。

　もし、満月であれば、激しくあなたを求めたのは満ちた月のせいにできたろうに。
　もし、三日月であれば、満たされない心の痛みは、欠けてしまった月のせいにできたろうに。

　満点の星に見つめられて、僕は惨めだった。

　そういうものには　縁がないと思っていた。
　歌や恋愛ドラマに出てくるような　そんな激しい感情を　自分が抱くとは思ってもみなかった。

　結局のところ、抱いてみなければわからない。人を好きになるということと「それ」は僕には全然違うことのように思えた。焼き付けるような陽射しの中、砂漠の上を歩くような心の乾き。体の中で蛇がのた打ち回るような欲望の暴走。一人高層ビルの屋上で死と隣り合わせに星を眺めているようなスリル。どれも、ちがう。言葉に言い表せないと言ってしまったほうが、よっぽど真実味がある。しかし、真実などいったい何の意味があるというのか？　欲しいのは答えだ。

「僕は、あなたを愛しているのだろうか？」

　そうでなければ、嫉妬などするものか。そうでないのなら苦しいはずがない。そうでないのなら会いたいとも、触れたいとも、抱きたいとも思うはずがない。しかし、果たしてそうなのか？

「他に男がいる、それも不倫している女を抱いておいて、どこに愛があるというのか？」

　いまはそうでなかったとしても、結果的にそうなればいい

「そうなれば？その前に嫉妬に狂い、縛らずにいられなくなる。憎まずにはいられなくなる。」

　嫉妬、拘束、愛憎。そういうことじゃない。僕は彼女を……

「抱きたくなったから抱いた。だって好みのタイプじゃないし、彼女だってお前のことを好きだとか、愛しているとかいったことがないじゃないか」

　言葉に出していったことがすべてじゃない。今というときがすべてでもない。過去から今、そしてその先に続く道に可能性がある限りは、何も否定できない。

「なにも肯定できない」
　そうとも。それが罪深いことだというのなら、愛とは時にそういうものなのかもしれない。僕は……愛を知らない。

「いや、それは嘘だ。お前は嘘をついている。お前は愛を知っている。お前は愛に触れている。思えは愛を抱いている。そして、それと等質、同量の嫉妬を知っている。」

　僕の胸の中のざわめきは、あなたを抱いたときから始まった。あのときあなたを抱かなかったら、僕はこんなに苦しい思いをしないですんだのかもしれない。でもそれは無理だったろうと僕は思う。僕があなたにかなうわけがなかった。あなたに抗うすべを持ってはいなかったし、あなたに安らぎを与えることも、まして導くことなど出来やしなかった。あなたがどこかはかなげでいるのが怖くて、僕はあなたを抱くことでしかあなたの存在を僕の前につなぎとめておくことができなかった。

「そう、お前が抱いていたのは彼女自身じゃない。彼女のすべてじゃない。そして知らなかったものを知った」

　僕は、あなたの何を抱いていたのだろう？

　あなたは僕に何を許したのだろう？

　でも、あのときの僕には、あなたに向かい合う事ができなかった。愛を知り、愛に触れ、愛を抱き、そして怖くなってしまった。愛することは、それと同時に憎むことでもある。愛が深ければ深いほど。愛する気持ちが強ければ強いほど、それは僕の心の中のより不確定な要素となって、僕をぐらぐらと揺らす。

　二度とあなたに触れることの出来ないと知っていれば、僕はあなたに触れる事ができただろうか？　あなたを抱く事ができただろうか？　愛を知った今ではできない。知る前だからできたのだと、今ならわかる。あなたを失った今の僕になら。

　僕がこの歌を思い浮かべるたびに、あなたは表情を変えてしまう。月日を重ねれば重ねるほどに、まるであなたも同じだけの齢を重ねたかのように。追いつくことのない螺旋の先にいるあなたは、いつまでも僕をせつない思いにさせる。常しえに続く刹那の苦しみは、僕を狂わせずにはいられない。生爪を剥ぐような痛みですら、僕の狂おしい思いはとめることはできない。ただ、落ちていくしかないような思いに身をゆだねるほかに術はない。恋に落ち、愛に溺れるなら、いっそあなたを抱くそのときだけは、僕はあなたそのものに手を触れたいと思っていたのに。

第３章　完
第４章につづく

砕け散った心

　何の前触れもなく訪れた悲劇の前に、僕の心は見るも無残に砕け散った。あなたを失うということをまるで考えもしていなかったし、考えないようにしていたのだから、まったく無防備なところに巨大なハンマーを振り下ろされたようなものだった。抵抗することもなく、身構えることもなく、ただ、バラバラになってしまった心の欠片の一つ一つを拾い上げて、眺めるしかなかった。そして、そのたびに僕の指は傷つき、感覚を失っていった。

　心の痛みはやがて、当たり前のように身体を痛めつける。人を思う気持ちが、こんなにも自らの身体を痛めつけるものだと知ったとき、僕は臆病になった。それはろうそくの火に手をかざして火傷をしそうになった子供が、火傷をするかしないかのスリルを味わうようなゲームとは違う。つめたい氷を触り続け、感覚がなくなったところに大怪我をしてしまったような、傷ついたときには感覚がなく、後からじわじわと痛みが増してくるような嫌な感覚。

　もう誰かを愛するなんて怖くてできない。

　あなたを失った僕の心は常に緊張し、あなたのことを思い出すたびに胸が苦しくなる。それが始まると、しばらくほかの事は考えられなくなる。あなたの名前、あなたの声、あなたの匂い、あなたに繋がる全ての記憶が苦痛へと代わる。あなたを忘れることなどできない。

　だから苦しい。

　永遠に続くかのような苦しみは、それが永遠に続くのだと僕がわかるまでの間、常に僕を苦しめた。僕がそのことに気づき、理解し、その傷を自分の一部だと認めることができるまでの歳月は、目に映るもの全てが恨めしく思えた。あなたと『別れた』という事実より、あなたを『失った』という真実は残酷だった。

　そう、僕は、あなたを失ったのだ。

　それは何気ない一本の電話。僕からかけたのか、あなたからかけてきたのかその記憶もない。
「もしもし、うん、うん、そうなんだけど……あのね」
　最初の会話がぎこちないのはいつものことでだ。僕はあなたがどんな格好で、どんな顔をしながら電話をしているのかを思い描きながら言葉を選んでいく。しかし、その日、その電話のときには言葉が見つからなかった。あなたの心はそこにはなかったのかもしれない。用件を言わなければと、今度いつ会えるかとその話を切り出す。どうにも格好が悪いが仕方がなかった。

「もしかしたら、もう、あまりあえないかもしれないの」

　一つ一つの言葉の意味を僕は理解しようとして失敗した。
「えっ？」
　沈黙はさほど長くはなかった。しかし、その間は、その言葉が冗談ではないことを何よりも語っていた。僕にはそれがわかってしまった。わかりたくないことをわかってしまったとき、人はそのことをもう一度確認しようとする。

「どうして？」
　ちがう。どうしてかなんて聞きたくはない。この質問は間違っている。しかし他にどうすることもできない僕は、その質問の答えを待つしかなかった。

「ふー君だけじゃないの。もう彼とも会わないことにしたのよ」
　答えにならない答えが、時にはすべてを言い表すこともある。受話器から聞こえるあなたの声には迷いというものがなかった。しかし戸惑いは感じられた。そのわずかな揺らぎが僕にわがままを言う隙を与えた。

「電話だけじゃわかんないよ」
　あなたは目をつむり、何かを考えている。僕はそんなあなたの姿を電話口の向こう見ていた。あなたは沈黙で僕に語りかけ、僕はそれを拒否した。僕は泣き出しそうになっていた。それから先のことは惨め過ぎて覚えていない。記憶がすっかり飛んでしまっている。しかしその惨めさの感覚はしっかりと残っている。残っているからこそ、それは僕の慰めとなっている。あなたを失ったことへの代償――その惨めさが、ある程度帳消しにしてくれたからである。

　それほどに、僕は　傷ついた。

　あのときのことを思い出すのは苦痛以外の何物でもない。しかし、その痛みを感じることは、あなたを――君を感じることに他ならない。君はあの日のままのあなたでい続ける。あなたを失ったその大きな穴を埋めることなく僕は生きてきた。会えるはずのない君が、あなたのままでいるかぎり、僕はあなたを失ったままでいいと思っている。でも、あの頃の僕には何もわからなかった。何もわからないまま狂うしかなかった。

　僕にとって一人で夜を過ごすということは、狂ってしまった自分自身を見張る夜でしかなかった。気を抜けばすぐに家を抜け出し、夜の街にあなたの姿を捜して回る。僕の心は――いや、心以上に僕の身体があなたを求めていた。あなたのぬくもりは、あなたでしかないと気づくまでに、僕は自分自身と、他の誰かを傷つけるしかなかった。

　砕け散った心はもとには戻らない。

　あなたを知ってしまった以上、あなたを知らなかった自分には戻れない。あなたを失った自分は、いったいどうなってしまうのだろう。無機質な疑問が僕の心に突き刺さる。

　僕は、あなたなしで　生きていけるのだろうか？

　哲学じみた問いに、僕は呆れてしまうだけだった。季節は春になろうとしている。あなたと僕の間の変化は、その一月ほど前から現れていた。でも、僕には何の予感もなかった。でも、今でもそう言いきれるかどうかは疑問が残る。あなたがホステスのアルバイトを始めると言った時、快く思わなかったのは確かだった。

「アルバイトのほうはどう？」
　なぜ聴きたくない事を聴こうとしているのか、僕には理解できなかった。でも、それは僕の内側から湧き出る素直な感情なのだ。知りたくないのに、聴かずにいられない。見たくもないのに見ないでいられない。それが僕の未熟さゆえならば仕方がないことだし、あなたがそうさせるというのであれば、なおさらに僕にはどうすることもできないことだったに違いない。

「面白いわよ。いろんな人がいて……でも、つまんない。案外と普通というか、世の殿方というのはみんな同じなのね」
「同じ……たとえば？」
「自慢話しかしないとか、女を低く見ているとか、エッチなことしか考えていないとか……かな」
「そうなんだ……結構口説いてきたりするんだ」
「紳士的に振舞ってみても、露骨に態度にあらわしてみても、方法が違うだけでみんな同じよ。それをかわいいといえばそうだし、情けないといえばそれもそうだわ。まぁ、口説いて口説けたら儲けものって感じかしらね」

　僕はなんとなくあなたの店での振る舞いがどんなものであるのか想像ができた。きっとあなたが思っている以上に、男たちの視線は好奇な目で見ているに違いない。それ以上のことを想像するには、僕にはいろいろなことをあなたに聴かなければならない。それが嫌で、それ以上話をしようとはしなかった。

「大変？」
「そうでもないわよ。それなりに面白いこともありそうだし、ママが結構気を使ってよくしてくれるから居心地は悪くないわよ」
「へぇ、そうなんだ……今度こっそり言ってみようかな」
「それはダメ。だってあんな姿見せたくないもの」
「あんな姿って？」
「ほら、私ってあんまり女っぽいって言うか、色気のある格好しないじゃない。スカートとか苦手だし」
「ああ、確かにお店ではそれなりの格好しないといけないか」
「短いスカートなんてほとんど履くことないから」
「でも、そう聞くと益々見たくなっちゃうよ」
「ダメよ。絶対笑うわよ」
「笑わないよ。絶対」
「嘘、だって私が笑っちゃうのよ」

　あなたはなんともいえない儚げな笑顔で微笑む。僕の心を捉えて離さない魅惑的なその表情は、目元は子供っぽく、口元は妖艶に肌の色は妙に透き通って見える。あなたの短い髪の毛はあなたの笑顔を隠したり曇らせたりすることがない。あなたは何も隠さない。でも同時にそれは『本当の自分』『素顔の自分』をたくさんの嘘に紛れ込ますようにして僕の詮索を許さない。

　あなたはいつも真実。そしてあなたはいつも虚無。

　本当のことがわからないのではない。本当も嘘もない。ただ、そこにあなたは存在し、僕はあなたを見ていただけなのかもしれない。でも、僕は本当のあなたを見ようとして、本当のあなたに触れようとして、目の前のあなたの存在をまるで立体ホログラムのように感じていたのかもしれない。

　あなたは何を考えているのだろう

　あなたは何を思っているのだろう

　あなたは何を見ているのだろう

　あなたは何を求めているのだろう

　そして、僕は一つの結論を得ていた。

　あなたは　きっと『本当の自分』を探し求めているに違いない。

　僕がそうなのだから

　あなたも　きっと　そうに違いない

　だから、僕は、あなたにいやだと言えなかった。僕の気持ちを伝えることができなかった。あなたが真実の階段を一段一段上り、やがて『本当の自分』にたどり着いたとき、そのときに僕はあなたのそばにいよう。そしてあなたがそのとき、僕を選んでくれるのなら、僕を受け入れてくれるのなら、そのときは……

「あっ、もうこんな時間。そろそろ準備しなきゃ」
「あぁ、じゃあ、帰るね」
「うん、ごめんね。ゆっくりできなくて」

「……駅まで一緒に行く？」
「だめよ。ふー君には見せたくないから」
「でも、スカートはくところは見てみたいな」
「似合わないわよ」
「小学生のころ、スカートめくりってはやってたけど、やったことないんだ」
「ぷっ、ふふふふ……そうなの、私なんかしょっちゅう男の子にやられてたわ」
「だから、一度やってみたいなぁって」
「はいはい、わかりましたよ。今度好きなだけ……」

　僕はその後のあなたの言葉を、僕の唇で塞いだ。あなたは少しだけ戸惑い、でも僕を受け入れてくれた。あなたのぬくもりが残っているうちに僕はあなたの部屋を飛び出した。僕はあなたを困らせることで、僕の本当の気持ちを伝えたいと思ったのかもしれない。感情を押さえつければ気がふれそうになり、解放しても何も満たされない。僕には真実の階段すら見えていなかったのかもしれない。

「ロンドンってなんだよ？」
「ロンドン、ロンドン、ロンドン、ロンドン」
　Ｋ２はフレンチカンカンらしき奇妙の踊りをしながらふざけている。そういう姿は無性に腹が立つのだが、同時に腹のそこから笑いたくなる。まったく困った奴だ。

「１ヶ月になるかもしれないし３ヶ月以上になるかもしれない」
「そんないい加減なものなのか？留学って」
「俺もよくわかんないだけど、あの馬鹿オヤジが決めたことだから」
「まぁ、あのオヤジさんのことだから、そういうこともあるのかもしれないけど……」
「まぁ、何とかなるでしょう。あ、それポン」

　Ｋ２とは柏木謙介のことである。小学校からの腐れ縁、高校からは別々になったが、それまで僕は奴とずっとつるんできた。いや、実際は中学に入ってからのほうがより親密になり、高校受験では、受験勉強をすると言ってはマージャンに明け暮れた。要領のいい――それは結果的な話だが、僕は目標の中堅の公立高校に受かり、ヤツは私立の男子校にようやく引っかかった。正直僕はガッカリした。『やればできる子』Ｋ２は自他共に認める頭の回転は速いが、勉強に対する集中力、そして進学や将来に関する「一般的な不安」を持ちあわせない、面白い奴だった。僕はやはり、大学に進学する事を熱望していたし、そのそもそのきっかけを作ったのはＫ２だったのだ。中学生のときに奴の面倒を見ていた家庭教師でありＫ２の将棋の弟子の角田さんという法政大学の学生が居た。

「そういえば角田さんって、最近どうしてるの？」
「知らない。どこだったか出版社に就職したって話を聞いたけど、仕事忙しいんでしょう」
「そーなんだ……あ、ちょっとまってね。よし、リーチ！」
「やばいやばい。親のリーチだよ」
「逆らうと火傷するぞ」
「チー」
「あ、この野郎！一発消しやがって」

　角田さんは絵に描いたような自由人だった。少なくとも中学校の校則に縛られながら毎日過ごしていた僕らには、そう見えた。あるとき角田さんに誘われて、大学の学園祭に行くことになった。そこで僕等ははじめて若者だけの世界、自由で奔放な世界を垣間見た気がした。中学生から見た大学生というのは、それはもう、ある意味大人を見る目とそれほど変わらない。しかし、その彼らは、まるで子供のようにはしゃぎながら露店でやきそばやお好み焼きを売っている。しかし、校舎の中を覗けば、心理学を利用した性格判断や、世界各地で撮った戦場の写真。まった

く意味がわからない前衛的な自主制作映画。そこには混沌があった。僕はその空気にすっかりと当てられてしまい、大学に行くことを熱望するようになったのだ。

「だいたいお前、英語なんかまったくしゃべれないじゃないか。いやいや、英語どころか日本語だってまともな点数取ったことないのに」
「ディス・イズ・ア・ペン」
「そりゃ点棒だ」
　Ｋ２とは、当然に柏木謙介の頭文字ＫＫから来ているのだが、登山が趣味のヤツが言うところはもちろん世界で最も登頂が難しいという中国とパキスタンの国境沿いにある標高８０００メートル級のカラコルム山脈にある世界第二位の高さの山のことである。Ｋ２は人気者である。奴がいる場は必ず笑いが起きる。実際マージャンをすることよりも、奴と他愛もない馬鹿話をすることのほうが目的で人が集まるのだ。そのＫ２が海外に留学するというのは、僕にとってなんとなく寂しくもあり、悔しくもあった。

「ちぃっ！なんだよこれ。やな流れだなぁ」
　リーチ後に鳴きが入り、本来自分が積もるのとは違う牌が僕のところにめぐってくる。その流れを作ったのはＫ２であり、その牌は明らかにＫ２の仕掛けに対して危険なものだった。しかしリーチをかけていれば問答無用で捨てなければならない。
「やめて！」
「ローン！ロンロンロンローン！」
「うるせぇよ」
　場から笑いが起きる。もちろん僕以外からだ。
「タンヤオドラ１　２０００点」
　奴にはかなわない。学校の成績やおよそこの年齢で求められる一般的な社会的要求に対して、僕はおよそ奴よりも評判がいい。しかし、そんなことはどうでもいい。僕はなりたかった大学生になり、そこで何一つ得られないでいた。だから、髪を伸ばし、バンドを始めた。思い描いていた憧れは、そばに近寄ってみてみると、案外にすかすかで、実感の伴わないものだった。幻滅こそしなかったが、手品のタネを見てしまったような残念な感覚は常に日常に漂っていた。しかしＫ２には、そんなものは微塵も感じられなかった。やっていることは滅茶苦茶だが、少しずつ距離を開けられているようで、僕は嫌だった。

「で、いつから行くんだ？そのロンドン」
「あれ？来週だったかな？いや、再来週か？わかんないや」
「おいおい、準備とかいろいろあるんじゃないの？」
「大丈夫、パスポートはもう準備したから」
「いや、そりゃ、最低限の話だろう」
「だから、大丈夫」

　そうなのだ。奴なら多分大丈夫なのだ。僕なんかと違って――
「向こうで落ち着いたら手紙くらい書けよ」
「日本語がまともじゃない俺が、なんで手紙なんか書けると思う？」
「ふん！漢字は書かないとすぐに忘れるぞ」
「忘れるも何も、そもそも覚えていないから」
「ほら、選別だ！２０００点」
「ありがたき、しわよせ」

　馬鹿話をしながら、いつまでもマージャンは続いた。そして、奴が言っていたより早くＫ２はロンドン行きの飛行機に乗ったのだった。そして一ヵ月後、約束どおり、奴から手紙が届いた。その手紙の内容は、筆舌に語れないほど、珍妙で誤字と脱字、意味不明な日本語で綴られていたのだが……

　その手紙が思わぬ役割を果すことになるのは、まだ先の話である。

　僕は変化を感じていた。それが望んでいた変化かと問われれば、否と応えるべきか、そうするべきか迷うところだったろう。大学に進学し、やりたかったバンドをはじめ、女もできた。事象だけを挙げれば確かに充実しているように思える。しかし、僕の心は充実という言葉とは全く不釣合いな状態にあった。

　ずれている。
　何もかもがずれている。

　もっと早く生まれたかった。あと１０年早く生まれていれば、学生運動に参加し、ビートルズもリアルタイムで聴けただろう。そしてあなたと出会うことがあったなら、僕はもっと……

　簡単に甘えられるほど、僕のそれは、素直ではなかった。しかし、甘えずに居られるほど僕のそれは成熟してもいなかった。

　調子外れはやめてくれ。
　真新しいリズムに乗せて誰かが叫んでいる。それは僕のことなのか。それは僕なのか。

　あなたを抱く事が、あなたと会う理由なのか。それともあなたに会うために、あなたを抱いて帰るのか。何もかもがずれている。

　僕はずれている。

「それはなに？」
「基礎体温測るようにしたんだ」
「へぇ……でも、それって」
「私、基礎体温低いのよ。月のものも時々ずれたりするから、基礎体温を測ってちゃんと記録をつけなさいって」
「病院にいったの？」
「そうよ」
「なにか……心配事でも？」
「自分の身体のことだから、ちゃんとしないと……私もう、下ろしたくないから」

　何か不思議な気がした。それはなんでもない会話のようで、やはり、僕はずれている。あなたの言うことも、あなたがしていることも僕にはわかっている。わかっているのに僕はずれてしまっている。なぜかはわからない。ただ、あなたを困らせたかったのか。ただ、あなたに甘えたか

ったのか、ただ、あなたを抱きたかったのか。

　だから僕は自分の話しをした。僕の少年時代、どんなテレビを見て、どんなことをして遊んでいたのか。どんなふうに音楽に出会い、どんなアーチストに憧れているのか。どんな子と付き合っていたのか。僕は昔付き合っていた彼女の写真をあなたに見せた。それはあなたがそうしたように。あなたの見せてくれた写真に写る見知らぬ男のことを話すように、僕もあなたに話して聞かせた。でも何かがおかしかった。

　知れば知るほど、語れば語るほど、僕の中で何かがずれていく。

「彼女のこと今でも好きなのね？」
「好きだよ。それは間違いない。だから、凄く後悔している」
「いつかまた、一緒になれるといいね」
「うん……でも、それは難しいかもね。彼女を目の前にして、かける言葉が見つからない」
「好きだって、それでいいんじゃない？」
「そうなのかな？」
「難しく考えすぎよ。考えるよりも感じることのほうが大事なときがあるのよ」
「でも、考えたいんだ。いろいろと……考えないでいられないんだ」
「難しいのね」
「うん、難しい。難しくい考えないってことが、難しい」

　僕はいったい誰と話をしているのかわからなくなり、あなたの顔をまじまじと見た。あなたはそこにいる。そこにいるあなたは、いつものあなたのはずなのに、僕にはどこかずれてしまっていた。
「あっ、そうだ。ちょっと面白いものを持ってきたんだ」
　僕は下手な芝居の見本のようなぎこちない様子で――それでもあなたはまるでかまわないようなしぐさで僕を見つめている――ブルゾンのうちポケットから手紙を取り出した。Ｋ２の手紙だ。封書にはお世辞にも二十歳になろうかという者の字ではなかった。僕も上手じゃないが、Ｋ２とあと二人ほど、僕は自分より字を書くのが下手な奴を知っている。

「これだよ。この前話していた腐れ縁の面白い手紙って」
「あー、あのＫ２君だっけ？」
「そうそう柏木。柏木謙介のエアメール」
　僕がＫ２に対して毒づいて字が下手だ、日本語になっていない、意味がわからないとあなたを笑わせようとする。あなたは話の内容よりも、一生懸命に親友の悪態をついている僕の様子に関心があるらしい。散々手紙の内容を僕が笑った後、あなたはこう言った。

「いいわね。心を許せるお友達がいて。うらやましいわ」
「心を許す？　まぁ、身体は許せないから、少しくらい気は許しているかもしれないけど、そんなきれいなものじゃないよ」
　僕はあなたが前に話してくれたクラスメイトからの嫌がらせのことや、母親の浮気現場を目撃してしまったこと、付き合っていた男との間にできた子供をおろしたこと。そんなこをと一気に思い浮かべて、そしてそこには心を許せる女友達といった存在がいないことに気づいた。そういう負の情報を共有して、慰めるなり、怒るなり、泣くなりしてくれるような身近な人は、今のあなたにはいないのだと、そんなことを考えた。そして思った。

　だから、僕は、あなたにとって、そういう存在なのか？

「今度あってみたいわね。Ｋ２君と」
「そうだね。ロンドンから帰ってきたら一緒にご飯でもいこうか。まぁ、たぶんがっかりするか、すごくがっかりするかのどちらかだと思うけど」
「ひどいこというのね」
　僕はあなたの微笑む顔がみたくて、なんだか少し無理をしているようだった。そうでないと僕はまたつまらないことを考えてしまいそうだった。もう少し談笑したら、僕はこの部屋を出て行く。そしてあなたは派手な衣装に身を包み『僕の知らないあなた』になって、夜の街の中に消えていくんだ。少なくともあなたの前でだけはそのことを考えないようにすることが、僕の精一杯だった。

「ああ、そうだ。そういえば手紙を忘れてきた」
　５分ほど歩いたところで、ふと、Ｋ２の手紙をそのままにしてきたことを思い出した。一瞬引き返そうと思ったが、きっとあなたはそれを嫌がるだろうと考え、僕はそのまま家に帰ることにした――別に、急ぐことはない。

　家族に顔を合わせることも泣く、僕は自分の部屋に閉じこもる。いつになったら、眠れない夜は終わるのだろうか……嗚呼、僕は今夜も眠れない。朝方あなたが部屋に戻るころまで、僕はベッドの上で独り毛布に包まって、あなたを　想う。また　いくつもの　眠れない夜を越えなければならない。

　僕は、少しだけ、気がふれそうになっていた。

違和感

　違和感――　一言でいえばそういうことになる。しかし具体的にそれが何かを考えてみると、これほど言葉に窮するものはない。ただ何となく、おかしいと思う。ただ何となく、不安に思う。いつも見ている風景、いつもの会話、いつもの感触。いつもと同じはずなのに、何かが違う。ざらざらとした不快感ほどはっきりとはしない。しかし、目を閉じてじっとしていられるほど落ち着いてはいられない。

　だから僕は、あなたから目が離せない。あなたの声をもっと聴きたい。あなたに触れていたい。でも、そんなことが叶わないことは、初めからわかっていることなのに。わかっていることなのに、どうすることもできない『違和感』がそこにはある。

「明日は、あー、明日は木曜日か……」
「うん？どうしたの？」
「いや、ちょっと近くまで来る用事があるから、ついでに寄ろうかなって思ったんだけど」
「木曜日は……」
「わかってるよ。でも、毎週ってわけじゃないんでしょう」
　彼女があの男と毎週木曜日にあっていることはわかっている。僕はそうしているあなたに出会い。そしてここにいる。そんなことはわかっている。わかっていても、意地悪なことを言いたくなることもある。

「意地悪ね」
　そう。僕の心には、どこか荒んでいる。それを気づかないふりをしてきたことへの違和感――それもある。
「いいわよ。明日は彼とは合わないわ。彼をここには呼ばない。そのかわり、ふー君も来ちゃだめよ」
「意地悪だね」
　そう。あなたはいつも僕を困らせる。それを素敵なことだと感じていた。でも、いつもそうだというわけではない。今日みたいなのは最悪だ。でもそうなるとわかっていても、僕は感情を抑えられなくなっている。感情と理屈の祖語からくる違和感――それもある。
「そうよ。意地悪には意地悪で返すの」
「じゃぁ、優しさには？」
「もちろん、意地悪で返すわ」

　あなたの言葉も、声も僕の心を揺さぶる。僕はそれに抗うすべを知らない。好きにならずにいられない。それがどんなに僕を苦しめるような言葉でも、僕はあなたを好きにならずにいられないことへの違和感――それもある。

「電話をしてもいい？」
「いいわよ。でも明日は少し帰りが遅くなるかもしれないわよ」
　あなたはタバコに火をつけて、しばらくタバコの煙の行方を目で追っていた。僕もタバコに火をつける。僕は煙を下に向けて強くふかした。メンソールのひんやりとした感触が、無理やりに心を落ち着かせようとしているようで嫌だった。いつものタバコなのに、いつものことなのに……見るもの感じるものすべてに違和感を感じていた。

「そういえばライブの日程決まったんだっけ？」
「あ、うん。４月９日だっけな。一か月ちょっと先」
「楽しみね。練習のほうはどう？」
「いや、それがまだ、選曲のところでもめててさ。なかなか決まらないんだ。とりあえず１曲は決まってるんだけど」
「どんな曲」
「Tレックスって知ってる？　『Get It On』って曲なんだけど」
「それってたしかパワーステーションだっけ。ふー君が好きな」
「そうそう。パワーステーションがカバーした曲」
「いいなぁ、見に行きたいけど平日でしょう？　横浜だっけ」
「うん。大学の音楽サークルが集まって新入生歓迎ライブって形でやるからね」

　しかも、その日は木曜日だった。僕はあえてその話は触れなかった。僕はタバコの火をけし、小さなため息をつく。
「知ってる？　ため息をついた数だけ幸せが逃げていくんですって」
「ため息なんかついてないよ。ただちょっと……」
「ただ？　ちょっと？　なに？」
「考え事をしてただけだよ」
「どんなこと？　どんなことを考えていたの？」
「言えない」
「エッチなこと？」

　あなたも静かにタバコの火を消す。その自然な振る舞いは、僕を悩ませる。あなたの白い細い指が僕の指に絡まる。僕は違和感を抱いたまま、あなたを抱き寄せる。あなたの細い体をきつく抱きしめる。嗚咽とともにあなたの指先が僕の背中を強くかきむしる。頭の中は相変わらず冷静に違和感を探している。俯瞰で抱き合う二人を見るような錯覚の中、僕はどうしようもないくらい道化のような気がしてならなかった。あなたが耳元でささやく。

　「来て……」

　僕が迷うことなく行くことができたのなら、あなたの心に触れることができたのかもしれない。でも僕は、どうしても違和感を無視するとことはできなかった。あなたを知ることよりも、僕はその違和感の正体を知りたいと思うようになっていた。

雨の木曜日

　夕方から雲行きが怪しくなっていた。約束は７時半に駅前に集まることだったが、僕はその時間にはまだ家の中にいた。

　雨

　雨は、街を濡らし、灰色の世界にしてしまう。そして雨は僕の心の中にも降り出していた。僕の頭の中には、一つの大きな傘の中に身体を寄せ合う、彼とあなたの姿がおぼろげに見えていた。あなたはどこか遠慮しがちで、それでも腕はしっかりと彼の大きな腕に絡ませている。

　不意に電話が鳴る。約束の時間を１０分ほど過ぎていた。
「ごめん、ちょと用事ができて……あー、あー、いつもの店に、わかった。もう少ししたら出るから８時過ぎになると思うけど先にはじめてて。悪い」

　気が乗らない。冷たい雨が心を凍らせる。どんなことをしていても、どんなことを考えていても、あなたのことが頭に浮かぶ。あなたは言った。「彼をここには呼ばない」って。でも、きっとどこかで会っている。あなたの部屋以外で……
「こんな日に、酒なんか飲んだらろくなことにならないな」
　雨は激しくもなく、やさしくもなく、ただただ無表情に夜の空から落ちてくる。まるで宙を舞う生き物の屍骸が降り注ぐようかのような生命の欠片も感じないような雨――黒い雨。

　僕の心を黒く染めていく。

　８時過ぎ、駅の眼の前の雑居ビルの２階で仲間と合流する。高校の頃の同級生。彼らは卒業後、専門学校へ行った連中だ。そのうちの一人はこの春、学校を辞めるという。
「専門学校って言っても、高校の授業とかとそんなに変わらないし、何も面白いことないからさ」
「でも、せっかく高い学費払って入学したわけだし、もったいないじゃん」
「でも、親にはもう相談したから」
「で、やっぱり家の仕事を手伝うのか？」
「うん。大工をやるなら早いほうがいいと思って」
「大工か……俺にはぜんぜんわからないや」
　藤田は、少しばかりあがいてみたものの、やはり自分には、そういうこと――僕がそつなく大学にいって、それなりに学生らしいことをするようなことにはついていけなかったようだ。やると決めたら迷わない。もしかしたら自分には一番足りないところを藤田は持っているのかもしれない。

「まぁ、そういうことだから、今日はその報告を兼ねて学生最後の飲み会みたいなね」
「じゃぁ、派手にやろうか！景気づけに何歌おうか？」
　行きつけのカラオケ居酒屋。客層はばらばらでいろんな客が来る。深夜５時まで営業して、よくここで知り合った客と意気投合して朝まで馬鹿騒ぎをした。もちろん喧嘩や揉め事もないわけじゃない。何よりもここの店員やマスターとはすっかり顔なじみで、いつも便宜を計らってくれる。この街で一番居心地がいい店だ。

　藤田と同じく専門学校に進んだ平岡も専門学校の生活には壁へきへきとしているらしかったが、奴にはこれといってやりたいこともないようだった。好きではじめたエレキギターもさほど上達できず、ヴォーカルに専念するといっていた。高校在学中に２度ほど、平岡と彼の中学のときの同級生らとスタジオに入ったことがある。僕はそこで初めてドラムを叩いた。しきりに平岡はバンドをやりたいというが、僕はどことなく乗り気になれなかった。もちろんそれは平岡のせいではなかった。

「どうしただよ。なんだかのりが悪いじゃん」
「そう？　そんなことないよ。ほら、次、俺の番かな」
　いつも歌っている曲なのに、いつの間にか歌詞の中にあなたの姿を探してしまっている。どうしようもなく、あなたに会いたくて……僕は心のそこから叫んだ。

「なぁ、悪いんだけど、ちょっと席はずすわ。とりあえず、これだけおいていくからさ。もしかしたら戻ってくるかもしれないけど、とりあえず気にしないで飲んでてよ。適当に帰っていいからさ」
「どうしたんだよ。あー、女だな」
「否定はしないけど、まぁちょっと約束があってさ」
「いいよ。俺たち好き勝手にやってるからさ。まぁ、楽しんでこいよ」
「だから、そんなんじゃないって。ともかく、この埋め合わせはまた今度。悪いな」

　藤田も平岡も快く送り出してくれた。傍目にも我が心ここにあらずという感じだったのだろう。なんともみっともない話だ。「たかが、女の子とで……」
　そう吐いたものの、僕の心はどうしようもない衝動を抑えられずにいた。今すぐあなたの部屋に駆け込みたい。そしてあなたを――

「それで、どうするか……かぁ」
　僕には何もなかった。何もないからこそ確かめずにはいられなかった。それが、若さというものなのだろうか？　雨は相変わらず、無表情に街を濡らす。街頭の明かりと地面の間に割り込み、わずかな暖かさもこの身に届けまいとしているかのようだった。寒さが人恋しさを増す。あの

まま、仲間と一緒にいたら、こんな凍えるような思いをしないで済んだに違いない。でも、そうせざるを得ないのが、やはり若さなのだろうか？

　未熟さなのだろうか？

　吐く息が白い煙となって闇に解けてゆく。タクシーのテールランプの赤が妙に毒々しく目に映る。通り過ぎる人影を無視して僕は歩き出す。あなたの部屋へ。約束が守られているかどうかを確かめるために、僕は約束を破ろうとしていた。

　近道はある。もちろんそれは高々１分に満たない程度のショートかとでしかない。駅からあなたの部屋まで大通りをそのまま行けば７分くらいかかる。急げば５分をきることはないが、６分かからない――しかし、雨である。僕のはやる気持をまるで逆撫でるように雨は無機質に僕の行く手をさえぎる。雨がというよりは、ゆるい坂道を下る道に色とりどりの傘が、弱弱しい街頭と白々しいネオンに照らされて不機嫌に行き交う中、僕はすり抜けられそうで、すり抜けられない人と人の隙間を、傘を斜めにしながら強引に追い抜かすしかなかった。

　僕は　苛立っていた。

　もしも雨が降っていなかったら、僕は走ってあなたの部屋の前まで行き――そしてどうしただろう？　怖気づいて引き返したか、あなたを裏切る勇気を持って、ドアをノックしただろうか？

　そうならなかったことが、よかったのか悪かったのか？　いや、やはり、結果は同じだったと、今はそう思える。

　冷たい雨と、なかなか前に進まない苛立ちは、僕の衝動を駆り立てていた未熟な暴走をも鈍らせた。計らずして、僕は冷静さを取り戻した。僕はあなたの部屋には向かわずに公衆電話を探した。思い当たった電話ボックスはどこも使用中で、結局駅のほうへ少し戻ることにした。運よく――そのときはそう思った――眼の前でサラリーマン風の男が電話ボックスから出てきた。財布からテレフォンカードを取り出す。ボックスの中はタバコのにおいと酒の匂いに混じって雨に濡れたコンクリートの匂いがした。そのくらい、僕はすっかり覚めていた。そうなると少しばかり意地悪なことも僕の頭の中に駆け巡り始めた。

「もしも、キクちゃんが約束を破っていたら、僕だって守るものか。そのときは……」
　どうしようもなく不誠実な思いは、屈折した愛の形によく似ていた。いや、最初から屈折していたのか、そもそもそれが愛なのか――それも　すべて　あなたがいけない。
「そしてこの雨と……」
　ボタンを押す指の先は、雨で少し濡れていた。いや、最初からボタンが濡れていたのかもしれない。ともかく冷たくて嫌な感じがした。電話に出て欲しいのか、出て欲しくないのか。そして――

「Please , tell me your name?」

　あなたの声――いや、電話の声。僕は思わず声を詰まらせ、そして緊張でふさがったのどをこじ開けるために、大きく息を吸い、咳払いをした。自分の名前を言おうとした瞬間、不意に受話

器からカチャッと音がした。相手が――受話器を――とる音。
「もしもし――フー君？」
　緊張は一気にほぐれる。身体が熱くなる。言葉を捜す。
「ごめんなさい。今は、ダメなの。ごめんなさい。後で電話するわ」

　カチャッ

　ツーッ　ツーッ　ツーッ　ツーッ　ツーッ……

　雨は降り続ける。受話器を置く。ＯＬ風の女性が二人、僕の後ろに並んでいるのが、雨に濡れた電話ボックスの壁に映りこむ。どんな顔をしてここから出ればいいのかわからない。まずは、そこからだ。それから先のことは……考えられない。考えたくない。考えちゃ……いけない。

　大きく深呼吸をして、バイトで接客をするときのような顔を自分のイメージの中で作る。どんなにそれが卑屈であっても、笑顔であれば、いい。ボックスに映りこむ自分お顔を思いっきり殴りたい衝動を抑え、そして下を向きながら電話ボックスをでた。

「お待たせしました」

　自分の声が許せないほどに卑屈で、僕は大きな声で叫びだしたくなった。いっそ叫んでしまったほうが楽に違いないのだが、それを飲み込むしかないもどかしさに、思わず気分が悪くなり、胃の中のものをすべて吐き出したくなった。なんて惨めな酔っ払いなんだ。

「みんな、雨に打たれてりゃいい」
　思わず頭に思い浮かんだ歌詞を口ずさんだ。同時にその曲のメロディーが僕の頭の中を支配した。ヴォリュームが壊れてしまったラジオのように、けたたましく鳴り響く音楽は、僕をどうしようもない狂気へと掻き立てる。僕の足は、あなたの住むアパートへと向かっていた。あなたと、そして彼がいるアパートへ。

螺旋階段

　雨に濡れた街を僕は白い息を吐き、うつむきながら歩いた。目の前に映る風景はすべて死んでいるようで、まるで温度も感じられなければ表情もなかった。世界が色あせていく様は、僕の心そのものなのか、或いは暗闇の中の映し鏡のように輪郭だけの世界に自分の身体半分を囚われてしまった不条理さを映し出した青写真のようであった。

　紡ぐべき言葉も見つからなければ、断ち切るべき思いも、縫い合わせなければならない破れた心も僕は、持ち合わせていなかった。ただ、あなたの部屋に行くこと。玄関のドアをノックして、あなたが部屋から出てくるのを待つだけ。それしか考えることが出来なかった。そしてそのことがどんなことを意味すのかなど、まるで気にすることも出来なかった。ただ、こめかみに当てたピストルの引き鉄を引くまでの間の、僅かな瞬間を慈しむだけで、僕の心は満たされていった。

　もう、終わりにしよう

　そんなありきたりで、ありふれた、どこにでも転がっているようなチープな感情が僕を支配していた。白い息を吐くたびに僕の体温は奪われていくようで、それはそれで心地よかった。いっそ凍り付いてしまったほうが、痛みすらも感じないほどの無表情な残酷を受け入れることが、僕には必要だったのだ。

　壊れてしまうなら……いっそ壊してしまおう

　ところが僕は、あなたの住むアパートの前まで来るとすっかりと怖気づいてしまった。何をいまさら恐れることがあるのか。何をいまさらためらうことがあるのか。

　あなたを　失いたくない

　いや、そもそもあなたは僕のものでもない。失うことなど最初からないというのに。ないはずなのに。あるはずもないのに。いるはずもないあなたに、僕は……僕は……

　ゆっくりと、それでも僕の足は止まることなくあなたの部屋へと向かう。それまでに僕が正気を取り戻すか、狂気を手に入れるのか、僕にはどうすることもできなかった。正面玄関を迂回し、駐車場から非常階段へと上ろうと上を見上げたとき、あなたの部屋のあるほうを向いたとき、そこにあなたは立っていた。

いるはずもないのに。会えるはずもないのに。

「ど、どうして……」
僕は自分で言って、おかしくなってしまった。自分で自分を笑うしかなかった。あなたは僕をいつから見つけていたのだろう。僕が気づくより、ずっとずっと前から僕を見ていたのだろうか。僕は不意に止まった足を再び前に運ぼうとした。一瞬のためらいを乗り越えて、僕が冷たい雨にさらされた冷たい非常階段の一段目に足をかけると、上のほうで階段を誰かが下りてくる気配がした。あなたは信じられない速さと静かさで螺旋階段を駆け下りてくる。僕は思わず、それに見蕩れてしまい中途半端な姿勢のまま、あなたが降りてくるのを待つことになった。

「キクちゃん、ごめん。オレ……」
あなたの耳に届くはずの声は、雨音と濡れた路面を走る車の音で掻き消された。僕は傘をたたみ、再び階段を上り始める。あなたは僕が階段を昇り始めたのと同時に降りるのをやめた。何がなんだか、考えるよりも先に、僕とあなたの距離はようやく会話ができる距離にまで近づいていた。あなたの表情を見るのが怖かった。僕はあなたの足――白いスニーカーを素足で履き、細いジーンズは、あなたの長い足をより長く――もちろん階段の下から見上げているという状況もそれを助長していたが、ため息の出るようなすらりと伸びた足から腰、そこで初めてあなたが傘を持っていることに気づいた。それは男物の傘だった。

「今日ね。傘を持っていかなかったの。そしたら、部屋まで送ってくれるって……ごめんなさい。わたし……」
押し殺したあなたの声、あなたの小さく、白い息の向こう側で動く口元は、僕の心の中の凍てついてしまった何かを一気に溶かし、止まってしまった時を一気に突き動かした。
「わたし、約束を――」
あたなの瞳が僕をどんな表情で見ているのか、それが怖くて僕は駆け出していた。持っていた傘を置き去りにしてあなたの立っている場所まで一気に駆け上がった。そしてあなたを抱きしめ、あなたの唇に僕の唇を合わせた。僕は強引にあなたの瞳を閉じさせた。

以外にもあなたの頬は冷たく、あなたの身体は僕と変わらないほどに冷えていた。まさか――

「も、もしかして、外で待っていたの？」
「きっと、来るんじゃないかと思って、電話を切った後、タバコを買いに行くって嘘ついちゃった。あー、嘘じゃないか。本当にタバコは買いに行くんだから」
「ごめん。どうしても、会いたくて……」
「いいのよ。でも、今日は、もう、だめだから」

ようやくあなたの目を見ることができた。僕はあなたの瞳の中に、何も見つけることができ

なかった。悲しみ、、憎しみ、哀れみ、怒り、慈しみ、喜び、安らぎ……僕の知っているようなものは、どこにも見つけることができなかった。僕にはそれがどうしても納得がいかなかった。

　だから僕は——

「だ、だめ、やめて、こんなところで……だめだって。だめ……」
　僕はあなたを愛撫した。舌を絡ませ、声が漏れないようにした。冷たい手であなたの身体を弄り、ジーンズのボタンをはずし、ファスナーをおろした。あなたは力なく抵抗し、僕は無理やりにあなたを犯した。

　僕は、狂ってしまった。

　息を殺したよな、それでも激しい息遣いは、白く立ち上り、暗闇に解けていく。僕は螺旋階段をすごい勢いで駆け上がるような悦楽にも似た苦しさに酔いしれ、その一方であなたの存在がどこか遠い存在になっていくのを感じていた。僕の目の前にいるあなたは、一体全体、誰なんだろう。

　一瞬の高揚感の後の、どうしようもなく後ろめたいような、目眩のするような感覚に襲われながら、僕はあなたに見送られながらその場を去った。

　僕は、狂ってしまった。

　そうでなければ、僕は、僕自身を許せない気持で、やはり気が狂うしかなかった。

　雨は、より激しく、より冷ややかに、僕の世界を打ちのめした。翌日あなたが僕に電話をかけてくれなかったら、僕はきっと、本当に狂ってしまったかもしれない。あなたはまるで何事もなかったかのように振る舞い、僕もそれをよしとした。よしとするしかなかった。

　無遠慮な距離にあなたを置くことを、僕の中の何かが許そうとしなかった。それは自意識が過剰なせいなのか、ただ、あなたに自分の弱い部分を見せたくなかったのか。僕の心は晴れることはなかったし、それでも雲の隙間から見えるわずかな光は、僕の縮こまってしまった心を癒すには十分なくらいだった。あなたはいつでも僕の注意を引くような存在であり続けてくれた。最期の時まで……

　その理由（わけ）を知りたい。ただそれだけだった。あなたが逢えないというのであれば、きっともう、逢えないのだろう。最期がどんなにみじめでも、何も知らないままに時を過ごすのは地獄のような苦しみに思えた。知ってしまったことで苦しむのかどうかは、知るまではわからない。わからない痛みよりもわかっている痛みをどうにかしたい。ただそれだけでしかなかった。いや、それすらも後から考えついたことで、あの時は、あなたに逢えない事実を受け入れることができずに、無遠慮を装って、泣きついただけなのだ。

　最近知り合った男がいるのだという。その男は今のバイト先――要はキャバクラの客である。そんな男にものの見事にあなたを寝取られたのか？

　言葉汚く自らをののしり、さげすみながら僕は歩いた。

　待ち合わせの場所――そこは僕とあなたが初めて二人で会ったファミリーレストランだ。なんて皮肉なんだ。どこまでもよくできた話だ。しかし、僕には選択する権利はなく、拒むべき理由も僕の中にしか存在しなかった。それは本当に小さな小さなことでしかないのかもしれない。それでも今の僕を傷つけるには十分なほどに、僕は弱っていた。

「実は、いろいろと彼に相談していたの。彼にはすべて話したわ。あの人のことも、ふー君のことも」
　あなたは僕が聞きたいようなことをまるで全部わかっているかのようにわかりやすく、簡潔に、無駄なく話してくれた。僕はうなずくしかなく、コーヒーが冷める暇もないほどに用件は終わってしまった。そんなことで――そんなことで終わってしまうような関係だったのか？　でも僕いには何も言えない。

　紹介された男は、まるで非の打ちどころもないような普通でまじめで、しかも理路整然としていた。彼の話には嘘もなければごまかしもない。僕と同じようにあなたを――いや、彼女を心配し、大事にする気持ちが伝わってくる。そしてそれを実行するだけの器量がありありと見て取れた。そう、彼は大人なのである。僕はただの音楽好きの学生でしかない。

　何を　拒むことが　できるというのか

　僕はもう、あなたの――彼女の顔を直視することができなかった。

「キクちゃんを、大事にしてあげてください。僕にはできなかったけど……お願いします」
「約束するよ。ありがとう」
　なんで『ありがとう』なんだろう？　なんで『お願いします』なんだろう？　なんで握手をしているんだろう？

　こんな滑稽な別れ話があっていいのか？

　店を出て、僕は握手した右手を眺め、思わず胃の中のものを出しそうになり、手で口を押えた。現実感を喪失したまま、僕は部屋に閉じこもり、そして泣いた。何もかもが恨めしく思え、何もかも壊したくなり、そんな自分を責めては毛布にくるまり、あなたの柔肌を想像し、それに反応する自分の体を恨めしく思い、自らを慰めた。

　僕は、あなたを　失った。

　一本の電話で　終わってしまう。

　そんなものだったのだ。

　それだけのものだったのだ。

　ただ、それだけなのだ。

「どうした？　なんかいいことでもあったのか？」
　精彩を欠くという言葉が、その時の僕にはぴたりだった。恋愛ということでいえば、僕は成功した試がなかった。それはなにも珍しいことではない。僕に限らず、世の中は恋愛に失敗した人間であふれているし、失恋話を打ち明けるのに困ったことは一度もなかった。しかし、今回のは特別だった。何がどう特別なのか、食欲がなくなったり、酒をどんなに飲んでも酔えなかったり、友達と遊びに行っても面白くなかったり、そんなものかといわれれば、そんなものだが、それでもともかく僕には特別だった。

「まだ引きずっているのか？」
　大迫さんはタバコを加えながらライターを探してジャケットのポケットを上から順番に手で探る。僕はオイルライターに火をつけて大迫さんに差し出した。大迫さんはズボンのポケットに手を突っ込みながら口でくわえたたばこに火をつける。
「あー、わりい。あれ、ライターどこやったっけなぁ……」
「タバコの箱の中に一緒に入ってるとか？」
「あっ！」

　ジャケットの胸のポケットからマイルドセブンを取り出すと、タバコの箱の中からピンク色の１００円ライターが出てきた。
「これからは探し物があるときは真っ先に風間に聞くことにするよ」
「自分で探しているうちは見つからないものです」
「なんだよ、ずいぶんと詩人じゃん」
「そんなんじゃないですよ。いつまでも引っ張ろうとは思ってないんですけどね」
「合コン、途中で帰ったんだって？」
「だって、あれはほら、人数的にも男のほうが多かったし」
「気ぃ使いすぎだと思うけどな」
「気は使ってませんよ。それにあまり好みのタイプが違うというか……」
「年上がいいか？」
「あ、あのですね。僕はお姉さま至上主義とかじゃありませんから」
「ボーイッシュな？」
「もう、そんなことまで覚えてるんですかぁ！」
「だって、聞かれてもないのにしゃべるからさ。こっちだって覚えるわ」
「そんなに話しましたっけ？」
「それにお前、風間のそれは俺の好みとかぶるからな」

　実際、大迫さんにはいろんなことを話していた。ほかの連中とはともかく、大迫さんとは二人

きりで飲む機会が多く、そういう時は大体恋愛に関する相談というよりも、恋愛観について語り合うようなおいしい酒の飲み方だった。
「神は乗り越えられる試練しか与えないって、あれは嘘だな。神様なんて言うのは、だいたいがもっと大雑把で……」
「いじわる？」
「そうそう。意地悪。風間、いいか。この大学に通っているやつで、成功者なんて一握りしかいない。俺の知る限り、お前くらいのものだ。ほとんどの奴ら、１回や２回受験を失敗してここにきている。それもほとんど望まない形でだ。そうなるとここには神に愛されたものばかり来ていることになる。でも、同じ時間軸、違う場所では有名私立大学に受かって青春を謳歌しているやつらがいる。奴らはキリギリスのくせに、いざとなるとアリよりも勤勉で、しかも勝利の女神に愛されている。世の中の不平等は、平等に俺たちの頭の上にあるのさ」

「言いたいことだけ言いますね。僕だって現役で受かったことがラッキーだったってことはわかってます。でも、一握りの成功者の側には入ってないと思いますけどね」
「現役で女がいて、それがボーイッシュで年上で、何が不満だ」
「で、ですからもう、別れたわけですから」
「それがどうした！　たった数か月でもいい思いをしたんだろう？」
「ま、まぁそれは否定しません」
「何もなかった奴に比べたら、どれだけましか」
「僕は悪いものと悪いものを比べて、どっちがいいって論法は好きじゃないですね」
「なるほど。それは一理あるが……」
　大迫さんはタバコをけし、大きく煙を吐いた。
「吐き出すものを、吐き出さないと、次のものは食べられないぞ。胃にもたれる」

　大迫さんの言わんとしていることは何となく僕にはわかった。
「しっかりと消化して、腹の中をすっきりさせないと、次にって気分いは、なかなかなれないですかねぇ」
「そういうこと。じっくり消化するのもいいし、胃液と一緒に吐き出すのもいい。それに酒の力がいるというのなら、またいつでも付き合うからさ。じゃぁ、次の講義いくわ。風間はどうするの？」
「せっかくの失恋です。部室に行って曲でも書こうと思います」
「なるほど。それもいいだろう。でもあまり講義サボるとあとで苦労するぞ」
「はーい。その時はいろいろとお願いしますね」
「ふん！おごれよ」
「生ビール一杯でノート一冊コピー」

　大迫さんは、席を立ち、僕も学食を出て部室に向かった。彼女を失ってから２か月。いまだに

あなたのことを忘れられそうにない。街の中を歩いていても、駅のホームで電車を待っていても、雑誌のグラビアを見ていても、僕はあなたの影を探してしまう。不意にあなたと同じシャンプーの香りが風に流れてきたりすると、その日一日あなたのことが頭から離れない。夢の中で見るあなたは、いつもつれなくて、はかない。

　気が付くと僕は、夜中に家を抜け出し、君の住むアパートへと足を運んでしまう。最初は理由があった。それは悪友からのエアメールである。ロンドンに行っている柏木からきた手紙をあなたの部屋に忘れていたことを思い出した僕は、それを口実に何度か電話をし、２度ほどあなたの部屋まで訪ねて行った。今にして思えばそれはストーカーのような行為だったと思う。数日後、その手紙は郵送によってあなたから僕の家に届けられた。これで僕とあなたの接点は何もなくなってしまった。それ以来、僕はストーカー行為をやめた。

　あなたと再会をしたのは、そんな折の不意な出来事だった。

再会

　僕が学生時代に働いていたレンタルレコード店。これといって思い出――そういえば店長にひどく怒られて、泣いたこともあったか――あなたと出会ったことを除けば、青春時代の取るに足りない出来事だった。時代はレコードからコンパクトディスクへとうつりつつあり、店は１９８６年の１２月いっぱいで閉める予定だったが、その後レンタルではなく、そのままレコードを中古販売し、店が完全に閉店になったのは１月も１０日を過ぎてからだった。

　それ以来あなたの部屋に行くことと、地元の友人たちと飲みに行く以外ではあの町に行くことは少なくなっていた。あなたと別れてからは特にそうだったが、それでも何か買い物をしようと思えば、結局そこに行くことになる。もしかしたらあなたに会えるかもしれない。そんなことを思ってみたものの、それが実現する日はまるで来なかった。

　初ライブを終えて、僕の心が多少なりとも平常心に戻り始めた頃、僕が偶然あなたとばったり出くわした。もし、あったら、何か言わなきゃ。そんな妄想をずっとしてきた僕だったが、いざその場面になると何一つ気の利いた言葉は思い浮かばなかった。

　いや、そんなことは取るに足らないことだ。

　あなたの姿を探しながら町をさ迷い歩く。ついに見つけることのできないあなたは、不意に僕の前に姿を現した。人並みに紛れ、お互いに３メートルもないような距離に来るまで気づいていなかった。僕はどことなく地面を見ながら歩き、あなたもきっとそうだったのだと思う。僕はあなたの細い足――見覚えのあるスニーカーにジーンズ姿の、あの日のままのあなたを視界に見つけたとき、思わず心臓が口から出そうになった。

　あなたはあなたで、声にこそ出さないが、たぶん「あっ！」と声を漏らしたのだと思う。その空気だけは僕に伝わった。そしてあなたは無意識にその手を下腹部に持っていき、おなかに手を当てた。その意外な行動に僕はすっかり戸惑ってしまい、もうすっかり暗くなっているというのに「こんにちわ」と声をかけ、次に「元気？」という前に、あなたが悲しそうな笑顔で「じゃぁ」と言ったので、僕は言いかけた言葉を飲み込み、少しだけ頭を下げて、あなたとすれ違った。

　すれ違いざまにあなたの心の動揺が僕を不安にさせ、あなたの残り香が僕を切なくさせ、走り去るあなたの後ろ姿に僕は困惑した。

「あれは、なんだったのだろう？」
　僕は君との思い出の中で、記憶から消し去りたいようなある夜のことを思い出した。それは僕が未熟で、思慮が浅く、傲慢で自分勝手で――つまり自分はとんでもなくひどい男だという思い

から逃げ出そうとして、忘れ去ろうとしていたあなたとの会話。

　僕はあなたに甘えて、時々避妊具をつけずにセックスをした。それがどういう結果をもたらすのか、わからない二人ではなかったが、結局そういうことになってしまったのである。
「生理遅れているんだぁ」
「どのくらい？」
「もうすぐ２週間になるかなぁ」
「うーん。大丈夫だよ。きっと」
「ならいいんだけどね」
「あんまり心配すると想像妊娠とか、そういうこともあるって聞いたこと歩けど、どうなんだろう？」
「想像……妊娠？　そういうことはないと思うわ」
「そうなんだ」
「そうよ。子供がほしいなんて、今は望んでないもの」
「僕のところは３人兄弟なんだ。最近は子供を作らない夫婦もいるっていうけど、僕はやっぱり自分の子供がほしい」
「そうね。わたしも子供は好きよ。でも、それと今ほしいかということとは別ね」
「ねぇ、もしも――」
「うん？　なに？」
「いや、ゴメン、なんでもないんだ。ただちょっと、考えてみただけ」
「なにを？」
「それは――今はいえない」
「あら、わたしに隠し事？」
「隠し事なんかないさ。ただちょっと恥ずかしいだけだよ」
「そうなんだ」
「そうかもしれない」

　その後その話は一切していないし、それ以来、僕はあなたと一夜を共にすることはなかったかもしれない。でも、もしそうだとしたら――

「子供が……できた……とか、まさかそんなことは」
　だとしたら、僕はいったいどうすればいいのだろう。あなたを追いかけてその真意をただすのか。いや、仮にそうであったとしても、あなたはきっと本当のことは言わないだろう。じゃあどうする。僕にいったい何ができる。僕は、僕は――

　僕は、未熟者で、卑怯者だ

　僕の中で、あなたとのことがひとつの物語として完結している今、僕はすっかりあなたのことを忘れてしまっていた。あなたは僕の中であの日のままで生き続け、そして僕の心の一部ごとすべてどこかに持ち去ってしまった。僕は恋することを恐れ、恋することを諦め、人を好きになることはあっても恋だけはしまいとかたくなになった。

　あなたと偶然であった日から一月もたたないうちに、あなたがこの町から出て行ったことを僕は知った。あろうことか、僕は再び、あなたに会おうと、あなたのアパートへ行き、そこであなたの住んでいた部屋が空き部屋になっていることを知った。あるいはあなたは僕と別れたときにあったあの男と一緒に住んでいるのかもしれない。だとしたら、あなたはきっと幸せを手に入れたのだろう。きっとそうなのだ。もし、そうでなければ僕はどれほど卑劣な男なのであろうか。道化を演じているほうがまだいい。そう、僕は道化を演じ損なった狂ったピエロなのだ。

　かくして僕は、あなたの記憶を封印し、あなたの影に背を向けた。あなたのささやきに耳を塞ぎ、あなたの香りから逃げ去った。そしていつしか、あなたを「君」と呼ぶようになっていた。

メロウ３

　恋愛というものについて、僕が語れることはそれほど多くはない。だが二十歳そこそこに若造に聞かせるくらいの話の種はいくらでもある。それでも僕は君とのことを語ることはほとんどなかった。僕がするのは、およそその前か、そのあとのことで、せいぜい年上と付き合ったことがあるかないかの話のときにするくらいだった。

　僕が君の話を誰かにしたがらないのは、やはり僕の中で君との物語はどこか完結してないのではないかという思いがあるからに他ならない。そう思えるようになっただけ、僕は大人になったのかもしれない。

　君と別れてからというもの、僕は山崎まさよしの唄のように、会えるはずもない君の姿を、町の片隅、急行待ちの駅のホームで君の姿を探し続けていた。不意に胸の鼓動が高まり、君がそばにいるのではないかとあたりを見回してみる。しかし、一度としてそのようなことは起きやしなかったし、きっとこれからもおきないだろう。

　人は未熟だから恋をする。恋をするうちはまだまだ未熟なのである。恋をすることは敗者の側に身を置くことであり、どんな負け方をするかという違いだけで、敗者には変わりはない。それでもあえて敗者の側に身を置くことができるのは若さの証明であろうか？　それとも愚者の戯れだろうか？

　僕は敗者の側に身を置くことを嫌い、妻を娶り、子を授かり平凡で安寧な暮らしを手に入れた。でも、ときどき――そう、不意に目が覚め、まだ夜が明けきらぬ彼そ誰どきに、窓の外をのぞくと、そこにぼんやりとした青白いつきが、今にも消えてしまいそうにはかなげに浮かんでいるのをみると、君の事を思い出す。あるいは、雨が降る町の中で螺旋階段を見上げると、そこに君がいるような気がしてしまう。狂っていた頃の自分の影を水溜りに映してため息をつく。

　僕は老いてしまったのだろうか？

　あるはずもないもうひとつの物語に思いをはせるとき、僕はまた、君に会えるような気がしてならない。そのとき、僕は君に何を話しかけよう。どんな言葉を君に用意しよう。そうすれば、君への思いは消化され、僕の中で一冊の本として、いつでも手にとって読むことができる思い出の本棚に収納されるのであろうか？

　あの日の僕は、どうしようもなく未熟だった。そして、今でもそれは変わらない。僕はきっと、君を目の前にした途端に、あの頃の未熟な自分に戻ってしまうに違いない。そして心無い言葉で、あなたを困らせたり、あなたに甘えたりするのかもしれない。それをあなたは許してくれ

るだろうか。拒んでくれるだろうか。

　終わらない物語を歌い続ける吟遊詩人よ

　ぼくもまた、まだ揺れているような錯覚の中で、重ねてきた年月を振り返りもせず、ただ、螺旋階段を昇り続けている。決して終わることのない君の螺旋の中で。

終章

　螺旋階段――立ち並ぶビルの、少し奥まったところ。或いは人が行き交うメインストリートにむき出しになっているそれは、人の気に止まることはなく……それでも僕の注意を引きつけて止まなかった。雨の日であっても、僕にはもう心を乱されることはない。雨粒が、空が流した涙のように思えた自分を潔いとは思わないが純粋だったとは認めてもいい。螺旋階段に引っかかっていたのは雨粒ではなく、惨めな僕の心だったのだ。無意味な抵抗を繰り返し、それでもやはり地面に向かって螺旋を描き、落ちていかなければならない。まるであの日の雨のように。

　坂道を下り、ふと後ろを振り返れば、灰色に曇る空から降っていた雨はやみ、雲の合間から明かりがさしている。歩道橋の階段には色とりどりの傘が姿を消し、僕は少しだけ寂しくなり、あなたが雨の日に口ずさんだ歌を思い浮かべる。

　「雨、あがったね？」と僕は問いかける
　「雨上がりってどことなく寂しくならない？」あなたは聞き返す
　そして僕は首を振る「僕にはわからないよ」
　「でも、雨も太陽もその人の心のあり方によって見え方が違うというの？」
　あなたは拒んだのか、それとも受容したのか
　「好きだよ」僕はあなたを求めてみる
　「……知ってるわ。でも、知らない」

　あなたは僕を、受け入れてくれた。少年が太陽の陽射しを受けて成長して青年になり、青年は、星の空にロマンを感じ、月の光に恋焦がれる。月はその夜、その夜で表情を変え、青年を困惑させる。やがて、青年はその月が決して自分の思い通りにならないと知り、悟り、そして大人になる。

　いつか、あなたを自分だけのものにしたい。

　それを愛だとは知らずに、愛だとは言えずに、愛ともわからずに。

　あなたは何でも僕の望みをかなえてくれた。僕が望んだのは、あなたの細い指先、短い髪、白い肌、熱い息。でも、それ以上のものを望んだとき、不意に時間は止まってしまった。ハンマーで心臓を叩き潰されるような痛みと、鞭で首を締め上げられるような苦しみに耐えることを僕に強いる。

　あなたのことを思い出しては、僕はその苦しみに耐えなければならなかった。

「あのね……もう、会えないかも……うん、会えないの」
　たった一本の電話で、あなたは僕の世界の時計を止めてしまった。でも、その時計も少しずつ時を刻み始める。積み重ねたときは、あなたとの溝を決して埋めることができないほどに深くえぐり、幅を広げていく。

　僕は、泣いていた。

　螺旋階段――雨の日、二人がそこで愛し合ったことも望郷のかなたへと消えうせてしまい、あなたの吐息や囁きも、僕の耳に聞こえなくなった。あなたの顔さえ思い出せなくなってしまった僕は、それでもあなたの肌のぬくもりを忘れたことはなかったのは、あなたは僕にとってそういう存在――青春というあやふやな、それでいて決して忘れることのできない、あるいは消えることのない心の傷であったのかと、僕を惑わせる。

　あの日、あの時、僕らは愛し合っていたのだと、そして一人身をもだえながら過ごした眠れぬ夜、夜中に家を抜け出し、アスファルトに寝そべってみた都会の星空、あさぼらけの中で頼りなげに空に浮かんでいた青白い月。それははみんな、そこにあったのだ。

　そう、君はそこにいたのだ。僕と一緒に。

　僕一人で積み重ねた時は、あの頃のあなたより、僕を少しだけ大人にした。だから僕は今、あなたのことを「君」と呼ぶ。この世界のどこかに君がいるのでだとしたら、それはきっと『君』でもなければ『あなた』でもない、僕とはまったく違う時間を過ごし、決して交わることのない世界と時間軸にいるほかの存在であるはずだと、僕は思う。

　すべてが愛という言葉で集約できないのだと知ってからは、そうではなかった頃の自分を懐かしみ、あなたと、そして僕の間には、どんな形にしろ『愛』はあったのだと、信じられる自分でありたいと思う。それが間違いや錯覚であったとしても……

　僕は再び前を向き、坂道を降りていく。あの螺旋階段を登りきったところから見えた景色をこの目で確かめるために。

　あさぼらけ――あなたの部屋から出るとき、あなたは部屋の中からそっと外を覗いて、人気を気にする素振りを見せながら、僕にささやく。
「明け方の月はどこか儚げね。きらいよ、わたし」
　次にいつ会えるかと、聞こうとして、いつもはぐらかされる。でも、確かにあなたの言うとおり、明るみだした空に溶けていく月を眺めていると、満月の狂おうしさのほうが、まだ、まし

に思えた。僕は酔っていた。恋という酒に酔い、愛という小さなともし火を見失っていた。

　もしかしたら、あなたはその小さな小さなともし火を見ていたのかもしれない。僕に見えないものを、見ていたのかもしれない。

　運命のいたずらは、いつか君と僕を鉢合わせるのかもしれない。そのとき僕は、君に何を語ろう。君に何を聞こう。でも、僕は知っている。

　奏でられる旋律は
　おそらくある程度
　決まってるんだ

おわり